

南朝正平二十三年 北朝應安元年三月十一日

被爲在候ニ付而者、何卒爲御崇敬勅會御法事被仰付、御下行等も被下置候者、難有仕合奉存候、何卒御沙汰之儀、伏而奉懇願候、以上、

(應應三年)
卯正月

河内國檜尾山
觀心寺

山陵御奉行(忠孝)
戸田大和守様

御役人中

來ル三月十一日後村上天皇五百回御忌言上呈上仕候ニ付而者、古來法用之勤來も御座候得共、近來御陵も結講ニ御再造被爲在候ニ付而者、爲御崇敬勅會御法事被仰付、御下行等も被下置候御儀ニ御座候哉、此段御伺奉申上候、以上、

卯二月

河内國檜尾山
觀心寺

山陵御奉行
戸田大和守様

二月七日差出ス、

御役人中

室町頭(前)
藤嶋諸陵頭

二月十一日差出ス、

御役人中

(真書)
「十二日藤嶋殿方呼出し、十三日參上、又十五日歸國相頼候、」

態々以飛脚申上候、春暖相増候處、彌以御山内中様益御勇健、珍重奉賀壽候、然者先達而最勝院様御上京被遊候而、此度御陵御法事ニ付、藤嶋家、戸田家へ御伺旁御願書御差出候ニ付、先頃方藤嶋家御返事承リニ惠音様へ相願、私方方案内仕候而、御出被下候様ニ相願候處、去月廿九日藤嶋家へ伺旁御出被成候得共、同家留主中ニ而、又二日御出被成候得、又候留主中、昨日又候御出被成候得、留主中ニ候得共、相見へ被御申置ニ付、戸田家罷出候様ニ被申候ニ付、則今日戸田家へ御出被下候得者、爲御回料御銀三拾枚相下り、尤二重具り臺ニ付相下り申候間、外ニ御陵破損致候處も有之候得、早速ニ願出候様ニ申被渡候間、又御法事ハ於當地般舟院ニ而相勤候様子ニ御座候、就而戸田家方御當日御參詣も有之候哉も難計候間、そうじ等精々致置候様ニ被申渡候間、右之段御達し申上度候、乍併御陵破損致候得、早速ニ各々様之内御上京被下候様ニ願上候、

一相下り申候銀三拾枚、定而金と打替ニ相成申候と奉存候間、私方へ慥ニ御預り申上候、右臺ハ飛脚へ爲持上候間、御入手可被成候、

一御勅使ハ無御座候、此段申上候、先ハ右之段以飛脚申上度如斯ニ御座候、恐々謹言、

二月四日

肥前
仁兵衛

南朝正平二十三年 北朝應安元年三月十一日

南朝正平二十三年 北朝應安元年三月十一日

一七八

觀心寺御一山

楨本院様

最勝院様

御年預中様

尙々御出願と有之候得、早速ニ御上京被遊候様ニ奉願上候、

〔觀心寺參詣諸堂巡禮記〕

○龍門文 庫所藏

永和四年三月十二日參詣、今日者檜尾御忌日也、○中又當本堂東有檜尾御墓所、○中自

彼墓所東有堂、々前有五輪塔婆、彼堂者後村上法花三昧堂、前石塔者女御御墓云々、是

後醍醐天皇女御殿勾當内侍申御事也云々、○中略

永和四年三月十九日記之、

賢耀（花押）

〔觀心寺文書〕

○河内

於後村上天王（尊）陵前當山一薦法印秀圓一首詠之、

河州檜尾山觀心寺御陵者南帝後村上天皇也、倩按、此君之古、先帝開聖運、令歸洛、同

繼萬乘之天位、在翠簾之中、仰十善玉體、居綿繡之褥上、天下之喜歡諒如何許乎、悲

哉、爲逆臣奉襲懸、交外都之塵、一日片時不住安堵之叡慮、終建德二年三月十一日崩

御陵ノ形

法華三昧

元祿十一年

秀圓參拜

御陵上ニ

檜樹アリ

檜百本ヲ

陵側ニ植

答申ス

觀心寺山

陵奉行ニ

御、神止此山、抑當山之敝位任官封祿除役皆是所賜此君之、（也カ）故振威於諸山之峯、曙光於

他寺之場、其恩如于須彌、其德似于溟海也、因茲合山大衆毎月御忌日理趣三昧、每朝供

養法一座奉備追福也、于爰時一薦法印大和尚位秀圓、七十五歳而、當年元祿十一戊寅二

月、差中一日而則天皇御國忌日也、適憑鳩杖彼登于御陵、而懇重三拜、印咒而奉廻向

也、御墓之茨茫茫乎、印之椿不貞、和尚悲歎之泪餘袖、則墓上伐拂草木、令植百本之

檜、因寄椿詠和歌、暫慰神慮也、其前書曰、

元祿十一とし衣更十一日に、後村上天皇の御陵にまふてけるに、御しるしの椿もくさ

くの木末の繁にさたならねい、みなく切はらはせ、御塚の廻りに百本の檜を植、御

神の御心を慰んとみつからつたなきをわすれてかくなん、

尊も實植の椿としをへて山より高き君かみさゝさ

口上覺
乍恐口上

河州錦部郡檜尾山
觀心寺惣代

一御朱印高廿五石、

一當山境内ニ御座候後村上天皇御陵之義（儀下同シ）、人王九十九代後光嚴院様御宇延文四年、同

南朝正平二十三年 北朝應安元年三月十一日

一七九

南朝正平二十三年 北朝應安元年三月十一日

一八〇

繪圖ヲ提出ス

國天野山^ハ當山江御臨幸、皇居被爲在候、同御宇應安元年三月十一日崩御、則今之陵ニ奉葬候由申傳ニ御座候、則當時ニ到而も毎月十一日御國忌法事相勤罷在候、右御尋ニ付奉申上候、以上、

一當山繪圖面差上候様被爲仰付、奉畏則相認メ奉差上候、以上、

安政二卯年

右惣代

印

四月十八日

御奉行所

以剪紙致啓上候、然者帝陵之義ニ付被相達候義有之候間、來ル廿八日四ツ時、當役所江印形御持參御參有之候様可得御意旨、大和守申聞如是御座候、

(應應二年) 十二月

戸田大和守内 松井良吉

小林仙三

觀心寺地中 槇本院

尙以御所勞ニ候^ハ、代人御差出、御自分御印形御渡可被成候、

錦部郡

觀心寺中

槇本院

外地中

山陵奉行
槇本院ヲ
シテ御陵
ヲ守護セ
シム

御陵取締
規定書

後村上天皇御陵御普請御成功ニ付、取締其方江申付候間、太切ニ可奉守護候、仍而給米可被下之處、國事多端之折柄ニ付、當分之内銀子被下之、

(應應二年) 寅十二月

規定書

- 一御陵御圍内聊ニ而も異變有之候節者、長役^ハ其旨早速可訴出事、
- 一御陵圍内之竹木類^ハ、小枝たりとも伐取候儀^ハ勿論、假令風雨ニ而幹倒れ枝折れ、又者自然立枯ニ及候共、一切手附申聞敷事、
- 一御陵圍内^ハ勿論、道筋等迄、精々入念御掃除いたし、荒蕪破壊ニ不至様時々見廻、太切ニ奉守護、又者雜人立入不敬等無之様、屹度可致制禁事、
- 一朔望廿八日ニ^ハ、長役之もの見廻、守戸掃除等之勤惰致點檢、又御國忌ニ者清服ニ而可致獻燈事、

獻燈ノ制

南朝正平二十三年 北朝應安元年三月十一日

一八一

長役及ビ
守戸ハ苗
字帶刀ヲ
許ス

一御懸り堂上方并寮之官人已下役人ニ至迄包直かましき儀一切有之間敷、萬一心得違之族於有之ハ、可及嚴重之沙汰事、
一長、守戸熟和之上、相互ニ助力いたし、無怠惰御守護可奉申上事、
一長、守戸とも苗字帶刀差許候上ハ、決而威權ケ間敷義ハ勿論、支配地頭之差配等、是迄之通相心得、謹慎謙遜專一ニ可相守事、
右之條件堅相守可申、萬一違背之輩有之ニおいてハ、可爲曲事候事、

覺

長役守戸
ノ任命

後村上帝陵長、守戸、去十二月廿七日被相達候義有之候間、何れも當役所へ被參候様、廻達を以申入候得共、于今答無之、如何之事ニ候哉、承り度、尤長、守戸壹兩輩此書面披見次第可被罷出候、以上、

(應應三年)
正月十四日

山陵奉行
役所

口上

帝陵之儀ニ付、舊冬十二月廿八日ニ上京致候様御差紙ニ御座候ニ付、早速長役、守戸者

大坂表迄罷出候處、長役、守戸之者兩人急病ニ取合當惑仕候内、日限も相切候處、皇上御停止御觸參り候間、是迄差控仕居候、此段惣代ヲ以御歎願仕候、何卒以御慈悲宜敷御沙汰奉願上候、以上、

河内觀心寺惣代
最勝院

慶應三年

卯正月

戸田大和守様

御役人衆中

(端裏書)
「差出寫」

口上覺

御奉書ヲ以苗字帶刀御免被仰付、難有仕合奉存候、則苗字之儀左之通奉申上候、以上、

慶應三年

卯二月

長役永田林兵衛
守戸西田榮次郎
同 西端嘉藏
同 松森金兵衛

長役守戸
交名

戸田大和守様

同 辻本喜兵衛

御役人中様

御一新神社寺院建物反別等御調ニ付御届書扣

略○上

一後村上天皇御陵 五拾間四方并道筋貳町、巾貳間、

右舊幕御朱印地之内ニ御座候、去ル元治元子年御普請被下候、從往古毎月十一日御
追薦御法事無怠相勤罷在候、

御陵境域

略○中

一寺中

略○中

惣持院破壊、

同門

右寺後村上天皇御行在所、

行在所惣
持院破壊

略○中

右之通相違無御座候ニ付、御届奉申上候、中古少録〔總〕ニ相成候以後、堂舎等修覆も行届不
申、追々大破ニ相成、舊跡之靈地殆衰微仕、奉恐入候、此段偏ニ御憐察奉希上候、以
上、

慶應四辰年五月

御裁判所

右一山惣代

威徳院

○後村上天皇、陸奥國ニ赴カセラル、コト元弘三年十月二十日ノ條ニ、親王ト爲ラ
セラル、コト建武元年五月二十三日ノ條ニ、西上セラル、コト同二年十二月二十二
日ノ條ニ、叡山ノ行在ニ詣リ給フコト延元元年正月十三日ノ條ニ、御元服、三品ニ
敍シ陸奥太守ニ任ジ、尋デ任國ニ赴カル、コト同年三月十日ノ條ニ、國府ヨリ靈山
ニ移ラル、コト同二年正月八日ノ條ニ、西上セラル、コト同年八月十一日ノ條ニ、
鎌倉ヲ發シ高師冬等ト美濃青野原ニ戦ヒ伊勢ニ入ラセラル、コト同三年正月二日ノ
條ニ、伊勢、伊賀、奈良ニ轉戦シ吉野ニ入ラセラル、コト同年二月二十一日ノ條ニ、
陸奥ヲ鎮ゼントシ伊勢ニ赴カル、コト同年閏七月二十六日ノ條ニ、海上颶ニ遇ヒテ
伊勢ニ還ラル、コト同年九月是月ノ條ニ、吉野ニ還リ、尋デ皇太子ト爲ラセ給フコ

南朝正平二十三年 北朝應安元年三月十一日

ト同四年三月是月ノ條ニ、受禪アラセラル、コト同年八月十五日ノ條ニ、高野山ニ
祈リ給フコト興國三年四月二十八日ノ條ニ、覺明ヨリ受戒セラレ、之ニ三光國師ノ
勅號ヲ賜ヒシコト正平二年四月三日^補遺ノ條ニ、高師直等吉野ヲ犯スニ依リ紀伊ニ幸
シ給フコト同三年正月二十四日ノ條ニ、法印賴寶ノ請ニ依リ空海筆法華經ニ宸筆ノ
外題及ビ勅書ヲ賜フコト同五年四月二十九日ノ條ニ、御願文ヲ水無瀬宮ニ納レテ天
下ノ恢復ヲ祈リ給フコト同年七月二十二日ノ條ニ、房玄ヲ召シテ後鳥羽天皇怨靈祈
謝ノ事ヲ命ジ給フコト同六年四月四日ノ條ニ、尊氏降ヲ請フト雖モ許シ給ハザルコ
ト同年八月七日ノ條ニ、尊氏義詮ノ降ヲ許シテ直義ヲ追討セシメ給フコト同年十月
二十四日ノ條ニ、北朝ノ天皇及ビ皇太弟直仁親王ヲ廢シ給フコト同年十一月七日ノ
條ニ、御不豫ノコト同七年正月十五日ノ條ニ、賀名生行宮ヲ發シテ河内東條ニ著シ
給フコト同年二月二十六日ノ條ニ、攝津住吉ニ行幸シ、津守國夏ノ住吉殿ヲ行宮ト
爲シ給フコト同月二十八日ノ條ニ、天王寺ニ行幸シ給フコト同年閏二月十五日ノ條
ニ、石清水八幡宮ニ行幸シ給フコト同月十九日ノ條ニ、光嚴、光明、崇光三上皇及ビ
直仁親王ヲ八幡ニ迎ヘ給フコト同月二十一日ノ條ニ、賀名生ニ遷幸シ給フコト同年

五月十一日ノ條ニ、北畠親房ヲシテ後醍醐天皇御撰ノ年中行事ヲ書寫セシメ之ヲ校
合シ給フコト同年是冬ノ條ニ、告文ヲ水無瀬御影堂ニ納レ給フコト同八年六月二十
二日ノ條ニ、千首和歌御會ヲ賀名生行宮ニ行ヒ給フコト同年是歲ノ條ニ、天野ニ行
幸シ金剛寺ヲ行宮ト爲シ給フコト同九年十月二十八日ノ條ニ、法印良空ヨリ琵琶ノ
祕說ヲ受ケ給フコト同十年四月八日^補遺ノ條ニ、弘真ヲシテ理趣經大綱釋ヲ作ラシメ
給フコト同十二年八月二十六日ノ條ニ、二條師基ノ第ニ方違行幸シ給フコト同年十
二月是月ノ條ニ、重ネテ良空ヨリ琵琶ノ祕說ヲ受ケ給フコト同十三年四月二十日ノ
條ニ、新待賢門院崩御ニ依リ、哀悼ノ御製ヲ阿野實爲ニ賜フコト同十四年四月二十
九日ノ條ニ、觀心寺ニ遷幸シ給フコト同年十二月二十三日ノ條ニ、觀音寺ニ行幸シ
給フコト同十五年五月九日ノ條ニ、住吉社ニ行幸シ給フコト同年九月是月ノ條ニ、
覺明ニ就イテ禪ヲ修メ給フコト同十六年五月二十四日覺明示寂ノ條ニ、御製ヲ宗良
親王ニ賜フコト同十七年八月十五日ノ條ニ、光嚴法皇ト吉野ニ對面アラセラル、コ
ト同年九月一日ノ條ニ、後醍醐天皇第二十五回聖忌ニ依リ、法華御八講ヲ攝津莊嚴
淨土寺ニ修シ給フコト同十八年八月十六日ノ條ニ、法華御八講ヲ同寺ニ修シ、御製

南朝正平二十三年 北朝應安元年三月十一日
一八八
ヲ花山院家賢ニ賜フコト同二十一年二月十七日ノ條ニ、葉室光資ヲ幕府ニ遣シ媾和
ノコトヲ議セシメ給フコト同二十二年四月二十九日ノ條ニ、義詮ノ使攝津能直ニ寮
馬ヲ賜フコト同年七月二十九日ノ條ニ、花山院長賢薨ズルニ依リ、琵琶ノ撥ニ梵字
ヲ書シ御製ヲ賜フコト同年是歲ノ條ニ、第三回聖忌法會ノコト建徳元年三月十一日
ノ條ニ、第九回聖忌御佛事ノコト天授二年三月十一日ノ條ニ見ユ、

〔参考〕

〔花押彙纂〕

天皇 後村上天皇
之部

○鰐淵寺文書^{十一} (田雲)

正平六年九月八日御願文

○雲樹寺文書 (田雲)

二月十七日御書狀

○雲樹寺文書 (田雲)

六月五日御書狀

南朝正平二十三年 北朝應安元年三月十一日

五條文書

六月二十四日御書狀

御遺蹟
賀名生

住吉

〔大和名所圖會〕

六 吉野郡

後村上帝皇居

黒淵寺にあり、俗に黒木御所といふ、傍に總福寺の故址あり、

〔攝津志〕

二 住吉郡

古蹟

後村上帝行宮

正平七年足利義詮伴而降、帝亦陽許之、二月廿六日出賀生宮幸住吉、以神官津守國夏第爲行宮、

〔住吉松葉大記〕

廿一 神寶部

正印殿御篋

今按御正印者天子之御印也、○中 今按昔天皇

御座所者、謂後村上天皇八幡合戰之前、行幸住吉皇居津守國夏館、十八日之間滯留御座矣、此時國夏昇正三位也、

金剛寺

〔河内志〕

二 錦部郡
佛刹

金剛寺

在天野山、山上闍若巍然、僧房七十下列、又有古祠稱丹生神、昔南帝駐蹕、以食堂摩尼院爲行在所、北朝三帝遂於觀藏院、

〔河内名所圖會〕

一 錦部郡

後村上帝行宮

天野山金剛寺にあり、其頃天野殿と稱す、皇居今の食堂を用らる、

天野山金剛寺、食

堂文殊菩薩

運慶の作、長貳尺五寸、寶頭盧尊者堂内に安す、同作、長貳尺五寸、延元年中後村上帝行宮とし給ふ、

觀月亭

五佛堂の北にあり、後村上院月見の御殿也、今に唐破風の御殿造り

也、又五佛堂より廊下あり、弘法大師の影を安す、眞如法親王の筆也、脇土不動尊、愛染明夫當山は、葛城王は運慶の作、俗に御影堂といふ、西室金輪佛頂尊の像は、貞享年中桂昌院殿の御寄附也、

の崇岡、古佛轉輪の聖跡、阿育王鐵塔奉收の靈域にして、僧正行基の草創なり、○中 同九

年南帝の皇居を當山に移し、伽藍食堂を常御殿となし、楠左衛門尉正儀、和田和泉守正

武の英雄皇居を守護し奉り、天野殿と稱す、同十年南帝の微君、僧徒に勅して音樂を傳

受なさしめ、有銘の樂器を寄附し、法會を潤色し給ふ、同十一年持明院法皇御灌頂の志

願あり、むかし嵯峨帝の御灌頂ありし時、弘法大師自畫し給ふ胎金兩部の大曼荼羅をこ

ゝに遷して本尊とし、又禪惠法印をもつて灌頂の師とし、遂に其曼陀羅を勅して當山に

納む、後村上帝叡聞に達し、泉州大鳥庄、攝州山田庄を結縁灌頂の料とし、四海清平の

御修法毎年正月にこれを行はる、同十五年中興阿觀を贈僧正に任し、代々の聖主將軍家

國司の崇敬淺からず、寺記

淨土寺

〔攝津志〕

二 住吉郡
佛刹

淨土寺

有石盥盤、鐫曰應永二年造、又僧叡尊自誓受戒懸錫于此、以弘律部、後村上帝車駕駐于此、親製和歌永留于寺庫、

〔河内國名所鑑〕

一 觀心寺

後村上天皇御廟、實惠の廟所の上の山に有、

〔河内志〕

二 錦部郡
陵墓

觀心寺陵

後村上天皇正平二十三年三月十一日崩于觀心寺行宮、葬于後山、圓丘延袤二丈、

御廟

〔河内名所圖會〕

錦部郡 檜尾山觀心寺 觀心寺村にあり、眞言宗、楠家の奥貳町許にあり、陵墓荒蕪して叢林四方より繁れり、陵上に椿樹あり、 後村上院陵

〔前王廟陵記〕

下補闕 後村上天皇

諱義良、後醍醐天皇第五之皇子、正平二十三年三月十一日崩御、奉葬于河内國檜尾山

觀心寺、觀心寺説

今按、後村上天皇御廟所在觀心寺後山圓丘、可方二丈、樹木生上、

〔山陵志〕

河内山陵 後村上院在檜尾山觀心寺地、鳩嶺雜事記、觀心寺記、檜尾磯長之南也、

按、寺後山中有圓墳、廣可二丈、寺僧歲時奉祀焉、

〔山陵考〕

○宮内廳書陵部所藏 檜尾陵

後村上天皇の御陵なり、河内國錦部郡寺元村の領内檜尾山觀心寺の後山にあり、山のあさなを後村上山とよへるは、このみかとの御陵この山におはしませはなるへし、高さ四尺、周圍十二丈許に、四面に築たる圓墳なり、陵上一圓に檜杉椿など生茂れり、この御陵のこと、南朝編年紀略所據の觀心寺記に、正平廿三年四月廿日奉葬河内國錦部郡檜尾山陵、觀心寺後山とみえ、聰譽記に、河内國檜尾といふ山寺に葬奉りけりとみえ、五國古文書

檜尾陵

四月二十日
葬奉ル
トノ
説

所載の觀心寺文書に、

小高瀬莊事、歎申之趣御披露候處、御墓所事異他之上者、可被返付之由其沙汰候、其間事、相談正義邊、可被申左右歟之由被仰下之旨、右大將殿内々所仰也、仍執達如件、

七月十七日

行茂奉

觀心寺寺僧御中 ○本文書偽作ナルベシ

とみえたる、そも南朝の御こととも、まことにさたかには傳はりかてなるを、この御陵のことは寺家にたしかに傳へきて、其御在所のかくあきらかなるは、いとくたふとき御ことにこそありけれ、

〔御陵墓府縣分帳〕

大阪府 後村上天皇

檜尾陵 河内國錦部郡川上村大字寺元

維新前決定

〔陵墓要覽〕 九七 後村上天皇 檜尾陵 大阪府南河内郡川上村大字寺元字檜尾

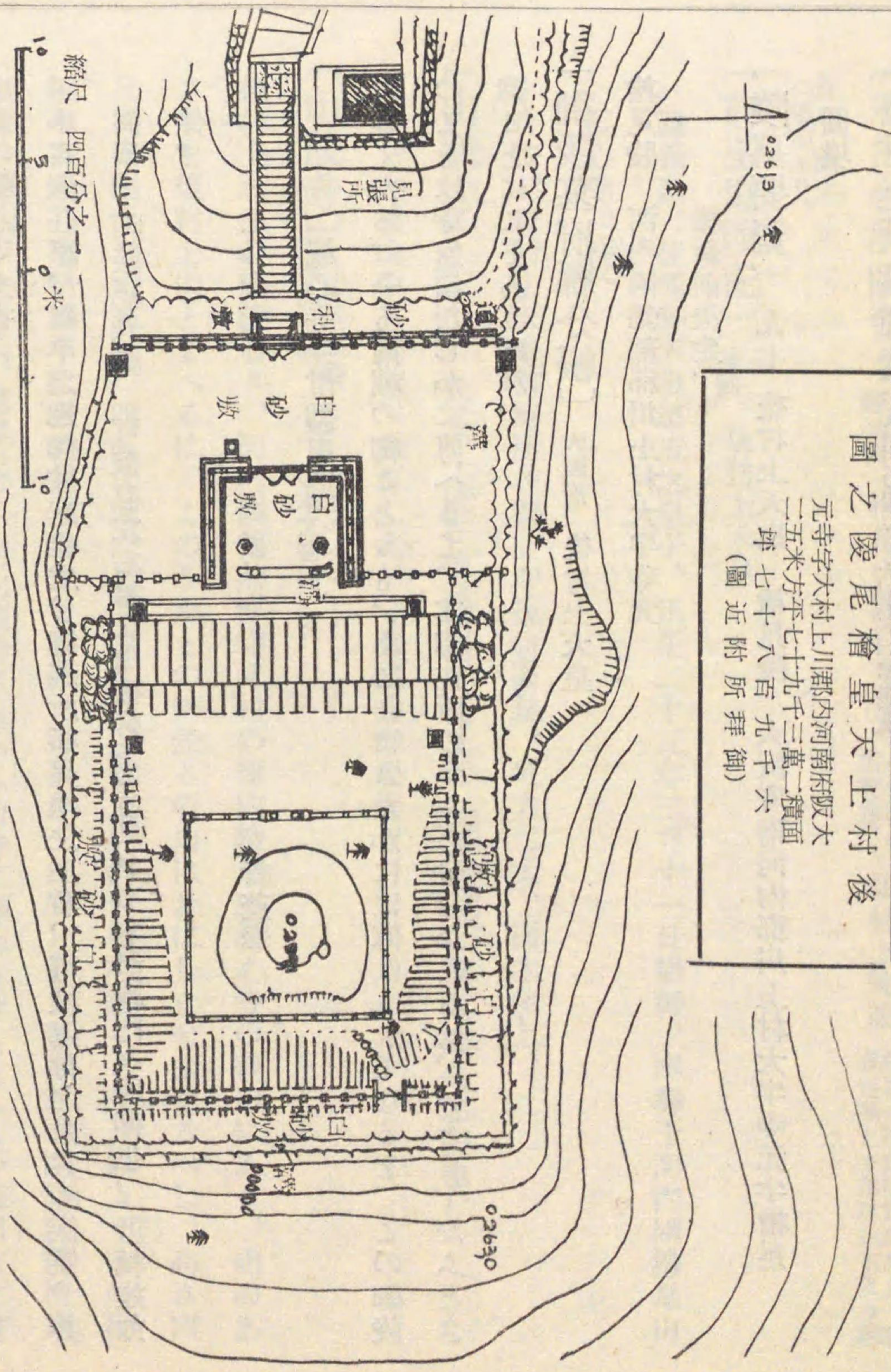
圓墳

〔後村上天皇御陵實測圖〕

大正十四年測量
○宮内廳書陵部所藏

南朝正平二十三年 北朝應安元年三月十一日

圖之陵尾檜皇天上村後
元寺字大村上川内河南海陵殿大
二五米方平七十九千三萬二積面
坪七十八百九千六
(圖 近附所拜御)



南朝長慶天皇

正平二十三年戊申

北朝後光嚴天皇

應安元年

三月大盡 辛未朔

十一日、^{辛巳}長慶天皇踐祚シ給フ、尋デ皇弟熙成王ヲ東宮ニ立テラル、

〔鴨脚本皇代記〕 ○宮内廳書陵部所藏

南帝

〔長慶天皇〕 當今 諱寬成 後村上院第一皇子、正平廿三、^{戊申}三、於住吉受禪、

〔醍醐帝系圖〕 ○田中忠三郎氏所藏

義儀 後村上院 應安元三十一年崩、正平廿三年也、
母後建禮門院、

寬成

當、^{南方}母内侍、二條關白猶子、號三位局、

東宮 南方 ○本書奥書ニ、應安第四之曆夷則中八之天書寫之畢、其後隨奉見出而、親王、法親王、女

良成 院、齊宮、齊院等奉書入之者也、猶落者歟、トアリ、コ、ニ掲グルトコロハ追記ニカ、ル、

住吉ニ於テ受禪アラセラル

御母三位局

南朝正平二十三年 北朝應安元年三月十一日

〔本朝皇胤紹運錄〕

○飛鳥井家本

義良親王

陸奥太守、於南方僞朝稱君主、
號後村上天皇云々、母同、

寛成親王

於南自立、
號長慶院、

熙成王

自吉野降後、蒙太上天皇尊號、
號後龜山院、

〔嘉喜門院集〕

○春 前田家所藏

正平廿三年世の中りやうあんに侍し比、この春うつしうへられし櫻の散たる枝につ
けて、内の御方より、
うへをさしむかしの人のかたみとてたおるさくらはおもかけもなし

御返し

かたみとてたおるさくらの花たにもちりてあとなき色そかなしき

〔嘉喜門院集〕

○雜 前田家所藏

正平廿三年倚廬のみ門より、あはれなる事とも申され侍し御文のついでに、
おもひやれみしおもかけもかき暮てなき人こふる袖のなみたを
御かへし

かさくらすなみたときくにいと、又ほさぬたもとをぬらしそへぬる

〔嘉喜門院集〕

○秋 前田家所藏

正平二十三年八月

東宮

正平廿三年八月、つねよりもあはなりし夕暮に、春宮の御かたより、

おもひやれおなし空にやなかむらんなみたせきあへぬ秋の夕暮

御かへし

せきあへぬなみたのほともおもひしれおなしなかめのあきのゆふくれ

〔嘉喜門院集〕

○袖書 前田家所藏

天授三年七月十三日、中務の宮より新葉集のために、嘉喜門院へ御うたを申され侍
ければ、さよか、せられけるつゝみかみにかきてたてまつりける、

藤大納言實爲

かすくにたまをみかけることの葉をわか水くきそかきもなかさぬ
見るまゝに袖こそぬるれなれしよのおもかけのこるきみかことは
御返し

水くきの露のひかりに色もなきことの葉さへやたまと見ゆらん

ふかく思ふ袖そぬるらんなれし世をしのふはたれもならひなれとも

此まき物のおくに、宮のか、せ給ける歌などを御らんせられて、御ふみのつひて

に、内の御かたより、

しくなる袖にやかけのくもるらんみしよの月をおもひいてつゝ

天授三年七月内ノ御方

南朝正平二十三年 北朝應安元年三月十一日

いかによく松風なればよそにきく人の袖まてうちしくれけむ

○長慶天皇踐祚ノ時日詳ナラズ、鴨脚本皇代記、嘉喜門院集等ヲ參看シ、姑ク後村上天皇崩御ノ日ニ掲グ、瀨成王立坊ノ時日亦詳ナラズ、

〔參考〕

〔官報〕 大正十五年十月二十一日號外 詔書

朕惟フニ、長慶天皇在位ノ事蹟ハ史乘ノ記述審ナラサルモノアリ、今ヤ在廷ノ臣僚ニ命シ、深究精覈セシメ、其ノ事蹟明瞭ナルニ至レリ、乃チ大統中同天皇ヲ後村上天皇ノ次ニ列ス、茲ニ之ヲ宣示ス、

御名 御璽

攝政名

大正十五年十月二十一日

宮内大臣一木喜徳郎
内閣總理大臣若槻禮次郎

前僧正懷雅、興福寺別當ヲ辭ス、

〔興福寺三綱補任〕

別當前僧正懷雅貞治五年十二月廿五日宣下、同戊刻三度長者宣於西院被請取了、同六年正月十三日被渡印鑑於西院了、

應安元年三月十一日、寺家辭退、亥刻被奉納印鑑於寺庫了、通目代憲乘隨役了、公文

長慶天皇
ヲ皇統中
ニ列セラル

印鑑ヲ寺
庫ニ納ム

目代不參、以外之事、西院指隱間許格子上之、鳥居障子際常燈、中綱京者等忍子禪智三人、被出印鑑等於公文所交替、侍三人護取、於六條殿交替、越（長基）交替寺侍了、
憲乘裝束法眼平袈裟廳床

〔興福寺別當次第〕

二 前僧正懷雅尊懷法印眞弟、良基、六十七、松林院、應安元年三月十一日奉納印鑑、

○北朝、懷雅ヲ興福寺別當ニ補スルコト貞治五年十二月二十五日ノ條ニ、大僧正孝覺ヲ同寺別當ニ補スルコト本月二十五日ノ條ニ見ユ、

十三日、癸未崇光上皇、六條殿及ビ萩原殿ニ御幸アラセラル、

〔愚管記〕

十二 三月四日、甲戌、雨降、四條前中納言示送曰、來十三日可有御幸六條殿、御懸可令用意之由、内々所被仰下也者、答畏承之由、

十三日、癸未陰、今日仙洞御幸六條殿、還御、々幸萩原殿云々、

十六日、丙戌北朝、後伏見天皇三十三回聖忌御追善懺法ヲ禁中ニ預修ス、是日結願、兼テ義詮ノ百日忌供養ニ資ス、

〔愚管記〕

十二 二月十八日、己未、雨降、○下

裏十八日

自仙洞以顯保朝臣被仰云、於内裏可被行御懺法云々、葩可被召進之由被申之、少々可

進之者、予申云、葩事全分雖無才學、相尋少々可進之由申之畢、

廿四日、乙丑、陰、入夜雨降、禁中御懺法自來五日可被始行云々、葩六日七日之程可進

南朝正平二十三年 北朝應安元年三月十三日 十六日

御車ノ牛
ヲ近衛道
ヲ近衛道
給ニ徴シ

崇光上皇
近衛道
シニ葩道
給ニ徴シ

之由、自仙洞被仰下、令申畏承之由畢、

三月五日、乙亥、雨降、略禁中御懺法今日延引、自來十日可被始行云々、

十日、庚辰、陰、禁中御懺法自今日被始行云々、進葩於內裏、造唐車懸白牛、置柳宮、車中納

葩、車上軒取放之樣造之、大白牛車之心也、梅尾細工造之

禁中御懺法保元二年被行之、其後絕久、後醍醐院御代連年被行之云々、

十一日、辛巳、陰、風吹、葩進仙洞、依先日仰也、入打亂宮、敷薄即被下勅書、被感

仰、畏申畢、

結願

十六日、丙戌、晴、略禁中御懺法結願云々、

今年令相當後伏見院三十三廻給、來月爲齋月之間、引上被行之云々、但故大樹百々日追修被相兼歟之由有世聞、

〔宣胤卿記〕 永正三年九月廿五日、辛巳、天晴、御懺法結願日也、略

凡於藏人頭者、御前花宮可直進歟、但近代多可然之公卿傳進之間、不能左右歟、應安

元年三月十日、後光嚴院被下後八條內府之勅書、爲後鑒寫左、于時公時卿藏人頭也、

懺法只今欲始之程、自昨日風氣候哉らん、神心違例、難治無極候、公時朝臣ハ自何

日可參候哉、嘉曆ニハ御前花宮、實守卿、于時宰相中將所役候、公時參候者、不可

及他人候、今夜無其仁之間、殿上人傳進實綱卿之條、可然之由相計候、如何、又散花

殿上人ハ雖何人勿論候歟、結番も七日之間、二人つゝハ少く候へきやらん、四人つゝ

など可然候哉、如何、今夜ハ教繁、中山教長、親雅領狀候、職事ハ内々之儀、若先々不候

候、比興々々、

候けるやらん、中御門宣方、勸解由小路仲光など候へとも、如最勝講ハ勿論、是ハ無才學候間、未定仰

候、尙々公時朝臣相構同者早速候へかしと覺候也、夜中狀定令仰天候哉、此外無殊事

候、比興々々、

〔仲光卿記〕

柳原家記 錄百十所收

應安元年三月十日、庚辰、晴、申刻許參内、今日於禁中被始行

懺法、蓋保元嘉元等舊跡也、其外禁中儀無其例乎、希代之御興善、定通冥慮歟、藏人右

中辨宣方奉行之、以議定所爲道場、其前構落庇、爲地下伶倫坐、座下同シ修理職所課云々、莊嚴

儀大概註指圖、在左、本尊普賢并、十羅刹女以下眷屬圍繞之像也、新被圖繪歟、每間懸幡

花鬘等、承仕定有、二間願預法橋定清等致沙汰者也、縹素皆參後、丑刻許出御々聽聞所、御簾先

之優婆塞前右府、實後、直洞院前大納言、實守、衣冠、上結權中納言、實綱、直等、入道場東面南第

二間、經本尊後著坐、次比丘慈能僧正、慈昭僧正、憲尋法印、良憲法印、眞聽法印等著

坐、於兩僧正者、自我坐後著之、憲尋以下入南第二間所著坐也、次伶人公卿、殿上人

著簀子坐、地下輩候落庇、先調子、此間賦花宮、先置佛前机上、調聲分也、次主上御

分、持參人跪御前後、權中納言起坐參進、先卷御簾半許、次取花宮置御前復坐、前右府

以下次第賦之、其路入本尊當間、左右所相分也、懺法段々奏管絃、御所作、笙、園前中

納言、基隆、比巴前右衛門督、教言、笙其外侍臣等也、事了入御、縹素退出、兩僧正下壇所祇候

云々、前右府又候局、今一夜一時被行之、每日可爲三時、天明程予退出、末尾ノ道場指

圖便宜左ニ收ム、

笙ヲ吹キ
給フ
入御

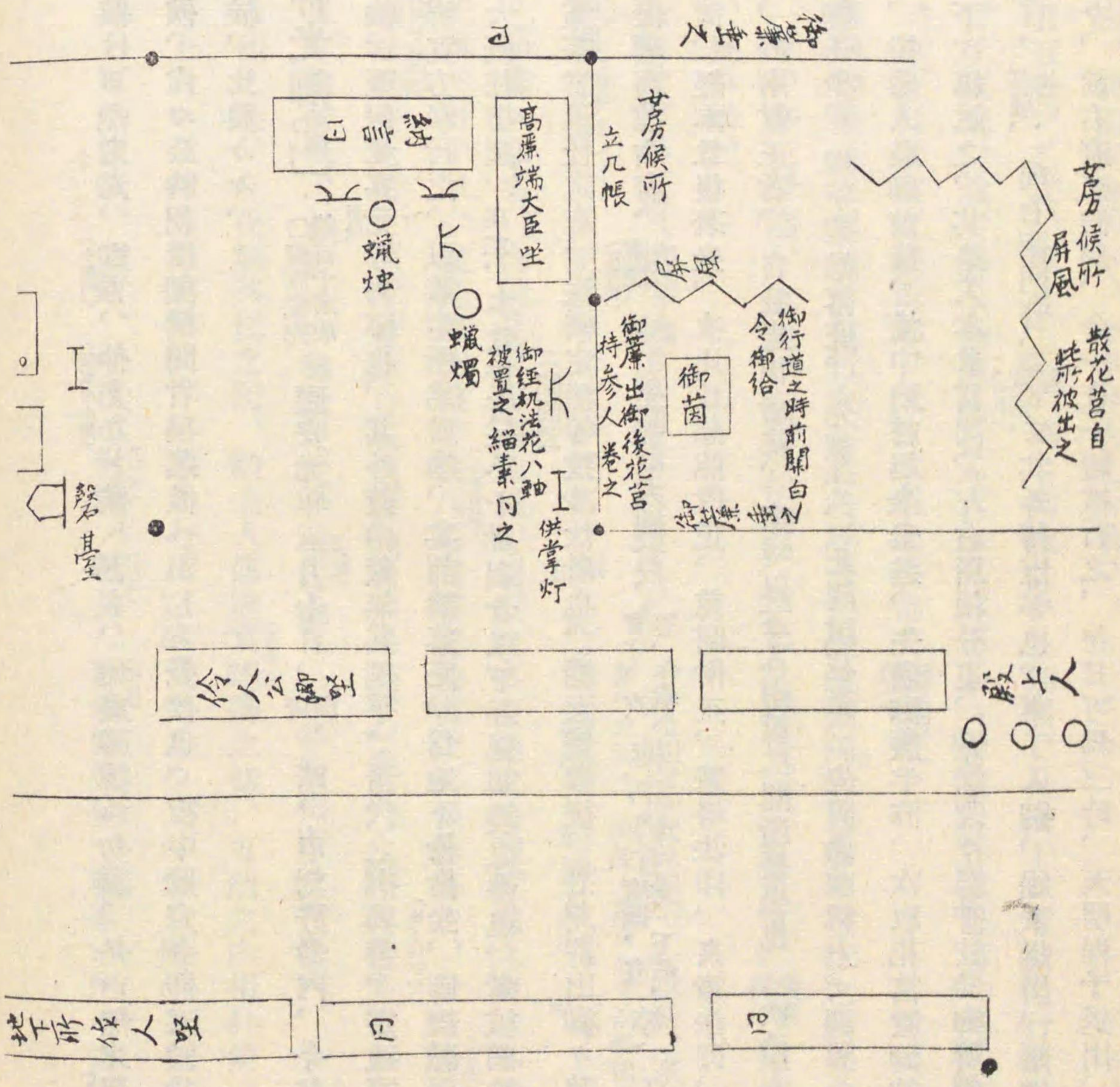
議定所ヲ
道場トス
本尊
出御
役僧著座

後光嚴天
皇勅書
風氣ニテ
神心御違
例

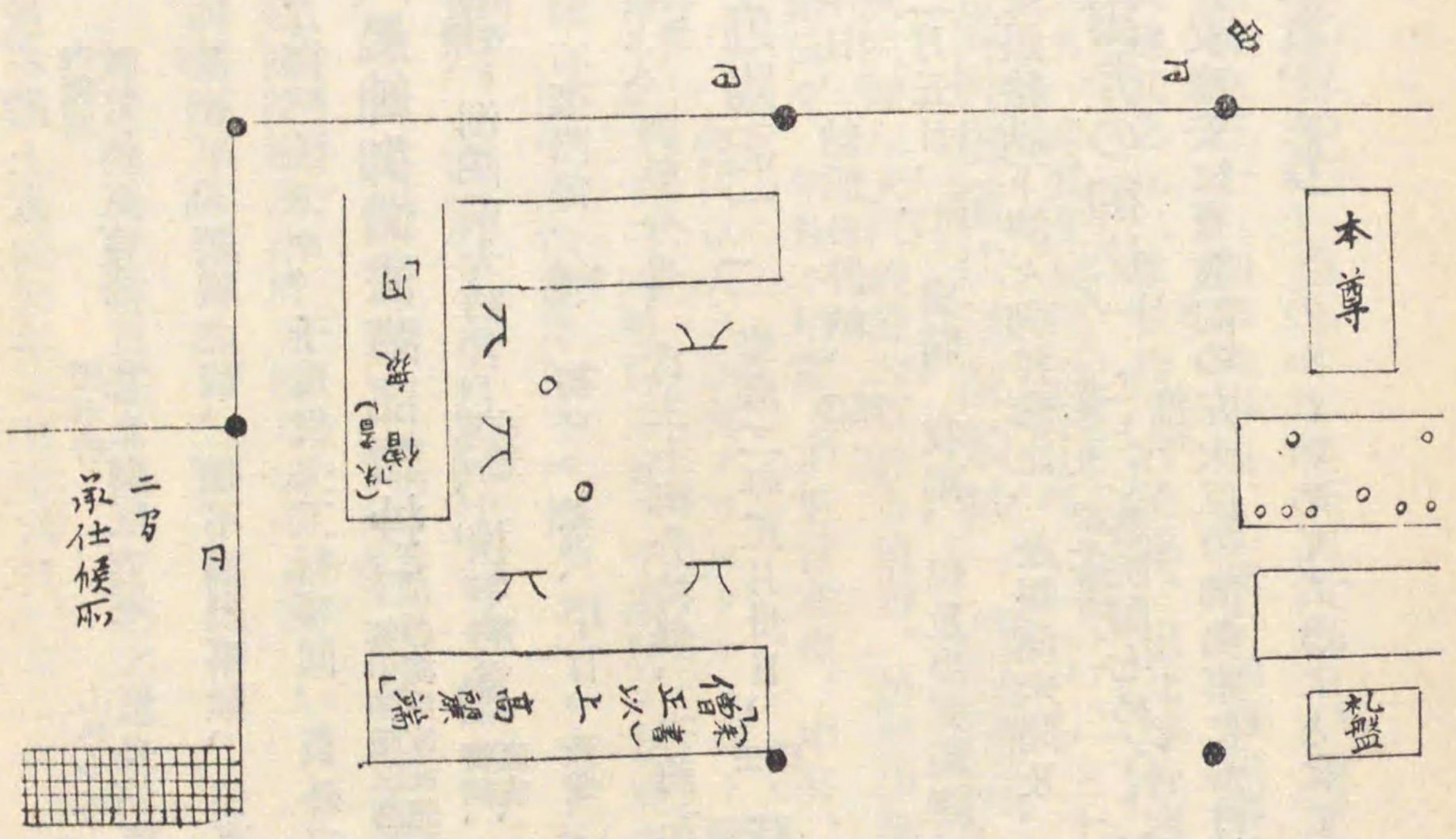
禁中御懺
法久シク
中絶ス

延引
始行

南朝正平二十三年 北朝應安元年三月十六日



南朝正平二十三年 北朝應安元年三月十六日



為修理職所課
假構庇

散花殿上人

南朝正平二十三年 北朝應安元年三月十六日

二〇四

散花殿上人

內藏頭 教繁朝臣直衣、國中將 基光朝臣衣冠、山科少將 教長朝臣、中山少將 親雅朝臣衣冠、藏人右少辨 宣方束帶、園少將 基朝衣冠、

抑散花事、顯職之輩、強不庶幾事歟、但嘉元度、故中御門宰相宗兼卿勤之、于時爲藏人左衛門佐云々、予爲役夫工行事間、員外之身、神妙々々、

〔愚紳御懺法講部類抄〕

禁中御懺法講

或記 應安元年三月、共行、前左府

實俊、洞院前大納言、實守 衣冠、權中納言、實綱 直衣、伶人音樂初例、御所作、篋、園前中納言、基隆、比巴

前右衛門督、教言、初日、盤涉、中日、黃鐘、第五日、双、結日、盤、花宮事、先置佛前机上、

殿上人 調聲分也、次主上御分持參、次前左府以下賦之、葩金銀伏輪有之、

〔迎陽記〕

一 康曆二年正月卅日、壬 晴、今日御懺法、震儀御行道又有之、應安度、

中日、結願日許歟、略、○下

二月五日、丁 晝晴、夜雨、但及半更屬晴、今日御懺法結願也、申刻右大將殿御參、葩

金銀繪以下濟々御持參之、金銀葩未聞及、希代事也、應安度金銀伏輪葩見及、略、○下

〔雲井の御法〕

康曆二年 後光嚴

ことし舊院御七めぐりにて、おほきなる御佛事ともあり、○中 さうゐ

ん又應安に寶篋院の左大臣の御佛事におほしめしなそらへて、つとめさせたまひし事なれば、たひくのかれいめてたきことにこそ、略、○下

伶人音樂ノ初例

中日結願日御行道アリ

〔花幕記〕

應永十三年正月廿九日、雪下、自今日於禁裏七ヶ日被行法花懺法、奉爲後

光嚴院三十三回御佛事也、凡禁中御懺法事、後白川院御宇○保元二年五月十四日ノ條參看、於仁壽殿被行之、

又建武之比二季被岸令行給畢、但此等皆密々儀也、於講演儀者、後光嚴院御宇應安元年

三月、奉爲光嚴院○本書以下光嚴院トアル、三十三回御佛事被行御懺法、是嚴儀之始也、

〔愚紳御懺法講部類抄〕

禁中御懺法講

應安元年、自三月十日七ヶ日、爲寶

篋院贈左大臣義詮公百箇日追善、於禁中御懺法講被行之、今度始 一説光嚴院卅三回御追

福云々、年月不相當、不足言者也、中日、結日、有御行道、初日出御、以議定所爲道場、

○後伏見天皇崩御アラセラル、コト延元元年四月六日ノ條ニ、入道尊道親王、同天

皇三十三回聖忌法會ヲ十樂院ニ預修セラル、コト去年四月六日ノ條ニ、崇光上皇、

同聖忌法會ヲ院中ニ修セラル、コト本年四月六日ノ條ニ見ユ、

義滿、義詮ノ百日忌法會ヲ修ス、

〔諷誦文故實抄〕

○柳原家記録

第七武家儀

寶篋院贈左相府百箇日法事 願諷

敬白、請々事 三寶

右、先公尊靈重昏之後、百朝之忌也、

應安元年三月十六日

仍諷誦所修如件、敬白、

弟子正五位下行左馬頭源朝臣義一敬白

南朝正平二十三年 北朝應安元年三月十六日

二〇五

十種供養

南朝正平二十三年 北朝應安元年三月十六日

二〇六

草大藏卿長綱卿、清書侍從宰相行忠卿、

同日十種供養願諷

敬白、請、事、三寶、

右贈一品左相府、仍諷誦所修如件、敬白、

應安元年三月十五日

弟子正五位下行左馬頭源朝臣義一敬白

草左京大夫長衡朝臣、清書行忠卿、

贈一品字載願文之時、小諷誦不可載也、尤不審、

〔石清水文書〕

四 鳩嶺雜事記

（應安元年）

一同三月十六日、於等持寺結緣灌頂、故大樹ノ百ヶ日ノ追

善云々、大アサリ道淵僧正、色衆十六口云々、

〔仁和寺院家記〕

上 菩提院

前大僧正道淵

中納言、源中納言通時卿子、内大臣通顯公猶子、應安元年三月十七日、故將軍百箇日追善、於等持寺結緣灌頂被行之、大阿闍梨勤仕之、少阿闍

梨守融法印、乞戒弘雅法印、

○義詮ノ薨ズルコト去年十二月七日ノ條ニ、月忌初法會ノコト本年正月七日ノ條ニ、

幕府、中原師茂ヲシテ義詮ノ官位昇進次第ヲ注進セシムルコト同月十三日ノ條ニ、六

七日忌法會ノコト同月十八日ノ條ニ、七七日忌法會ノコト同月二十五日ノ條ニ見ユ、

等持寺ノ
追善結緣
灌頂

大阿闍梨
道淵

毛利憲廣
ヲ以テ言
上ス

石見益田兼見、所領ノ手繼證文等ヲ燒失ス、尋デ之ヲ幕府ニ上申ス、

〔益田家什書〕

十一之

關東大將家之御下文等、先祖重代相傳之處、先年當將軍家言上候、去三月十六日之夜燒

亡紛失之次第、道幸ヲ以言上候畢、併無勿體之通被申下候、御判之案文爲支證書置也、

應安元年五月二日

沙彌祥兼判

益田殿

道幸

去月十六日之夜の燒亡に、御文書紛失之由承候了、無勿體存候、自然と公方より御尋の時、其旨を可存知候、恐々謹言、

應安元年
四月五日

道幸判

益田殿

○義滿、兼見ノ紛失狀ヲ承認シ、其所領ヲ安堵セシムルコト永徳三年二月十五日ノ條ニ見ユ、

二十一日、北朝太政大臣久我通相上表ス、

〔公卿補任〕

四十

太政大臣從一位源通相

四十

三月廿一日上表、

南朝正平二十三年 北朝應安元年三月二十一日

二〇七

前豐後肥後筑後守護大友氏時卒ス、

〔高野山文書〕西生院 大友家過去牒 大友家御曆代

吉祥寺殿刑部中郎神州天祐大禪定門貞宗之七男、號刑部大輔氏時、應安元戊申年三月廿一日、

〔公方様當家條々要目〕大友義 當家御代々御位牌

大應寺殿神州天祐大禪定門 號刑部大輔氏時、氏泰之御舍弟、貞宗之七男也、三月廿一日、

〔大友系圖〕大友一姓之系略

世系

〔十六〕大友孫太郎、左近將監、正五位下、近江守、〔朱書下同〕貞宗、法名具簡、直菴、號顯孝寺、母戸次時親娘、

〔十七〕氏泰、字千代松丸、大友孫太郎、從五位下、式部丞、法名清麴獨峯、同慈寺、母太宰大貳賴尙娘、自尊氏將軍以養子之儀被免源朝臣之姓、自筆御判在之、自此時一家皆改源氏、

〔十八〕氏時、字龜松丸、大友孫三郎、從五位下、刑部太輔、法名神州天祐、號吉祥寺、依將軍鈞命、自舍兄氏泰受家督、〔大應寺トアリ〕

〔十九〕氏繼、大友孫三郎、始號利根、又孫太郎、不二菴殿、福州授公、

親世、字千代松丸、大友式部大夫、從四位下、修理大夫、法名勝幢祐高、號祖孝トモ、瑞光寺、自鹿苑院殿義滿將軍賜鎮西探題職、

親國、西、早世、

氏能、號利根、

刑部大輔
氏時ト號ス

兄氏泰尊
氏ノ養子トナリ稱ス

〔大友系圖〕諸家系圖纂十六下所收

〔六〕貞宗

〔七〕氏泰

〔八〕氏時、等持院殿賜諱字、童名宮松丸、孫三郎、從四位下、刑部大輔、法名天祐玉安、於關東號吉祥寺、於豐後號大應寺、自氏泰一家相續、建豐後稱名寺、屬將軍家連年戰功武名甚多、三月廿一日逝去、

〔九〕氏續、童名宮松丸、利根孫太郎、從五位下、修理大夫、號不二庵、依爲宮方非家督、十二月廿七日於朽網卒去、

親世、童名千代松丸、○下略、應永二年二月十五日ノ條ニ收ム、

親國、西五郎、

氏能、彈正少弼、住關東利根、有子孫、

〔第七〕氏泰、千代松丸、式部丞、同慈寺殿、

〔第八〕氏時、宮松丸、孫三郎、刑部大夫、關東吉祥寺殿、豐後大應寺殿、戒名天祐、

〔第九〕氏續、孫三郎、

親世、修理權大夫、

親國、五郎、號西殿、

氏能、關東利根、住、有子孫、

南朝正平二十三年 北朝應安元年三月二十一日

豐後稱名
寺ヲ建立ス

南朝正平二十三年 北朝應安元年三月二十一日

〔大友志賀系圖〕

貞宗

氏泰 千代松丸、孫太郎、式部丞、從五位下、略○下

氏時 宮松丸、孫三郎、刑部大輔、

氏時 童名宮松丸、孫三郎、刑部大輔、從四位下、

舍兄氏泰無嗣子、故爲氏時被養、以繼其流、爲尊氏將軍御猶子、此時尊氏自筆之御判賜之、重賜源姓、正慶三庚戌春、孫田左近大夫貞義、至筑後國三池郡、集軍兵貳千餘人籠城、氏時聞之、引卒八千餘兵、以貞義攻、不堪防戰、貞義落城自害、應安元戊申年三月廿一日氏時逝、大應寺殿神州天祐大禪定門、

氏繼 利根孫太郎、式部大輔、從五位下、依爲宮方、無治世、

親世 童名千代松丸、式部丞、從四位下、修理大夫、略○下

親國 五郎

氏能 利根六郎

〔尊卑分脈〕 藤原氏 藤成流

貞宗 近江守、從五位下、鎮西奉行、

氏時尊氏ノ猶子トナレトノ説

氏泰	藏人、式部丞、
氏時	刑部大輔、
親世	
氏續	早世、
親世	修理大夫、式部大夫、從五位下、實氏續子、

〔大友家文書錄〕 一 氏時 第八代

北朝貞治七年改元應安 戊申三月或作二月二十一日、氏時卒、於豐後國號大應寺天祐慈鑑、或作天祐玉安、於關東號吉祥寺、稱時阿彌陀佛、

時阿彌陀佛ト稱ス

氏時者、從五位上近江守貞宗入道具簡七男、從五位上式部丞氏泰同母弟也、幼名宮松丸、爲大樹尊氏養子、爲源氏、且賜諱字名氏時、號孫三郎、被氏泰選舉爲第八代家督、管領豐後、豐前、筑後、肥後、後年易豐前爲筑後、守護職、及所在散野、越後、伊勢、美濃、筑前、筑後、肥前、肥後、豐前、豐後之地頭職、敍從四位下、任刑部大輔、治國十七年、

〔大拙和尚年譜〕 延文四年己亥 師祖師四十七歲

是年四月、大友刑部源公、請師開堂於筑之顯孝、辯香嗣千岩、元長源公偶詣八幡廟宿、夢見

南朝正平二十三年 北朝應安元年三月二十一日

祖能ヲ筑前顯孝寺ニ請ス

受戒シテ
天祐ト號ス

運善庵記
積立スルヲ
建立スルヲ
承認スルヲ

南朝正平二十三年 北朝應安元年三月二十一日

二二三

有一僧、庵眉雪頂、自宮中出告云、爾宜師顯孝長老、言訖不見、翼日入山、頂戴衣盂、親受戒法、執弟子禮、師爲公安名天祐、冬十二月廿日謝院事、

〔土居寬申氏所藏文書〕

豐後國隆國府市屋敷一所事、就佛地念定寄進、被建立積善菴由承候畢、不可有子細候、恐々謹言、

卯月十一日

氏時（花押）

運公書記禪師

○氏時、義詮ヨリ兄氏泰ノ所領及ビ豐後守護職ヲ安堵セシメラル、コト、文和元年九月二十二日ノ條ニ、刑部大輔ニ推舉セラル、コト同月二十七日ノ條ニ、肥後守護職ニ補セラル、コト延文四年八月二十四日ノ條ニ、同職ヲ阿蘇惟澄ニ讓ルコト康安元年二月二十二日ノ條ニ、越後、河内、攝津等ノ地ヲ與ヘラル、コト貞治元年十一月二日ノ條ニ、筑後守護職ニ補セラル、コト同二年九月十二日ノ條ニ、豐後、筑後兩國ノ守護職及ビ所領ヲ氏繼ニ讓ルコト同三年七月八日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔花押彙纂〕

オ之部 大友氏時

花押



○阿蘇文書九（應後）
（貞治元年）二月十五日書狀

〔豐後舊記〕

○豐後 大友孫三郎刑部大輔從四位下源氏時 號宮松丸、受兄氏泰之讓、

主豐後、○中 曆應四年辛巳、大友建寺速見郡南山、寺號龍源山吉祥寺、境內置六坊、市坊、

見德坊、開山坊、○中 同年、大友建寺於阿南莊小原邑、名大應寺、請佛印禪師之弟子正香禪師令

住之、佛印之弟子正義、○中 得公許、建寺府地、號豐德山福田寺、○中 大友氏時、長男利

根孫太郎氏綱或氏綱、病身故、讓家督於次男親世、落髮、法名天祐、

大友式部丞修理大夫從四位下侍從源親世、氏時之次男、受父之讓、任豐後國守、○中 應

南朝正平二十三年 北朝應安元年三月二十一日

二二三

吉祥寺
應寺
建福寺
立田

妙觀瑞光
ノ瑞寺ヲ
建立ス

高崎山城
ヲ築ク

墓

安元年三月或二月廿一日大友氏時卒、牌號大應寺殿、或ハ吉刑部郎中神州天祐大禪定門、

〔豐鐘善鳴錄〕一 臨濟宗 豐後州吉祥寺不肯禪師、諱正受、本州人、參直翁禪師于蔣山、

明旨傳法、時豐守藤侯胤松原山吉祥寺、善應山妙觀寺、大寶山瑞光寺、延師爲開山、玄風丕振、貞治五年二月八日示寂、州之崇福亦請師爲第一祖焉、

〔豐後國志〕四 大分郡 古蹟 高崎山城在賀來鄉高崎村、康安元年、南北朝之時、肥後國菊池武光專事南帝、既而島津、秋月、松浦、宗像、大友等、或叛或服、是以戰

爭不息、故大友氏時城此山以爲固、高峻峻阻要衝可據、

〔豐後國志〕三 速見郡 廢寺 吉祥寺在朝見鄉朝見村御塔原、今纔存一字、按家譜曰、大友氏時創吉祥寺於朝

祥爲大應、蓋大應亦氏時所營、故誤傳耳、

〔豐後國志〕三 速見郡 墳墓 大友氏時墓在朝見鄉朝見村吉祥寺廢址、

二十三日、巳幕府、信濃白田直連ヲシテ本知行地ヲ安堵セシム、

〔白田文書〕〇常 陸

本知行地事、不可有相違之狀、依仰執達如件、

應安元年三月廿三日

白田勘解由左衛門尉殿

〇直連、父至中ヨリ所領信濃田中郷等ヲ讓ラル、コト去年雜載讓與ノ條ニ見ユ、

細川領之 右馬頭 在判

還補三箇
度

二十五日、未北朝、大僧正孝覺ヲ興福寺別當ニ還補ス、

〔興福寺別當記〕上 興福寺々務職之次第 同御宇應安元年戊申三月廿五日 孝覺 還補、

已上三度、

〔興福寺略年代記〕 孝覺 三月廿五日宣下、第三度、

〔興福寺別當次第〕二 冬通 法務大僧正孝覺 第三度 五十才 應安元年三月五日宣下、長者宣三月

廿七日到來、三度長者宣以前唯識講廻請進奉了、三月廿 四日、

〔興福寺三綱補任〕

別當前法務大僧正孝覺大乘院、應安元年三月廿七日亥刻、三 第三度、 度長者宣於禪定院被請取之、

權別當同上、 會所 西大 權上座法橋榮尊

大住庄通 寺主從儀師專舜

濱崎庄安吉庄 寺主從儀師覺乘

賀茂庄公文 都維那泰實

權都維那貞舜應安元年三月廿八日補任、 泰舜法眼二男、

其後覺舜梅家補都維那、應安元年四月八日宣下、長者應司殿、 南曹宣方、廿三歲、故憲覺權寺主息、

南朝正平二十三年 北朝應安元年三月二十五日

長者宣到
來

權別當賴
乘
三綱ノ宣
下

都維那覺
長者宜
下ノ

南朝正平二十三年 北朝應安元年三月二十五日

大法師覺舜

宜爲都維那、

右官牒未到之間、且可從寺役之由、可令下知給者、長者宜如此、悉之、謹狀、

應安元年四月八日

右中辨宣方奉

進上 興福寺別當僧正御房 政所

〔維摩會先奏引付〕

○内閣文庫所藏

別當前寺務大僧正孝一應安元年三月廿七日、三度長者宜於禪定院新造被請取之、○中略、九月十九日ノ條ニ收ム、

權別當權僧正頼乘第三度、

良家 上座法眼泰尊會所目代并西大行事

良家 權上座法橋榮尊餘江庄并東大行事

凡人 寺主法橋憲乘大住庄、

凡人 寺主從儀師專舜通目代、初任、

凡人 權寺主從儀師覺乘濱崎庄、

凡人 權寺主從儀師實乘安吉庄、

良家 權寺主源舜賀茂庄、

凡人 都維那貞舜

良家 都維那泰實公文目代、初度、

良家 都維那覺舜

修理目代顯清法眼、非三綱、大乘院房官 第三度、

應安元年七月十五日他界畢、七十一云々、同年七月懷清法眼被恩補之、顯清法眼死

闕、六十五歟、

〔興福寺々務次第〕

孝一 教覺 三度、應安元三月廿七日宣、治七ヶ月、

〔大乘院日記目錄〕 一 三月廿七日、孝覺爲寺務、

○前僧正懷雅、興福寺別當ヲ辭スルコト本月十一日ノ條ニ、孝覺寂スルコト九月十

九日ノ條ニ見ユ、

二十六日、丙幕府、天龍寺住持妙葩春ヲシテ、同寺領越後五十公郷

内保倉保ヲ管領セシム、

〔天龍寺重書目錄〕 乙

越後國頸城郡五十公郷内保倉保北方事、任上相民部大輔入道道昌當朝寄進狀、可令管領給之

狀、依執達如件、

南朝正平二十三年 北朝應安元年三月二十六日

修理目代
顯清他界
ニ依リ懷
清ヲ之ニ
補ス

上杉憲顯
ノ寄進

南朝正平二十三年 北朝應安元年三月二十七日

二一八

應安元年三月廿六日

(細川頼之)
右馬頭 在判

天龍寺長老

○上杉憲顯、保倉保ヲ天龍寺ニ寄スルコト貞治元年六月二十七日ノ條ニ見ユ、

二十七日、西丁前薩摩守護島津師久、新田八幡宮執印惟宗友雄ニ同國寄田村牧ヲ預ク、尋デ島津氏久モ亦之ヲ預ク、

〔薩藩舊記〕 前集二十

執印文書

薩摩郡内寄田村牧事、被致忠節之間、以別儀所預置也、可被存其旨之狀如件、

貞治七年三月廿七日

(島津)
師久 御判 (花押)

(惟宗友雄)
執印左衛門太夫入道殿

先日計申候料所事、若相違之時者、可致別沙汰候、聊不可有等閑之儀候、兼又寄田村牧事、以別儀預申候、恐々謹言、

卯月二日

(島津)
氏久 (花押)

〔應紙〕
執印殿

氏久

忠節ヲ致スニ依ル

妙葩憲顯ノ發向ヲ報入道ニ

山道ヨリ上野ニ出

四月五日鎌倉ニ著ス

二十八日、戊戌武藏平一揆、足利金王丸滿ニ叛ク、仍リテ是日、關東執事上杉憲顯、京都ヲ發シテ鎌倉ニ歸ル、

〔鹿苑寺文書〕 ○山城

(應顯) 上相殿去月廿八日進發候き、東國定可屬無爲候歟、○中略、全文貞治六年十月七日ノ條ニ收ム、

卯月十日

妙葩 (花押)

二階堂駿河入道殿

〔花營三代記〕 三月廿八日、上相民部大輔入道下向關東、但自山道可被出上野國云々、

〔喜連川判鑑〕 從三位左兵衛督氏滿童名金王丸、于時九歲、應安元正月二十五日、執事上杉憲顯、

鎌倉殿ノ御名代トシテ上洛、二月八日將軍ノ亭へ參上、○中略然所ニ武州平一揆起テ、川

越ノ城ニ籠ル由告來ル、從將軍御暇給テ、三月二十八日京都ヲ立テ、四月五日下午著、

〔鎌倉大日記〕 二月五日、武州河越館平一揆閉籠、爲退治若君御發向、○中略上杉道

昌禪定三月廿八日立都、下著上州、

○憲顯上洛シテ義滿ニ見ユルコト二月八日ノ條ニ、平一揆ヲ擊ツコト六月十一日ノ

條ニ、宇都宮ヲ攻ムルコト九月六日ノ條ニ見ユ、

南朝正平二十三年 北朝應安元年三月二十八日

二一九

二十九日、己伏見宮榮仁親王、參内セラル、

〔愚管記〕十二 三月廿九日、己亥、雨降、今夜榮仁親王被參禁裏云々、〔榮光上皇自院〕四條前中納言

爲奉行、下簾、鞦韆等被召之、

○榮仁親王宣下ノコト正月二十一日ノ條ニ見ユ、

三十日、庚北朝政始、

〔愚管記〕十二 三月卅日、庚子、巳刻已後雨止、午後屬晴、〔久我具通〕略中政始、上卿中院大納

言、參議平宰相、〔行時〕辨〔兼家〕左中辨長宗朝〔兼家〕少納言棟有朝臣等參入云々、

〔師守記〕五十 ○上野圖書館本 正月〔實書〕〇十六日ノ記

〔實書〕今日藏人左少辨仲光觸申云、來廿二日可有政始、任何可被催沙汰云々、不及請文、可

加下知之旨、以詞被答了、

〔實書〕來廿二日可有政始、任何可被催沙汰之狀如件、

正月十三日

左少辨判

〔中京師茂〕四位大外記殿

十九日、辛卯、天陰、自今晴雨降、午刻已後休、今日政始事被下知文殿、此次來月六位分配被遣〔實書〕、可申散狀之由被下知了、

崇光上皇
用具ヲ近
衛道嗣フニ
徴シ給フニ

上卿久我
具通

正月仲光
政始ノコ
ニトヲ師茂
觸ル

師茂文殿
ニ下知ス

今朝文殿助豐參入、政始史生召使等御訪事、〔實書〕□□舉狀之間、則書賜了、

〔實書〕來廿二日政始史生并召使參役事、申狀二通進覽候、任近例被下御訪候之様、可有申御

沙汰候乎、仍言上如件、

正月十九日

大外記中原師茂

進上 藏人左少辨殿

銘書
外記史生申狀

同
上召使等申狀

廿日、壬辰、天陰、朝間小雨下、酉斜小雨又下、今日家君〔實書〕以狀條々被尋問藏人左少辨仲

光了、是日藏人左少辨進狀云、政始上卿權中納言可構參之由令〔實書〕、明後日可爲必定之

由沙汰候之處、昨夕俄申子細之間、就内外〔實書〕雖被仰下候、大略不定候者重可觸申候、

○中 被答曰、明後日〔實書〕俄依申子細延引、日次治定候者可觸候之間、可〔實書〕、

略○下

略○上 明後日〔實書〕廿二日政始必定候哉、上卿已下被申領狀候歟、如何、委可奉存候、每事可參

啓候、恐惶謹言、

正月廿日

師茂

南朝正平二十三年 北朝應安元年三月三十日

上卿ノ故
障ニヨリ
延引セラ
ル

勸解由小路殿

略^{○上} 政始延引了、參議平宰相、少納言秀長、
申子細候之間、延引[□]、定日追可觸申候、^{○中} 恐々謹言、

正月廿日^{○宛名}
闕ク、

仲光

是春、建長寺住持圓月^中退院ス、

〔扶桑五山記〕

^三相陽巨福山建長興國禪寺住持位次

^{貞治六}年丁未十月初三日入寺、應安元戊申春退院、
^{四十一}中岩禾上、諱圓月、嗣東陽、相州人、

塔梅洲菴、

〔東海一漚集〕

^五自歷譜

應安元年戊申春、謝建長事歸京、蓋以源將軍薨也、

〔空華集〕

^{十一}序

袁氏羸吟序

袁氏羸吟、中岩師所以命雪曲也、初歲次丁未冬、師承旨自東山遷巨福、^{○中} 及明年春、師勇退歸于東山菟裘、^{○下} 略

〔空華集〕

^二七言絕句

二月八日、雪中余出山、過福山方丈、會主人中岩禪師、謝事將歸

東山舊隱、臨行席上、出示舊作二篇、其一則去年中秋師在東山、開池值雨有感、爲

詩曰、鑿沼意期今夕月、其如漠漠蔽秋天、天憐老病添吟苦、故遣禪窓聽雨眠、其一

則紀夢也、余輒和中秋於默庵論公之後五首、因記、前歲冬館葦寺與默庵夜話、篇末

及之、遂假筆圭不琢、併寫奉贈中岩、兼簡默庵云、

不勞特地開方沼、春水臨窻碧蘸天、況有樓臺留好月、莫將聽雨愛閑眠、

夢隨歸鴈去翩翩、千里長安只尺天、借問秋窓吟雨苦、何如夜閣聽松眠、

南朝正平二十三年 北朝應安元年是春

義詮ノ薨
去ニ依ル

建仁寺ノ
舊隱ニ歸ル

周信和韻
シテ行ヲ
送ル

南朝正平二十三年 北朝應安元年是春

二二四

妙喜軍開新世界、誰知吉夢已通天、東山冷話左邊底、好在逢春閣上眠、
近江太守迎橫榻、靈樹神君送上天、自恨病夫難出餞、身如駒在櫪中眠、
福山示我默翁篇、正是春寒雪落天、記得前年投宿處、存公打座(義存)歲公眠、
(元光)
(全義)

○圓月ノ建長寺ニ入院スルコト去年十月三日ノ條ニ、寂スルコト永和元年正月八日ノ條ニ見ユ、

永釋、彌天、近江永源寺住持ト爲ル、

〔瑞石歷代雜記〕 二 應安元年戊申二月十八日巳未、改元、

彌天諱永釋、不詳姓里、資氣英粹、善綜内外、行脚諸方之後、參開祖于本寺、(元光)久看狗子無佛性話、脫然契悟、開祖授法券、作字說爲證、辭遊甲州、衆幸其來、請董淨光寺、住職未久、又返江州、今春入寺、當山二世也、

〔山上宗譜圖〕 永源住持歷代簿

二彌天永釋、開山法嗣、應安元戊入寺、住十二年、康曆元年退院、○下略

永安門派

永彌天永釋謚見性悟心禪師、應安元入寺

二世

○永釋、元光ノ祭文及ビ傳記ヲ作ルコト去年九月一日元光示寂ノ條ニ、寂スルコト應永十三年六月五日ノ條ニ見ユ、

南朝正平二十三年 北朝應安元年是春

二二五

四月小盡 辛丑朔

一日、辛丑北朝平座、

〔愚管記〕十二 四月一日、辛丑、晴、平座如例、參議左兵衛督御子左爲遠卿一人參入、行事云々、

三日、癸卯幕府一方内談、

〔花營三代記〕 四月三日、一方内談貞世與州禪阿成力、始行、

法菊、庭芳淨妙寺住持卜爲ル、

〔空華日用工夫略集〕一 四月三日、菊芳庭住淨妙、法菊

〔空華集〕十九 菊芳庭住淨妙諸山疏

事久必弊弊必革、禮樂更新、道窮而變變而通、衣冠復舊、豈期叔運之際、再遇太平之時、某、年德俱尊、禪文兩熟、方丈三韓外、曩遊把釣竿拂珊瑚枝、孤舟幾日程、歸來磨鐵硯賦扶桑樹、然寶劍未逢賞識、氣干斗牛、而焦桐既遇知音、聲諧律呂、維邦侯松楸之家廟、乃祖師蒼蘊之叢林、于以擊鼓陞堂、庶幾乘車戴笠、

同道舊疏

同人道舊疏 蟾肪合玉、固謂無心於求知、蚌殼含珠、初非有意於待賈、苟同氣之攸感、雖異塗而必

頭人今川貞世

周信ノ諸山疏

妙準ノ法嗣 疎石ニ從フ

通、某、澹爾秋容、卓乎晚節、隨機而說法、笑山巒社伽一味拍盲、肆筆以成書、謂仲靈器之九京可作、出諸老彫零之後、慰衆星磊落之晨、蕙帳山空、俄驚夜鶴之曉夢、桃源水漲、緬想秦人之僂蹤、庶卜後期、用申舊好、

〔延寶傳燈錄〕二十五 淨智太平妙準禪師法嗣

相州淨妙芳庭法菊禪師、契佛真機之後、從夢窓于天龍、請益日久、應安元年夏、住相之淨妙、○下

〔本朝高僧傳〕三十二 相州淨妙寺沙門法菊傳

釋法菊、字芳庭、自承太平之記、掛錫洛之天龍、從正覺國師、請益日久、江州刺史源高録行氏佐佐木氏、號道譽、○氏頼ノ誤カ、氏頼、法菊ニ歸依スルコト應安三年六月七日氏頼卒去ノ條、及ヒ同年三月二日法菊入寂ノ條ニ見ユ、父子、見其靈利、歸挹特撫、應安元年夏住相之淨妙、列刹衆僧躡逢嘉會、○下

六日、丙午後伏見天皇三十三回聖忌、崇光上皇、追善御法會ヲ仙洞御

所ニ修セラル、

〔愚管記〕十二 四月六日、丙午、晴、後伏見院三十三廻御國忌也、於仙洞被修御佛事、示空上人引率一念僧衆參候、被修三日三夜別時、今日被供養佛經阿彌陀三尊同經六卷云々、示空上人勤御導師云々、入夜被行法事講、管絃所作人堂上堂下簾中簾外廿餘

導師示空

南朝正平二十三年 北朝應安元年四月七日

二二八

人、有祕曲甘州只、云々、及天明事終云々、淨金剛院融觀上人於本坊勤行如法念佛云々、
今度御別時中二條前關白（良基）、四條前中納言（藤原忠光）、別當（楊梅兼親）、前兵部卿等共行云々、

〔體源抄〕十二 一代々大鼓所作少々載之、

應安元年四月六日、仙洞御法事講、甘州只拍子事、可被用何説由、就内外被尋下之間、
於仙洞御沙汰、今度始度タリ、先可被用常説切貝、歟由申入了、然間被用此説也、三反殘
鞞鼓新樂打之、大鼓自第二反頭加三度拍子、大鼓（尊原）信秋、鞞鼓（大辨）景繼、

〔石清水文書〕四 一同四月、日、於御室御所結緣灌頂、大阿闍梨成助僧正、
後伏見院卅三年御追善云々、

○後伏見天皇崩御ノコト延元元年四月六日ノ條ニ、入道尊道親王、同天皇三十三回
聖忌法會ヲ十樂院ニ預修セラル、コト去年四月六日ノ條ニ、北朝、同御追善懺法ヲ
禁中ニ預修スルコト本年三月十六日ノ條ニ見ユ、

七日、丁未 大闡法大、淨智寺住持ト爲ル、

〔空華日用工夫略集〕 一 四月七日、○中 闡大法住淨智、作諸山疏、且提調入寺之
事、以夏兄之誼也、

〔空華集〕十九 闡大法住淨智山門疏幕府新有奢侈之禁、○幕府、諸山住持入院ノ制ヲ
定メ、奢侈ヲ禁ズルコト二月十三日ノ條ニ見ユ、

幕府宣新令、具瞻儉德之光、叢林復古風、一洗華靡之習、苟欲主盟法社、先須羅致人
才、某、傳佛心宗、了圓覺義、三級巖前下一喝、魚躍上龍門、萬年山裏祝三呼、鳳鳴出
丹穴、矧茲金地、寔曰寶山（淨智寺）、塵塵盡是淨智莊嚴、步步無非毘盧境界、罷聽西山之雨、來
觀東海之瀾、佛運重興、皇圖益永、

同法眷疏

同人法眷疏

司馬温公製布被而銘、德由儉著、大龜尊者受金襴之寄、宗以心傳、視古人猶今人、行正
法於末法、某、胸天月朗、戒體冰清、探鴨水而獲摩尼珠、泥團土塊（大龜寺）、登龜山而叫擔板
漢、玉振金聲、既衣錦還鄉、沉推車熟路、氈拍板無孔笛、先師此話貴要重行、金剛圈栗
棘蓬、陳年滯貨何妨拈出、五峰起舞、四海歡騰、

〔無規矩〕下之上 大法西堂住淨智諸山疏

一朵波羅花、便是正法眼藏、萬兩真金寶、以爲淨智莊嚴、苟非中峯的孫、奚董東關名
刹、令乘虚席、偶得斯人、某、密傳正覺心燈、高懸圓照慧鏡、根深故確乎不拔、持素節
於霜酸雪苦之時、機廻則感而遂通、觀光儀於月落星橫之曙、多聞強記古阿難陀、雅思淵
才今甘露滅、俯遵賢檀復命、兼樹禪衲輿情、菩薩度生本隨宜、知識垂慈亦如此、舌上翻
瀾之辯、必有親承、鼻端斷聖之斤、非無妙質、普施叢林三草二木之潤、能扶法道千鈞一

靈致ノ諸
山疏

南朝正平二十三年 北朝應安元年四月七日

二二九

髮之危、平生故交、踵門伸賀、永夜明燭、隔壁分輝、

〔延寶傳燈錄〕二十四 臨濟宗 天龍夢窓疎石國師法嗣

京兆天龍大法大闡禪師、山名氏甲族、武州人也、穎異超邁、慕正覺之道、就弟子之列、久之依嵩山中于東山、又雲遊諸方、悉蒙推獎、歸受覺之印、應安元年、住相之淨智、略

〔本朝高僧傳〕三十六 淨禪三之十八 京兆天龍寺沙門大闡傳

釋大闡、字大法、姓源、出於武州山名甲族之家、妙年侍夢窓國師、入室登奧、又萍遊諸方、悉蒙推獎、依嵩山中公于東山、應安元年、承府帖、住相之淨智、嗣香熱向夢窓、略

八日、戊申越前守護畠山義深、任國二赴ク、

〔花營三代記〕四月八日、畠山尾州禪門下向越前、

十日、庚戌幕府侍所沙汰始、

〔花營三代記〕四月十日、侍所沙汰始、頭人今川中書、宿所、

十五日、乙卯義滿元服ス、是日、管領細川賴之、武藏守二任ゼラル、

〔愚管記〕十二 四月十五日、乙卯、雨降、今夜左馬頭義滿加元服云々、細川右馬頭賴

之被宣下武藏守云々、

十九日、己未、雨降、今日遣使者於武家、賀冠禮事、管領細川許同賀之、三ヶ日令斟酌、昨

疎石ノ法嗣

居中ニ依ル

頭人今川國泰ノ宿所ニ行フ

近衛道嗣冠禮ヲ賀ス

祝儀式次第

日又赤舌日也、武家殊憚之歎之間今日遣之、

〔鹿苑院殿御元服記〕

應安元年四月朔日

御祝儀式次第

先御出御鬢所、令著御裝束狩衣、給御出、

次理髮役人持參御立烏帽子、御右御脇並之、即口出、

次役人持參泔坏、入水、御前之左ニ置即退出、

次理髮參勤之、

次加冠參勤之、其後疊御座仁有御移給、

次獻御飯、六本立、御陪膳彼役人三人、兩兵部、典殿、

次加冠著座、

次被聞食三獻、

次進御劔、役右馬助、此外御鏡、弓、征矢、鞍馬内々被進之、管領沙汰也、

次被下御劔於加冠武州、役人吉見右京亮賴詮、鞍馬一疋内々被下、

御裝束以料所年買伊勢入道沙汰進之、御服所調進、奉行方申付之、

御狩衣白文松唐草、御指貫紫、御扇

南朝正平二十三年 北朝應安元年四月十五日

理髮
加冠

賴之ニ劍ヲ與フ

具足

南朝正平二十三年 北朝應安元年四月十五日

御具足料足政所沙汰

打亂箱唐木文菊貝、以青地錦張内、口一尺三寸、自元御前仁有之、仍被出之、

御櫛三解、桐葉蒔繪也、細、御小基三筋赤組、

小刀一五寸、片シノキツカ、サヤ一尺二寸、以紙卷、水引三所結之、

甲貝一鹿角、

御櫛手巾長六尺、横三尺六寸、加賀絹三幅、文白菱、繪所行光畫進之、

水引三筋 檀紙一重

以上納打亂箱、進上御前、

泔坏銀圓器、口三寸九分、文唐花鳥、付臺銀、

掌燈二執、獨役無之、切灯臺、高一尺五寸、白文松鶴、

奉行 攝津掃部頭能直

松田左衛尉貞秀

齋藤太郎左衛門尉利治員イ

加冠以下役人奉行人等、皆著白直垂、

三ヶ日御祝儀在之、御劍、鞍馬、雜掌進之、

繪所土佐行光ノ畫

奉行人

勅使

義滿物ヲ
獻ジテ恩ヲ
謝ス

禁裡へ進上ノ金代等ハ諸國守護ノ役

兩日

十六日、今川中務少輔、依舍兄法體不被仰付之、

十七日、山名中務太輔、親父左京大夫入道同前、

御劍持參舍弟民部少輔、

若御料被進

御劍鞍馬、

今日役人奉行人等被下御劍、以後日人々御劍御馬雜掌料等進上之、

廿七日、御評定始、○中略

勅使忠光卿被參、後日白太刀、鞍馬、

禁裡進物事後日有沙汰、被進之、

砂金百兩兩分、本法銀折敷、太刀一腰皆銀、

鞍馬一疋鹿毛、切付唐皮、當日御祝仁同管領進上之、

御使能直、持參執奏、

鞍馬一疋總鞍、被進執奏、西園寺前右府

禁裡御進上金代等諸國守護役、

南朝正平二十三年 北朝應安元年四月十五日

〔花營三代記〕 四月十五日、亥刻左馬頭殿御元服、

元服諸役

役人

加冠 細川右馬頭賴之于時管領、今日任武藏守、

理髮 細川兵部大輔業氏

打亂箱 細川右馬助 兵部少輔(細川氏卷)

泔杯 細川右馬助

裝束

御裝束 布衣、立烏帽子、同十七日、被著折烏帽子、香御直垂、

當日御雜掌管領

御劔役細川右馬助、御鎧御馬以下御太刀一振、以吉見左京亮被下管領、政所役、于時

山城中務少輔入道行照子息菊鶴丸出仕候、執事代齋藤内右衛門入道支觀子息四郎右衛

門尉基兼 出仕之、

十六日、御雜掌今川伊豫入道、了俊、俗名貞世、御引出物御馬一疋、置鞍、并御太刀一腰被進之、

十七日、御雜掌山名左京大夫入道、御引出物同前、

奉行人

奉行人

攝津掃部頭能直

〔建内記〕

管領役人

松田左衛門尉貞秀

齋藤太郎兵衛尉利員

管領役人以下裝束白直垂、

言也、

裝束

當日御雜掌管領

御劔役細川右馬助、御鎧御馬以下御太刀一振、以吉見左京亮被下管領、政所役、于時

山城中務少輔入道行照子息菊鶴丸出仕候、執事代齋藤内右衛門入道支觀子息四郎右衛

門尉基兼 出仕之、

十六日、御雜掌今川伊豫入道、了俊、俗名貞世、御引出物御馬一疋、置鞍、并御太刀一腰被進之、

十七日、御雜掌山名左京大夫入道、御引出物同前、

奉行人

奉行人

攝津掃部頭能直

〔建内記〕 ○柳原家記錄 百五十六所收 正長二年三月七日、松田秀藤云、應安元年御元服之時、後日自

公家有勅使、忠、卿、勅使賜引出物之由有記錄、後日自武家御進物付西園寺前右大臣 于時實俊公、

被進之、金百兩、御馬、太刀也、以上見武家記云々、忠、卿事、引勘之處、于時權中納

言也、

九日、乙卯、○中略今度之儀、被任鹿苑院殿應安元年四月十五日御元服之儀、有其沙汰、

仍一向武家之儀也、○下略

〔大乘院日記目錄〕 一 四月十五日、義滿御元服、十二、于時左馬頭、正五位下、加

冠細川賴之朝臣、○足利家官位記、京都將軍家譜、武家年代記、永源師權紀年錄等異事無キヲ以テ略ス、

〔執事補任次第〕 細川右馬頭賴之、讚岐守賴春息、應安元年四月十五日任武藏守、

○幕府、評定始ヲ行ヒ、義滿之ニ臨ムコト本月二十七日ノ條ニ見ユ、

十九日、己未北朝小除日、

〔公卿補任〕 三十 四

南朝正平二十三年 北朝應安元年四月十九日

南朝正平二十三年 北朝應安元年四月二十一日

二二六

權中納言正三位藤爲秀(冷泉)

四月十九日辭退、

從三位藤師嗣(位實綱上二條)

四月十九日任、同日右近中將如元、

參 議正四位下藤隆仲(四條)

四月十九日敍從三位、

正四位下源通氏(中院)

右近中將、備前權守、四月十九日敍從三位、

非參議從三位藤兼嗣(近衛)

四月十九日敍、同日右近權中將敍留、

從三位藤經嗣(一條)

四月十九日正四位下、越階、

〔公卿補任〕三十四 應安三年

非參議從三位藤通定(花山院)

應安元四月廿日從四位上、

〔辨官補任〕〇柳原家記録 六十二所收

右大辨從四位上藤嗣房(萬里小路)八、藏人頭、四月十三日復任、〇公卿補

〔愚管記〕十二

四月十九日、己未、雨降、〇中今夜於陣被行小除目、三位中將師嗣任

權中納言、中將如元、其外皆雜任也、

二十一日、酉辛北朝賀茂祭、

〔愚管記〕十二

四月十日、庚戌、晴、〇中

三位局沙汰立賀茂祭女使云々、祿衣可相訪之由示之、可送遣之由答之、

女使

陣ニ於テ
行ハル

近衛使

廿一日、辛酉、晴、午剋雷鳴雨降、即屬霽、風頗吹、賀茂祭、近衛使伯業定王沙汰立之、近年每年之所役也、唐鞍移等依申請遣之、

二十二日、戌壬北朝僧事、

〔愚管記〕十二 四月廿二日、壬戌、晴、今夜被行僧事、

二十七日、卯丁幕府評定始、義滿之二臨ム、

〔鹿苑院殿御元服記〕 四月廿七日、御評定始、

御座(細川卿之)法體、出(攝津能直) 洒掃 松田貞秀

奏事寺社三ヶ條、伊勢 石清水、安樂寺俗別當、

諸社神馬

上七社 伊勢内外、石清水、鞍馬、北野 祇園 吉田

大原野 新熊野 諏方 新八幡(六條篠村) 五靈社(御力)

護持僧

地藏院前大僧正覺雄、於本坊祈念之

當日御加持

三寶院僧正光濟

南朝正平二十三年 北朝應安元年四月二十二日 二十七日

二二七

寺社三ヶ條

諸社ニ神馬ヲ上ル

護持僧前大僧正覺雄

加持僧正光濟

南朝正平二十三年 北朝應安元年四月二十七日

共以御使被進鞍馬畢、

身固

御身固 宗時朝臣

裝束師

御裝束師永秀朝臣

至繪所イ 玉繪被下御馬、

勅使

勅使忠光卿被參、○下

〔花營三代記〕

四月廿七日、(義澤)左馬頭殿御評定御出仕始、

御裝束狩衣、

出仕人々

(細川頼之) 管領

(能直) 攝津掃部頭

奏事 松田左衛門尉

孔子 (康壽) 諏方左近將監

〔大乘院日記目錄〕

一 四月廿六日、評定始御出座、

○義滿元服ノコト本月十五日ノ條ニ、將軍職ニ任ゼラル、コト十二月三十日ノ條ニ見ユ、

前南禪寺住持靈致、

天

播磨法雲寺住持ト爲リ、是日入院ス、

〔無規矩〕

上之

播州金華山法雲禪寺語錄

應安元年戊申四月二十七日入寺、

山門、佛祖向上關板、只在人人歩武、會變、雲從龍風從虎、

佛殿、天上天下無如佛、世出世間莫能比、世間所有我盡見、一切無有如佛者、山僧倦

遊、相依過夏、

土地堂、靈山會上受囑累、如來遺法慣扶起、唵度嚕地尾、

祖師堂、一隊姦漢、賣弄心印、饒人不可饒、信人不可信、

據室、(友梅)這裡是寶覺老人、烹金之爐、妙密鉗鎚、鑄人之模、兒孫彌滿天下、何止四碧眼

胡、

拈公帖、佛門棟梁、皇家保障、一言纔出、天下服膺、

(赤松光範)拈攝州刺史帖、了事凡夫、在家菩薩、裴休龐蘊、異世同心、

指法座、這法座勿量大、非思量分別之所能解、乃登座、

祝聖拈香云、恭願、大椿八千齡、盛於蒼松老檜之盛、飛龍九五位、安於太山盤石之安、

(義滿)次爲相公拈香云、欽願、措枉舉直之功、輔弼皇道、旋乾轉坤之力、扶持佛門、

次爲知州拈香云、伏願、凱旋之暇、深究祖宗、外護之心、不忘佛勅、

嗣香畢、就座、垂語云、人天交接、兩得相見、譬如青天白日無雲翳、快便難逢、各請薦

南朝正平二十三年 北朝應安元年四月二十七日

取、僧問、大聖應世、來住此山、四衆臨筵、願聞法要、答曰、紙撚無油、秤槌是鐵、進云、法身無相、應物現形、如何是無相法身、答曰、熾然作用、一物不爲、進云、便恁麼去時如何、答曰、作家不啐啄、僧禮拜、師乃曰、三獸渡河、兔馬不及香象之力、三車當門、羊鹿不及白牛之力、然雖如此、獼猴有一面古鏡、狸奴有萬里神光、凡夫之如、聖人之如、一如無二、如九江四瀆名各異、流歸大海成底一味、鰕鱓魚龍及修羅、飲者咸皆飽其水、

小參、垂語、無孔笛氈拍版、鐵釘飯木札羹、無味而五味和、無聲而五聲鳴、不涉耳舌、如何辨明、莫有道得底麼、僧問、須彌座上歛伽梨、海口潮音闡大機、答曰、一向舉揚宗乘、直須法堂裡草深一丈、進云、今晨開堂、今晚家訓、大善知識、方便多門、答曰、雲行雨施、品物流形、進云、佛祖機前提正令、蟪蛄眼裏舞三臺、答曰、眼色耳聲、萬法成辨、進云、今古應無墮、分明在目前、答曰、前三三後三三、進云、入得烹金爐罏裡、烏薪變作紫栴檀、答曰、報化非真佛、亦非說法者、僧禮拜、師乃曰、釋迦不出世、四十九年說、達磨不西來、少林有妙訣、衆生背覺合塵、往往虛生浪死、所以累他諸佛諸祖、有時高高峰頂立、有時深深海底行、皆是事不獲已故、向紫羅帳裡撒真珠了、伶俐衲僧、隔山見烟、早知是火、隔牆見角、便知是牛、喝、

開山寶覺塔ヲ祭ル

復舉、趙州(從後)和尚因僧問、如何是道、州云、牆外底、僧云、某甲不問這箇道、州云、是什麼、僧云、大道、州云、大道透長安、師拈云、此一條通天大路、踏得著底、百千萬億佛國土、在脚尖頭、踏不著底、東震旦西竺乾、迢迢十萬里、

〔無規矩〕下之上 祭文 祭法雲開山寶覺塔

城州洛東禪居東菴寓居比丘靈致、欽於應安元年四月二十七日、遵檀度命、來住播州金華山法雲禪寺、於其翌日、肅詣本寺開山寶覺真空禪師雪村大和尚靈塔之前、營備香茗果蔬之饌、九拜焚香、告以奠文、其辭曰、○下略、全文ハ貞和二年十二月二日友梅示寂ノ條ニ收ム、

○赤松則村、播磨赤穂郡苔繩郷ニ法雲寺ヲ建テ、友梅ヲ住持ト爲スコト建武四年七月一日ノ條ニ見ユ、

二十八日、辰幕府、法華八講ヲ修ス、是日結願、

〔愚管記〕十二 四月廿八日、戊辰、時々雨降、武家八講今日結願云々、

是月、山城金蓮院雜掌定勝、庄十郎姓關ノ同寺領伊勢茂永小泉御厨ヲ押領スルヲ停メラレンコトヲ幕府ニ請フ、

〔地藏院文書〕上 ○京都帝國大學所藏文書所收

金蓮院雜掌(從)勝謹言上

南朝正平二十三年 北朝應安元年四月二十八日 是月

欲早任文永十年官符宣、代々勅裁并貞和元年御下知旨、被經嚴密御沙汰、被成御教書於守護方、被停止庄十郎不知實名、押領、全寺用伊勢國茂永小泉御厨事

副進

一通 御下知案 貞和元年十一月十七日

官符宣代々勅裁等依事繁略之、

右於彼地者、當寺院領也、仍任文永十年官符宣并正安元年以來代々勅裁之旨、爲寺領知行送年序訖、而貞和元年今河式部大夫違亂之間、就訴申、被成御下知、當知行無相違之處、去貞治四年八月以來、庄十郎號守護披管仁、募彼武威、以佛性燈油料所、無是非令押領、追出寺家雜掌、不寄付所務之條、難堪之次第也、所詮被經嚴密御沙汰、被成御教書於守護方、被退彼輩押領、被打渡下地於寺家雜掌、全寺用、彌爲奉祈天下安全、謹言上如件、

應安元年卯月 日

北黨仁木義尹、伊豫ニ入り大田ニ陣ス、南黨河野通直ノ一族、之ヲ邀ヘ戦フ、尋テ通直、九州ヨリ還リ義尹ヲ擊退ス、

〔豫章記〕

〔正平〕 同廿三年貞治六年也

爲山方退治、仁木方大將ニテ、宇和喜多兩郡ニ被馳向、然共

守護ノ被
官ト號ス

吉岡大野
森山ノ諸
將防ノ前
通直豐浦
根津ノ航
ヲ出航ス

隨從ノ軍
勢

筑紫ヨリ
加勢ノ人

不相隨、於大田居、河野一族吉岡方爲始、宇和山方居ス人々、山方衆大野、森山伊賀守等四月大田陣落ス、懸テ鎮西ヘ注進ス、〔河野〕通直可有御渡海事定矣、亦佐伯、〔曾根〕豊前ヘ參ル、雖然御暇不給、數日ヲ越テ六月始御暇給テ、豊前根津ノ浦御出、同四日、〔今川〕通任カ舟ニテ御乗初也、船中ノ御伴、大内式部少輔、富岡尾張守、大内九郎左衛門尉、栗上、延吉等也、同十七日、御出御伴正岡十郎入道、舍弟中務丞、尾張守、大田四郎左衛門尉、栗上、中川十郎入道、子息隼人助、純阿、舍弟兵部少丞、勘解由左衛門、淺海、富岡、重見、庄帶刀、大輔房、窪十郎左衛門尉、舍弟彈正、尾越藏人、左衛門四郎、難波彈正、池内孫太郎、淺海兵庫助、正岡大熊掃部助、大窪左京進、舍弟藏人丞、多賀谷修理亮、小山兵庫助、高山雅樂助、刑部、宮崎宮内丞、子息孫七郎、大内大藏少輔、同九郎左衛門尉、中大四郎左衛門尉、福角與四郎、日向六郎、須保木將監、高尾八郎左衛門尉、大藏修理亮、桑原刑部少輔入道、同左京亮、日吉兵部丞、上野兵庫允、山越將監、垂水圖書、左衛門尉、施田左京亮、三郎左衛門尉、中子三郎左衛門尉、牛淵美作守、同孫六、白石三郎左衛門尉、同刑部丞、中次三郎兵衛尉、宅間孫七郎、渡邊又次郎、同彌三郎、志津川修理亮、平井左京亮、同大炊介、堀池雅樂助、垣根川得久三郎、江戸中津、同兵衛九郎、筑紫ニテ當參ノ人々ニハ、箱川又太郎兄弟、伊東、湯淺、馬場、松永、其外數輩、

周防屋代
島ニ著船
ス

伊豫松崎
ニ上陸ス

西園寺一
黨加勢ス

大空城

宍草入道
父子自害

花見山城

惠良城

南朝正平二十三年 北朝應安元年四月是月

二四四

同廿日、周防屋代嶋ニ御著也、爰ニテ戒能參リ諸方ノ御計策、同廿六日、二神、南方、吳ヨリ參ス、久枝、正岡、能美ヨリ參ス、久津那衆畑見屋代ヨリ參ス、中子類宇野左京亮、池内兵庫允等相加テ、船三十餘艘ノ中二百餘打立、同卅日松崎へ取上ル、即宍草入道父子三人、國人ニハ土居面々三百餘騎ニテ馳向、未時ヨリ合戦始リ、忽ニ勝利ヲ得、山本四郎以下數輩討取、即温泉ニ陣取由聞ヘシカハ、夜討有ヘキ支度ト云ヘ共、不堪大空へ引籠、吾河、黒田、岩屋谷衆最前ニ馳參ス、閏六月四日、松崎ヨリ船陸二手ニテ福角ニ發向ス、其夜久万越ニ陣取ル、通任ハ陸ノ御伴也、彼是馬上六十餘騎、具足四百八十餘ト聞ユ、五日、又福角ニ發向ス、同八日、花見山城ヲ攻陣取、西園寺山方衆相加ノ間、其勢雲霞ノ如シ、同十一日、大空城へ正岡六郎左衛門尉忍ヲ入テ打落ス、同十三日夜、宍草入道父子、若黨六人自害ス、國人等六十餘人雖籠、或降參シ、或没落シ畢ヌ、同七月十七日、花見山城降參ス、少々残り留ル者ハ、久枝四郎左衛門入道與利ナトハ、道ノ口ヲ乞テ退出ス、其後難波、正岡人々皆參ス、同日仁木爲大將、野々口打出、當方可打向之處、惠良城ニ望月六郎左衛門尉、松浦、淺海、尾越等楯籠ル、其外乃万、多賀谷彦四郎、宇佐美等有ニ依テ、南山城入道南面ニ陣ヲ取、北面ニハ陣ナシ、能嶋衆可陣取雖被仰、大略斟酌ス、庄帶刀左衛門尉ヲ以テ、通任可調法之由被仰出間、菟角申誘、同十八

高山ノ陣

義尹ヲ府
中ニ擊退
ス

八藏ノ陣

義尹退散
ス
通直府中
ニ入ル

越智歸順
ス

日、淺海口令陣取、其後福角へ御立有テ、此一揆衆玉井入道父子、大野八郎左衛門尉兄弟、村上、山内、池内、櫛戸、通任也、同九月六日、府中ノ敵佐波ニ數輩ヲ引率ノ、菊万ニ打越、高山陣取、既及難儀ノ由、得居、正岡、東得、重長、左近方ヨリ注進ス、即馳飯可有合力之由被仰之間、返向處ニ、鴨部、大井、乃万邊後攻トテ騒動ス、終日合戦、敵少々打取テ府中へ追返ス、兩方引退處ニ、十日、佐波ヨリ重テ勢越テ高山ヲ取、切籠峯ニ陣ヲ取、同十九日、夜討ノ一陣ニ追落ス、故ニ府中衆十四人討取、味方ニハ大籠藏人一人討死、同十三日、野々口ヨリ敵千騎計ニテ打下テ、八藏ニ陣取ヘキ支度也、味方ハ淨土寺ヨリ出合テ合戦シ、敵數輩打取テ、仁木ヲ始メ方々退散ス、同十六日、惠良城衆道口ヲ乞退出ス、村上、山内、池内、須佐美等カ籌策ニ依テ也、同廿九日、御出府、雖然佐波木梨入道城有中道前手向、越智降參ス、

〔改姓〕
〔築山〕
河野家之譜 通堯 正平二十三年、豫州在國ノ一族國人等ヲ襲テ、仁木左京大

夫義□率數千騎、宇和喜多二郡エ馳向、此時大野、吉岡、森山伊賀守等宇和ノ山方ニ在テ拒之、義□ト相戦フ夏日アリ、同四月於大田合戦、吉岡及大野、森山敗戦、角テ京兆大勢ニテ防拒難叶ヨシ鎮西エ注進ス、通直則將軍ノ宮エ夏ノ子細ヲ言上シ、爲退治歸國有度ヨシ歎申ケル、又豊前佐伯ニ有シ義弘、通任エモ此事ヲ告タリケルカ、其頃筑紫守警ノ

南朝正平二十三年 北朝應安元年四月是月

二四五

武士モ多カラサレハ、菟角延引在テ、漸六月上旬ニ、御暇玉ハリテ、同四日、豊前根津ノ浦ニ出テ、村上、今岡ニ期ヲ約ノ、彼浦ニテ艦シテ、同十七日、根津ノ湊ヲ漕出シ、豫州ニ帆ヲ揚ク、船中供奉ノ人々ニハ、大内式部少輔、富岡尾張守、大内九郎左衛門、栗上、延吉、正岡十郎入道、舍弟中務丞、尾張守、大田四郎左衛門、中川十郎入道、子息隼人佐、純阿、舍弟兵部丞、勘解由左衛門、淺海、重見、庄帶刀、大輔房、窪十郎左衛門、舍弟彈正、尾越藏人、左衛門四郎、難波彈正、池内孫太郎、淺海兵庫助、正岡大熊掃部助、大窪左京進、舍弟藏人丞、多賀谷修理亮、小山兵庫助、高山雅樂助、刑部、宮崎宮内丞、子息孫七郎、大内大藏少輔、同九郎左衛門、中川四郎左衛門、福角與四郎、日向六郎、須保木將監、高尾八郎左衛門、大藏修理亮、桑原刑部少輔入道、同左京、日吉兵部丞、上野兵庫、山越將監、垂水圖書、同左衛門尉、施田左京亮、同三郎左衛門、牛淵美作守、同孫六、白石三郎左衛門、同刑部丞、中須三郎左衛門、宅間孫七郎、渡邊又次郎、同彌三郎、志津川修理亮、平井左京亮、同大炊助、堀池雅樂頭、垣根川得久三郎、江戸中津、同兵衛九郎、箱川又太郎兄弟、伊東、湯淺、馬場、松永、箱川以下ハ、通直隨、同二十七日、防州矢代島ニ著船、此時戒能カ一族、通直歸帆ヲ喜ンテ、一番ニ馳參ス、相續テ來ル人々ニハ、二神、南方與ノ住人、久枝、正岡能美住、畑見久津住、中子カ一類宇野左京、

池田兵庫等也、矢代ノ島ノ住、同二十六日、一族郎從屋代ノ島ニ會合シテ、各軍事ヲ議ス、先松崎ノ敵ヲ討拂テ、直クニ福角エノ手配有ヘキト、各兵船三十餘艘ニ取乗テ、屋代島ヲ漕出ス、同三十日、松崎ニ船ヲ留テ、爰ニテ軍備ヲ定ム、土居ノ一黨都合三百餘騎、宍草入道父子三人並吾河、黒田等モ松崎ニ馳著テ、同其列ニアリテ、温泉山ニ馳向フ、未ノ時ヨリ合戰始テ忽得勝利、山本四郎以下數輩討捕テ、猶松崎ニ陣ヲ張ル、于屹敵敗卒ヲ集テ則温泉ニ陣取ル、依之今夜密ニ兵ヲ分テ、勞睡ノ虚ヲ襲フヘシト夜討ノ用意ヲナス所ニ、敵爰ニモ不堪シテ大空ニ引入ケル、閏六月四日、松崎ヨリ海陸二手ニテ福角エ發向、其勢都合五百四十餘騎、通直ハ陸ヨリ進ミ、今岡通任等隨之、其夜ハ久万越ニ陣ヲ張ル、同五日、又福角エ相働互ニ勝敗アリ、同八日、花見山ノ城ニ屯ス、西齒寺カ一黨相加テ其勢如雲霞、同十一日、大空ノ城エ正岡六郎左衛門忍ヲ入テ拔之、同十三日ノ夜、宍草入道父子、若黨六人自害ス、國人等六十餘人或降參シ、或ハ没落シ訖、七月十七日、花見山ノ城降參、久枝四郎左衛門與利ハ幸ニ免レテ、難波、正岡等相俱ニ通直カ勢ニ加ル、同日仁木義章、野々口エ兵ヲ進ム、通直馳向ハントスル所、惠良城モ望月六郎左衛門及松浦、淺海、尾越、多賀屋彦四郎、宇佐美等守之ナリ、戰ヒ急ナリト告來ル、南山城入道ハ、率兵大手ニ張出テ雖拒之、搦手ノ守兵其儲ナシ、于屹通直、庄帶刀左衛門ヲシテ、今岡通任ニ下知シテ、同

十八日淺海口ニ陣取シム、依之、今岡通任及ヒ玉井入道父子、大野八郎左衛門兄弟、村上、山内、池田、櫛戸等隨之、其後通直ハ福角エ鞭ヲ揚、九月六日、仁木府中ノ勢千騎ヲ率テ、佐波ヨリ菊萬ヲ越、高山ニ陣取ル、得居、正岡、東得、重長、左近等已ニ及難儀ヨシ注進之、通直福角ヲ去テ救之、野間、大井之邊ニテ終日戰テ得勝利、敵少々討捕、殘黨府中ヲサシテ敗走ス、同十日、敵佐波ヨリ重テ勢ヲ率テ、高山、切籠峯ノ間ニ陣取、同十三日、野々口敵數千騎ヲ率テ、八藏ニ陣取ヘキ用意也、味方淨土寺ヨリ出合テ及合戰、敵數多討捕、大將仁木ヲ始テ敗北、惠良ノ城守兵微ニシテ、而モ敵攻之更急ナリ、依之同十六日、城兵圍ヲ脱シテ出ツ、村上、山内、池田、須佐美等カ籌策ニ依テ也、同十九日、切籠峯エ夜討シテ一陣ヲ破ル、敵十餘人討捕、味方ニモ大籠大藏一人戰死ス、同廿九日、通直兵ヲ率テ府中エ發ス、木梨入道佐波ニ城ヲ構テ窺之、中道前手向、越智改先非降ル、通直許之、

幕府義尹
ヲ豫守
職ニ補
ス

〔豫陽河野家譜〕^三 仍正平廿三年、仁木兵部少輔義尹補豫州守護職、進發字和喜多兩郡、同年四月、陣于大田、自味方攻之、數日挑戰、終得勝利、同廿八日、仁木乃沒落大田陣、艦注進于鎮西、故河野家御飯國之支相定而後、又從佐伯被參于豊前、雖然數日不賜御暇、六月初賜御暇之間、令出豊前根津浦給、於今岡之船有御乘初、船中供奉之輩者、

大内式部少輔^{通弘}、富岡尾張守^{通行}、大内九郎左衛門、栗上^{兵衛}、延吉等也、同十七日、御出船、隨

從之輩者、正岡十郎入道^{宗榮}、舍弟中務丞、同尾張守、大田四郎左衛門、栗上左衛門尉、中

川十郎入道、子息隼人助、延吉純阿入道、舍弟兵部丞、同勘解由左衛門、淺海、富岡、

重見、庄帶刀左衛門、同太輔房、窪十郎左衛門、舍弟彈正、尾越藏人、同左衛門四郎、

難波彈正、池内孫太郎、淺海兵庫介、正岡大熊掃部介、大窪左京進、舍弟藏人、多賀谷

修理亮、小山兵庫介、高山雅樂介、同刑部丞、宮前^{宮内丞}、子息孫七郎、大内大藏少

輔、同九郎左衛門、中太郎四郎左衛門、福角與四郎、日向六郎、總木將監、^{又草包木、又須保木、高}

尾八郎左衛門、大籠^{藏力}修理亮、桑原刑部少輔入道、同左京亮、日吉兵部丞、上野兵庫介、

山越將監、垂水圖書、左衛門、施田左京亮、同三郎左衛門、同刑部丞、中須三郎兵衛、中

子三郎左衛門、牛淵美作守、同孫六、白石三郎左衛門、宅間孫七郎、渡部^源又二郎、同彌

三郎、志津川修理亮、平井左京亮、同大炊介、堀池雅樂介、垣根川^{カキ子}得久三郎、江戸中津、

同兵衛九郎、於筑紫當參之輩者、箱川又太郎兄弟、伊東、湯淺、馬場、松永、其外數輩、

同廿日、刑部主令著屋代嶋給、於于此戒能參上、仍被定諸方計策、同廿六日、二神、南

方等從吳參、久枝、正岡、從能美參、忽那衆從畑見屋代參、中子一類宇野左京亮、池内兵

庫介等相加、船三十餘艘之中二百餘人打立、同晦日、從松前濱^{伊與郡}、馳揚、攻安草入道、

同出羽守、國人者土居面々卒三百餘騎馳向、自未刻合戰始、即得勝利、討捕山本四郎以下數輩、敵又到于温泉郡、捕陣之間、自味方欲夜討、敵不堪引籠于大空城、吾河、黑田、岩屋谷衆馳參寂前、閏六月四日、從松前海陸二手而發向于福角給、其夜久万越ニ捕陣、今岡通任陸之供奉也、彼是馬上六十餘騎、具足四百八十餘云々、同五日、著于福角、令攻大空、同八日、海上之勢從堀江馳揚、攻花見山、和介郡堀江此日西苑寺山方衆馳加之間、其勢如雲霞、同十一日、正岡六郎左衛門、重盛忍入大空城打落之、同十二日夜、安草入道父子若黨六人自害、國人六十餘人雖楯籠、或降參、或逃去訖、同七月十七日、花見山城降參、殘兵少々雖有之、久枝四郎左衛門入道等、乞道口退散、其後難波正岡等一族馳參、同日仁木卒大勢進發于野々口久米郡之由風聞、仍欲令馳向之處、敵方望月六郎左衛門、松浦、淺海、尾越等、依楯籠惠良城令圍之、其外乃万、多賀谷彦四郎、宇佐美等在之、仍南山城入道雖陣南面、依無北面陣、被仰付能嶋衆之處、大略樹、故通任可調法之旨、以淺海、庄帶刀左衛門申誘之、同十八日、令陣取淺海口、而後河野家進發于福角給、隨從之輩者、玉井入道父子、大野八郎左衛門、村上、山内、池内、櫛戸、通任等也、同九月六日、府中敵大勢從佐波打越菊間野間郡、捕高山陣、味方既及危難之條、自得居、正岡、東得、重長、左近等許注進、仍速馳飯可合力之由、被命玉

井、大野、村上、山内、池内、櫛戸、今岡等之間、乃飯向之處、敵爲夜攻從嶋郡打出大井、乃万邊、同於彼所々終日合戰、竟得勝利、敵少々討捕之、追返于府中訖、同十日、從佐波敵差添多勢、取切高山、張籠峯陣、同十九日、從味方夜討大鬪、府中之敵討取十四人、一陣令追落、味方者、大籠藏人一人討死、同廿三日、敵一千餘騎從野々口打下、八倉伊與郡可捕陣支度也、味方者從淨土寺浮穴郡拜志郷久米郡出合、遂合戰、討捕敵數百人、忽得勝利之間、仁木以下將軍方退散所々畢、同廿六日、依村上、池内、宇佐美等計略、惠良城主乞道口退出、同廿九日、河野家進發于府中給、雖然佐波木梨入道城在中道前、仍被差向越智之處降參矣、

○通堯、征西將軍懷良親王ニ歸順シ、名ヲ通直ト改ムルコト正平二十年五月十日ノ條ニ、在國ノ河野一族等、北黨ト戰フコト去年十二月二十七日ノ條ニ見ユ、

五月大盡 庚午朔

一日、庚午北朝、恒鎮法親王ヲシテ、禁中ニ佛眼法ヲ修シテ彗星ヲ祈禳セシム、

〔愚管記〕十二 五月一日、庚午、晴、恒鎮法親王梶井、故式部卿、恒明親王子、自今夜被候御修法、初度云々、參内之儀刷行粧云々、

〔石清水文書〕四 鳩嶺雜事記

一五月一日ヨリ梶井宮佛眼法令始行給云々、

〔建内記〕四

永享十一年二月廿八日、丙午天晴、夜陰、彗星出現事、司天從三位安倍有重卿

注進室町殿、略○中

公家御祈事、藏人右少辨俊秀、依御祈奉行可申沙汰之由被仰之、應安元年、永德、至德等度御祈條々有尋沙汰、略○中

應安元年

○中

一御修法二壇一壇佛眼法、一壇七佛藥師法、天地災變御祭事、略○下

○彗星ノ現ハル、コト二月十九日ノ條ニ、北朝、入道尊道親王ヲシテ、七佛藥師法

ヲ修シテ彗星ヲ祈禳セシムルコト本月十四日ノ條ニ見ユ、

二日、辛未幕府、山城東西九條ヲ東寺ニ還付シ、同寺ノ修造料所ト爲サシム、

〔東寺百合文書〕

セ武家御教書并達六十五之九十七

山城國東西九條事、所被返付也、早爲當寺修造料所、可勵營作之狀、依仰執達如件、

應安元年五月二日

細川頼之武藏守(花押)

東寺供僧御中

〔東寺百合文書〕

ヒ一之三十一

山城國東西九條事、任去五月十二日御寄進狀、沙汰付東寺雜掌頼憲、可被執進請取之

狀、依仰執達如件、

應安元年潤六月十四日

山名氏冬中務大輔(花押)

國泰今河中務少輔殿

東寺雜掌頼憲申山城國東西九條事、任御寄進狀并去潤六月十四日奉書等之旨、沙汰付下地於雜掌、可執進請取之狀如件、

應安元年七月廿六日

今川國泰中務少輔(花押)

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月二日

二五四

稻垣伊勢入道殿

齋藤六郎左衛門入道殿

〔雜掌書〕
使者請文

東寺雜掌賴憲申山城國東西九條事、任今月廿六日御施行之旨、打渡下地於雜掌候畢、仍請取狀謹進覽之候、若此條僞申候者、可罷蒙八幡大菩薩御罰候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

應安元年七月廿九日

沙彌明真（裏花押）

沙彌真祐（裏花押）

進上 御奉行所

東寺雜掌賴憲申山城國東西九條事、任被仰下之旨、沙汰付賴憲於下地候訖、仍彼雜掌請取狀并使者真祐、明真等請文謹進覽、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

〔應安元年〕
八月三日

中務少輔國泰（花押）

進上 御奉行所

寺家雜掌
賴憲請取
狀

〔東寺百合文書〕

○山城

東寺領山城國東西九條事、使節御遵行之間、渡給下地候訖、仍請取之狀如件、

應安元年七月廿九日

雜掌賴憲 在判

〔東寺百合文書〕

○山城
け最勝光院引付貞治六年七月廿九日

借渡 用途事

合貳拾貫文者、

右西築塙修造依爲念事、最勝光院方寺用內先所借渡也、凡當寺修造料所事、於武家爲申沙汰最中之上者、料足出現之時、可致返辨沙汰之由、供僧中衆議訖、仍借請之狀如件、

貞治六年七月五日

公文法眼判

寶嚴院
法印權大僧都判

西方院
權少僧都判

中將、
阿闍梨判

件料足者、遠江國村櫛庄本家役天龍寺沙汰分也、近年天龍寺管領之後者、更不及其沙汰、而春屋和尚妙葩西築塙破損之躰歎存之上者、彼本家分雖不及公方御沙汰、可被成彼

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月二日

二五五

貞治六年
西築塙修
造料トシ
テ最勝光
院方寺用
ヲ借ル

料足ハ遠
江國村櫛
本家役天
龍寺沙汰
分

本家分
十貫文ヲ
請取ル

修造料所
寄附セラ
ルハ上ハ
本家分返
濟セラレ
ベシ

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月二日

二五六

修理料足者、以別儀今明可致其沙汰云々、評議之處不及公方沙汰、遮如此申之上者、云
興隆、又云本家分沙汰支證、於當年者可被成修造料足、但御願各別料足也、一圓ニ□□
之條、不叶理之上者、以借渡儀可召置供僧□借書之治定了、

以評議治定分、今月五日增長院法印召具公人、相向天龍寺、彼本家分貳拾貫請取了、

〔東寺百合文書〕

○山城 最勝光院方引付 貞治七年
安元戊申

遠江村櫛庄寺用事應安元戊申

天龍寺沙汰分廿貫文五月十五日到來、彼寺送文出之、妙驪房

支配事、去年者件料足可被成修造足之旨、春屋和尙依令申之、一圓付造營方了、
願各別之間、自供僧方借書出之、修造料所被寄附之者、可致返辨沙汰云々、爰東西九條

沙汰已落居之上者、去年料足可被返之歟、何況於當年分者一圓可令支配供料哉之由、申

送供□方之處、雖非無其謂、去年以來天龍寺□
分

可去出修造方之旨評議了、講堂方所存又□無豫儀之間、十五貫文支配之了、

○義詮、東西九條ノ貢租ヲ東寺ニ寄セテ修造ノ費ニ充ツルコト康安元年九月十六日

ノ條ニ、幕府、政所ヲシテ同地ニ本役ヲ課スルヲ禁ズルコト明年十一月十二日ノ條

ニ、義滿、同地地頭職ヲ寄進スルコト永和三年十一月二十一日ノ條ニ見ユ、

三日、^壬北朝、入道尊道親王ヲシテ、禁中ニ長日如意輪法ヲ修セシム、

〔門葉記〕

七十 門主行狀三
○山城

入道一品尊道親王 ^{號後青龍院} 第百卅四代座主 同五月三日、令

移修長日如意輪法、日來尊什僧正也、而二間初參故、爲正壇可然之間被移修了、

〔門下傳〕

脇門跡四 殿若院
○華頂要略三十二所收

尊什大僧正 應安元年正月廿三日辭護持僧、無勅許、同

年五月三日被渡御本尊於座主尊道親王、而護持僧猶如元、

〔門葉記〕

二十九 長日如意輪法三
○山城

入道親王 ^{尊道親王} 應安元年五月三日、被渡修長日御修法、

尊什大僧正辭退替、去 月 日御請書到來、

雖被進御請文、近日大法等可被始行、俄二間御初參、難事行歟之間、暫不可被渡御本

尊哉之由、内々有其沙汰、仍被仰此趣於尊什僧正、于今遲怠了、此等次第且依時誼也、

而大法之次、可有二間御參之由、有沙汰之間、忝可渡御本尊由、被仰奉行宣方了、

同五月一日、可奉渡御本尊之由、令下知藏人之由、奉行職事令申之間、任例今日道場等

用意了、而今日不奉渡之、翌二日職事參申之間、被尋仰之處、藏人稱忘却云々、不可說

々々々次第也、重嚴密可加下知、更非職事緩怠之由申之、今日又終以暮了、

同三日、御倉御本尊并御衣持參、

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月三日

二五七

尊什護持
僧ヲ辭ス
ルモ勅許
ナシ

道場用意
了ル

御本尊并
御衣ヲ
持參ス

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月三日

二五八

承任禪龍代官請取之、奉安道場如例、

御本尊不納櫃、御衣并平裏其躰散々也、頗如鼠巢、混合而入廣蓋、恒鎮親王勸修之間、如此成了、珍事々々、

一花注連事

此間猶令爲加任之間、綱片方卷付了、御衣入御之間、又引渡之、

一木具以下事

先々調下之條、先例勿論也、且延文之時如此、今度爲阿闍梨御沙汰被用意了、定被募官功敷、

一道場莊嚴事

五月一日、西面六間洗淨之、中間立古摩壇〔德〕、左安御衣、北奥間敷阿闍梨御座、助修座端疊二帖敷之、

大幕廻方引之、闕伽棚不立之、用池桶了、每事爲阿闍梨御沙汰之故也

御本尊無佛臺之間、直長押打竹釘奉懸了、用續帟、

花注連

木具

道場ノ莊嚴

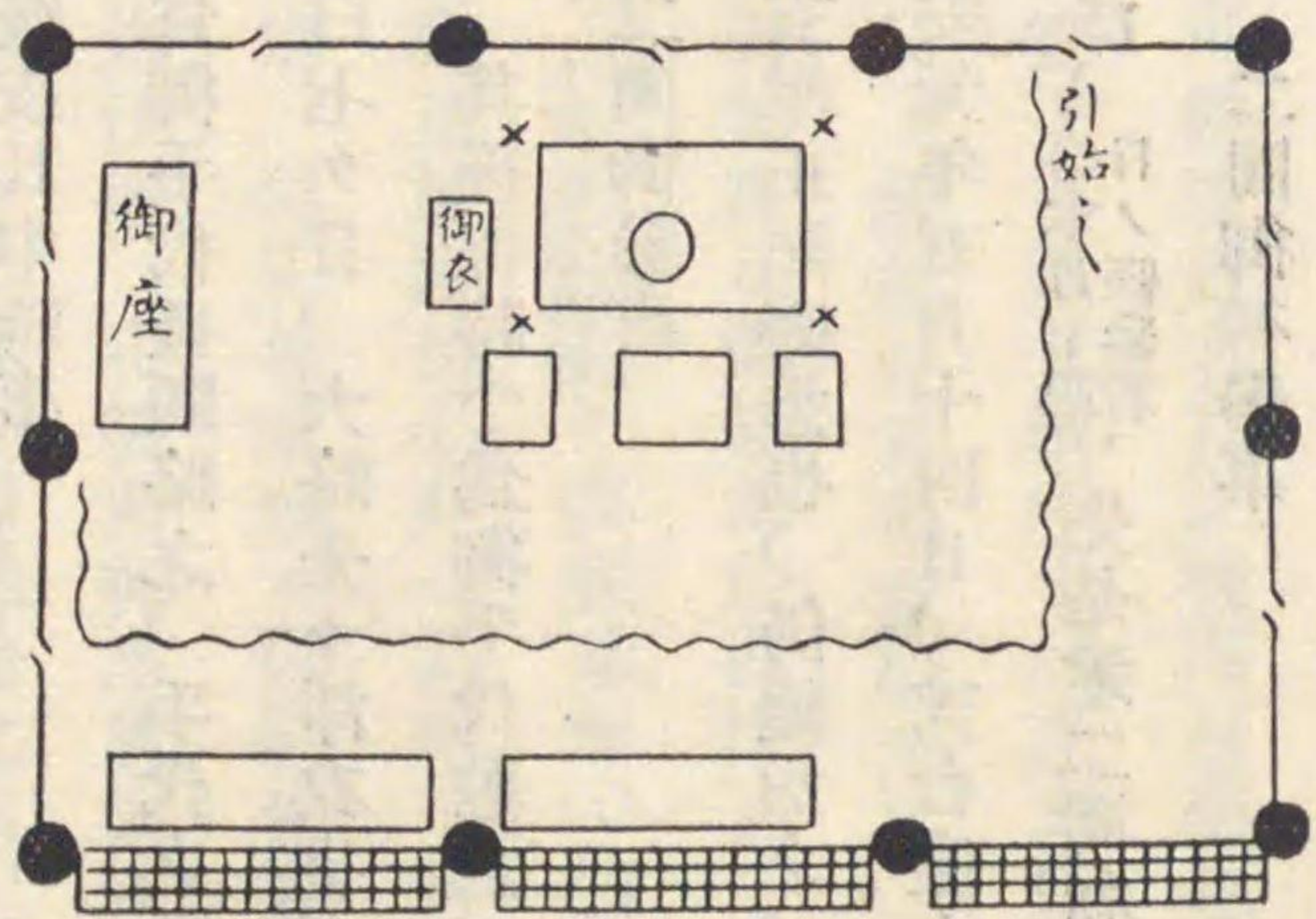
御本尊ヲ懸ク

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月三日

二五九

伴僧

開白



著到硯等、道場便宜之處置之、助修座末様々也、

一伴僧事

教祐法印 實什、信聰法印 長玄、神供、真顯大僧都唱禮、道尋僧都奉行、

開白時如此、自後夜顯熙參、實什等不參、

一承仕二人、長日之間輪轉勤仕之、

駟使等不及被定之、每事略定也、

一開白事

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月三日

二五九

專調了阿闍梨御參、白淨衣、香袋、同加沙、(參下同)

次時金、次登禮版、先方便等、啓白、不被用之、祈願等、

次唱禮、眞顯勲之、九方便、次發願、五大願、

次入行法、乃至念誦等如例、念誦ハ大呪也、

次入護摩、六段如例、座主被請之、三摩波多七反、

次々如例、

一後夜日中時事

予爲御手代發願略之、手代之時不用之上、長日修法本人猶不用之例有之、伴僧付衣也、開白七ヶ日、大略先々淨衣也、末代每事不合期之上、本房儀又無子細、仍如此被用了、

其後每時予爲御手代勲之、大略及百餘日了、其後被結番也、中間被移道場於寢殿北面二間畢、如先年、

一二間御參事

尊玄僧正記委悉也、仍續加之、彼記云、

應安元年五月十四日、天台座主入道无品親王蒙綸旨、爲彗星等御祈、於禁中始修七佛藥

師法、〇本月十四日ノ條參看、先是遂二間初參之儀、又令奏牛車慶給也、〇中略

二間御初參事

後夜日中時

尊玄僧正記

二間初參ノ儀

延文元年護持僧宜下アルモ行粧整ハザルニ依リ二間ハ候セラレニ

正壇護持ヲ欲セラ

蒙可候夜居之宣之後即可參也、初參先々尤刷行粧也、仍未被沙汰具之間、于今遲怠、護

持宣下已後互數年了、先去延文元年十月廿三日蒙件宣給、于時座主、〇延文元年十月二十三日ノ條參看、同十一月廿

八日、被移長日如意輪法了、尊胤親王依病辭退替、而桓豪僧正山務拜任之間、同四年四月廿七日、

被與奪長日御修法於彼僧正、爲副護持僧、御祈等連々令參勲給畢、是猶二間初參已前、後加持在所如何、雖不叶正理、當御

代未被構二間之間、不可及謗難歟、其後承胤、恒鎮兩親王座主相續拜任、正壇御修法同相續勲修云々、而座

主與正壇護持必非一具歟、可被渡御本尊於當門跡之由、恒鎮親王山務之時分、連々雖有

勅定、爲正壇者細々御祈參勲難治也、二間初參難整之故也、一方可有勅免之由被申之間、爲臨時細々

御修法等、不被渡御本尊云々、而恒鎮親王喪母之間、此上難被遁申歟之處、客星出現御

祈事、竹園可令參勲給之由、又專御沙汰之最中也、被渡如意輪者、二間參、變異御祈參勲

已前、難沙汰整之條、又以同前也、尊什僧正也、仍尊師前大僧正于時兼任護持僧、移修長日御修法者、爲公私

自他神妙歟之由、内々談承之間領狀、去々年十月二日被渡修了、入道尊親王仍大王此間猶副護持僧

之儀也、而今度大法令參勲給之次、可有二間初參之儀、故爲正壇可被用後加持之間、今

月三日又被移修如意輪法了、前大僧正々壇辭狀、去正月被付職事畢、然而器用未定之間、不及勅答之取中也、件法初一句助修、教祐、實

什、信聰、長玄等法印、眞顯大僧都、唱禮、道尋僧都神供也、此内後加持御參之時、除信

聰被召加桓基僧都居籍、畢、彼時伴僧等、各著袍、裳、平袈裟、用草鞋也、如例、

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月三日

御祈奉行
中御門宣
方
御參行粧
庇半蔀車
所持ノ人
無シ

抑二間御本尊事。近來兩三代未被造立之、本區内外之護衛似令闕減、太以珍事也。仍迎今度之節、大王連々雖被申驚、終以御無沙汰、爲之如何、而間只二間後加持所、臨期被構之也、則先年覺譽親王參之時如此云々、其所東面異角也、但彼宮參已後被差庇了、於庇者、不可被構此所之條、道理先規必然之上、庇悉拵入七佛藥師法道場了、仍自其次間以南北二ヶ間、被擬二間畢、就其座敷樣、先々設奧端座之由、舊記所載也、而今所間纔七尺五寸也、奧端敷疊者、中間板不可有之、不叶先規、便宜頗無骨歟、當時之通規後加持所之時、伴僧大略候板哉、其所狹少之上者、敷疊一枚之條、有何事哉、然者寄與可儲之也、先々夜御殿次間必爲二間也、便宜今度雖不然、准彼儀近于夜御殿之樣、可被敷歟之由、予廻今案之思慮、且相談尊勝院僧正申了、竹園賢慮又自元無相違云々、將又此所必供掌燈也、雖無御本尊、彼御帳可奉安置方可供之歟、此等之趣、兼日御祈奉行宣方參門跡之間、具被仰置云々、御裝束之樣見差圖、○以下御參行粧中乘車先例ノ記事、本月十四日午車宣下ニ關スルモノナルモ便宜コ、ニ收メ、同日ノ條參看、次御參行粧事、先々必前駟或步儀等也、從僧後車之儀殆無例云々、又座主當職之間、寺官等不供奉事、又無先規歟、仍彼是如形可被刷其等之儀之由用意也、就其今度可爲牛車宣下以後之間、供奉人雖爲步儀可被用御車也、仍御車并遣手以下事、重々有沙汰、先御車者、庇半蔀等、當時院中攝家以下曾無所持之仁、新調又難事行歟、常切物見者、差綱之時

參內御車
ノ先例

三條實繼
ノ說
洞院實守
ノ說

遣手

不可用之由勿論也、隨而寶治西山宮二間初參之次、牛車拜賀之時、被用八葉長物見外連子車之由、御記分明也、彼車猶當時世間曾無之、仍無力被新調了、其躰常ノ八葉ノ車也、但物見前後有之、前ノ戸也、庭引出ス所也、如常作付也、箱縛ハ如文車等、以布裹之也、物見左右共前方開之、內懸小簾、五緒、後方無簾也、此事內府實繼說云、小簾外懸之歟、又物見間之常事也、且野宮內大臣記有此事云々、爰前大納言實守說云、小簾懸外事曾不可有之、物見又必開之也、宮內記料簡頗有參差事歟云々、彼卿申詞猶頗分明歟之子細有之間、今度被依用了、又彼卿說云、外連子車宿德之時用之、常長物見有何條事哉云々、然而牛車宣之後、宿德之儀無子細歟之上、寶治例可然之間被用了、又彼說云、連子ハ袖ニモ可有之也云々、而今度只物見上許有之、奉行者下知大樣歟、物見并連子等周圍黃金物等無子細也、又同說云、雨皮付ヒルフサ可有之云々、今度只如常也、是ハ不可有苦歟云々、又今度下簾不被懸之也、八葉之時不用之、爲通滿之儀之由同卿說也、或時者用之由、宮內記分明之由、內府又申之、而當門跡之樣、常車之時、略下簾之條故實也、幸爲兩樣者、不被懸之條、叶門風哉之由、令治定了、又牛鞞畝太之由前亞申之、仍被用之也、但小畝並タル物被用之了、是同畝太也云々、次遣手事、建保慈鎮和尚牛車拜賀之時、牛童取遣繩之由有所見、慈胤法印記錄予寫進了、又建久和尚同在此事、此時被用小八葉車云々、同比聖護院宮又

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月三日

被用牛童、兩度自他門記、前亞相令註進畢、然者被用牛童之條、不可有苦歎之由、雖有沙汰、此事俗中曾無傍例、僧中又彼時分御室之外、不召仕車副歎之由、見彼時記、但其時竹園申渡仙洞御車副事有之云々、於近來者、如此晴儀之時、代々皆被用車副也、然者牛童猶可招巨難歎、仍治定了、就之車副當時不被召仕之間、可被申仙洞之處、院中近日無御要之間、在所等殆不分明歎、火急難應召云々、仍就妙香院、代々由緒被尋一條家門之處、此間不召仕云々、闕如之間俄被召付四人了、是當時久我相國召仕之輩也云々、内々就所緣御出奉行、對久我政所男有問答事云々、

裏書、(實應)私云、内府狀云、實尊僧正法成寺堅義之時、八葉長物見車ヲ用候、但其時此車不候之間、常切物見外小簾ヲ懸テ用候云々、物見上ふちヲ打繼テ、壺ヲ打テ懸簾候歎、且野宮記符合、其與候、已上、

野宮左府
記所載ノ

野宮左府記云、建保六年正月三日院御參、八葉車、長物見、懸小簾、又五緒也、又自分令結構也、車副四人、嘉祿二年十一月十六日童御覽、網代車、稱チカヘ物見、是對半薮名也、常網代車也、有外黃金物、開是、日來用車也、大臣如此時、雖非大將乘半薮車定例也、近年其車不持、仍執之時此車通要也、老人又例歎、今日懸下簾、昨夜、不懸之、今日有、出衣聊刷心也、散物榻、已上野宮左府記、

前亞相狀云、物見作付之間、外ニ可被懸小簾間事、實尊僧正之例○爲末愚、實守更不領

實繼所見
ノ誤謬

解候、其故者庇半薮等車ハ棒物見之間、前後之簾自外可見候、替物見網代車號候、八葉長物見候者、今一方之簾ハ不可見候、仍前方被開候者、後方ハ可爲板候、而兩方簾ニテ、是長物見ソト會尺、返々未然之義勢見存候、是ハ一向落入物見之躰にて候けり、抑嘉祿記常網代車ト書テ候ヲ、(實應)内公八葉車ト心得テ、此記實尊僧正之所爲ニ符合ト申候歎、是ハ分明ニ網代車候、稱チカヘ物見ト書也、愚存ニハ非八葉之由存候、開戸金物ハ散物、但不開、先々皆作付候、檳榔車ハ前後ニ輦戸候、庇ハ半薮ハ是皆開戸候、調樣異檳榔候、チカヘ物見ハ不開作付タル許候、是ニ、開戸ハ此記分明候ヲ、(實應)彼公物見板ト意得候歎、是ハ前後開戸事也、凡網代車ト申候ハ、常文車事候、稱替物見ハ此事也、八葉ヲハ網代車トハ不申之由庭訓候、且用散物榻之由注之、網代車勿論候、八葉ニハ不用散物榻候也、是ニ、又建保六年正月院參、(公繼)前右大臣之間、用八葉車候、嘉祿二年十一月童御覽ニ、(公繼)左大臣當職候、仍雖可乘半薮車、不調置之間、用網代車歎之由存候、是ニ、(三)凡當職ニテハ如此刷之時、不可乘八葉車之由口傳候、近日之儀可相替、比興々々、如此事更非誇才學之儀候、不審候也、

又彼狀云、今度御車長物見ニハ調テ候へとも、物見作付候てハ、難開候者、只内ニ可被懸小簾候、爲當座爲後記、長物見八葉御車物見ニ被懸小簾候テ候へく候、不被開物

御出立所

見車ハ、臨時之儀、御出奉行之失籍ニテコソ候ハンスラメト覺候返々當時も未來も不可有傍難存候、已上彼狀、

次御出立所事、(實德)內府第(正親町)兼以領狀云々、大臣第頗雖可有斟酌、凡爲他行之儀之上、縱雖非其儀、深存禮之時、非無例之由稱之云々、而此第便宜自烏丸令參御者、雖可爲近々、路次有河之間其路狹少也、凡又步儀等之時、難被用之御路也、令出一條給者、行程遼遠步儀不相應也、仍新中納言(實綱)亭(正親町)陣中也、步儀尤可然之間被仰了、領狀也、而彼宅無中門太不具之上、只是咫尺也、行列難整歟、無念之由人々申之、資教(故時光)宅行程雖可爲神妙、家主服間也、是又不可然、其外曾無在所之間、已前兩所之勝劣重々有沙汰、而於內府第者、兩方之難曾不被遮歟、實綱卿亭無中門事、御借住之上無力歟、於行烈者、色掌無其數、曾不可有違亂歟之由、僧正計申之間令治定了、次御下車在所事、僧侶無故實之仁、牛車宣之後、如凡人宅於門際下車事有之、不可然之由先々觸耳畢、仍爲生決智相談前(實守)亞相之處、先大內之時、自待賢門下車、而令參之人蒙宣之後入彼門、於壬生下車、是故實也、是相當中部之融故歟、而里內者半陣也、仍以彼准例、假令於今可參入之門築地廉下車之條定例也云々、次立直車事、同説云、兩樣也、只如常副築地立之、或向門立之云々、兩樣共於下車邊立之也、仍向門ト云者、假令向鷄尾於裏築地、聊スチ

御下車所

御參入路

カフ様ニ向門也、此様猶尋常牛車ノ立様也云々、就之當時內裏自四足令參給者、內裏西面築地與長講堂築地築繼之間、其際不見也、仍內裏南面長講堂隔築地見定之、彼築地融可爲廉之間、於此所止御車可稅駕(俗號解懸是也、牛ニ鞅ヲ解懸ル也)、御下車令入門內給之後、裏築地へ鷄尾ヲ指テ、轅ヲ東へ向テ、聊良角へ振テ、向門之様ニ可立之也、輒ヲ置榻上如例也、此等之子細令治定了、次御參入路事、古賢所爲不同、頗不一准歟、或入朔平門、或入月華門等也、於當門跡者、和尙西梁青梁已下代々被用和德門説也、所謂於彼門下申案内之後、登仁壽殿御後、經露臺長橋等、自清涼殿庇令參也、而里內之時、只可隨宜歟、而准后正應(道玄)參之時記云、內裏(富小)路殿、四足內二丈許令入給御佇立、申次(職事)顯家、兩度出對(始自殿上屏戶出、之後自中門出云々)、之後、入中門令登內切妻給、經中門廊南殿前御參云々、是曾不及門殿之沙汰哉、仍覽當時內裏殊以狹少、每事難守舊儀哉、然而爲不失門風之故實、准用之樣重々有沙汰、先尋常諺曰、日月花門并和德門內不入僮僕云々、僮僕者下部歟、又前駟等同不可入之歟、所貽不審也、仍予故內府(實夏)公、面談之時相尋之處、雜色以下止之也、於前駟者可取沓、又可秉松明、可召入之條勿論云々、而如故慈嚴僧正之所存者、前駟猶不可入之由歟、其故者元應熾盛光法爲護摩師、自和德門退出之時、於彼門下履改革鞋於鼻荒、是此門內不入前駟之故也云々、所載自記也、緇素異義如何、當門跡代々僮僕之進退曾不載記錄、口傳又不

履物

及此宮細也、尋究俗中之傍例、須准用令進退也、將又和德門者東面也、而當時內裏於東面曾無便宜、凡又重々門曾無之、日月花門、只中門許也、之代歟、然者入四足之後、以中門准和德門、於彼門下申案内即入、自門經北土廊可令登切妻給歟、且准后正應之現行大略此分歟、而彼切妻無沓脫、頗難登歟之間、最勝講之時、此間假被構沓脫於此所也、彼御講為清涼殿公事、此又同殿二間參也、以准例可被申沓脫歟之由治定了、仍以御參內之次、先且被伺申之處、先年覺譽親王參之時、即申請了、不可有相違歟云々、以此次當門跡代々參入之路次、經露臺長橋之由被語申之間、勅語云、賀茂祭使召長橋也、其時者、假被儲長橋於此邊也、先々通路為長橋者、准彼可被用意歟之由被仰下、如何之旨被示仰之間、予申云、代々路遣經長橋、只是自然之儀歟、於長橋強無殊儀、則又無故實歟、然者非詮用哉、於今度之儀者、只彼切妻難昇之間、以准例被申請沓脫許也、又已有傍例歟、神妙之由申入了、阿闍梨御所存自元如此云々、仍可被儲沓脫之旨、內々被仰宣方畢、次以中門就令准和德門、彼門內於下部者可追止之條必然、勿論前駟等同可止之者、於中門下著草鞋、令持居箱、可相待申次之出對也、且嘉曆慈嚴僧正參入月花門、明義門、仙花門也之時、用此儀、可謂傍例歟、而和德門內者露地也、雖為地下、於軒下者著草鞋事、最勝講等多傍例、著草鞋經露地事如何、但尊勝院說云、最勝講之時證義者尊澄親王不經集會所軒下、露地之時、被用草鞋了、可否如何、

沓脫ヲ儲ク

脂燭ヲ軒下ニ降ス

嘉曆傍例者、於仙花門下整威儀云々、然者軒下也、但元應所用者、於露地用草鞋歟、而今幸中門已後悉軒下也、草鞋之便宜旁無子細歟、但松明可止中門外之間、脂燭殿上人未參之程、經土廊之間、朦朧如何、凡本和德門之時、此不審同前也、然者於今度者、脂燭少々可降軒下之樣可被申請歟、是一義也、此事藏人頭向陣座之時、六位秉脂燭也、是為軒下之故也、但彼者露地猶燃之事有之、為別勅者、何可有子細哉、若又可被敷打板歟之由、前亞相一義也、但打板非常儀歟、凡雖無打板、草鞋有何事哉之由、前僧正申之、予後日思之、但是殿上人猶難降地下之時、為打板上者、秉脂燭事不可有子細之由歟、打板事粗勘近例、元應熾盛光法青龍院宮參勲之時、候所直廬也、（慈道法親王）

私云、寶治二年西山宮於禁中被修熾盛光法之時、被儲打板了、若依此例歟、裏書結願後加持於清涼殿被行之間、為阿闍梨參、自安福殿至明義門被儲打板了、板歟為後註之、將又前駟入和德門內事、不可有苦者、於可令堂上給之所、履改革鞋、於沓脫上履改革事ハ不先々傍例無之也、可為請取居箱也、是一義也、兩樣所詮可依和德門內之故實之間、尋談前地下之由前僧正申之、可請取居箱也、是一義也、兩樣所詮可依和德門內之故實之間、尋談前亞相之處、彼門內召入前駟之條無子細、日月花門同前也、前駟之外於雜色長者、雖著烏帽、同召入也云々、此義令符合故內府說了、以之思之、代々現行又以被推知了、入前駟令秉松明、取鼻荒之條勿論也、且正應記前駟入中門內之條勿論歟之間、今度前駟可被入

之也、其外准雜色長、大童子長、履物中童子居箱、等可被召入之、山上公人之內、專當者依爲下部、可被止中門外烈、大童子以下同前之由治定畢、

前門下於中
テ待ツ

一義云抑和德門內前駟可入事、雖無子細、強又無益歟、於中門下著草鞋整威儀、相待申次之條、猶神妙歟、今度便宜幸爲軒下之上者、旁可然哉、道理又蒙可候二間之宣參之上者、致堂上之用意、對申次之條、有其謂哉云々、此條慈嚴僧正現行之傍例、又道理之

牛車宣下
ノ拜賀ヲ
兼又

一篇雖無子細、令執彼所爲之人尤可然歟、於當門跡現行未分明之上、道理又於今度者、被兼牛車拜賀也、其儀之時、無左右致堂上之用意之條不可然哉、隨而准后正應度、不履改鼻荒之已前對申次歟之由見記、彼時即被奏牛車慶也、被摸彼例之條相順歟之間治定了、若於中門下可著草鞋者、可止前駟之條勿論也、然者朦朧之難如何、脂燭

事又未一決也、竹園等之時、依別勅雲客降地下之條、可儲打板歟、又一義也一向可爲別途也、如予之輩欲用此儀者彌無爲方歟、然者伴僧之內有職一人、居箱役人之外、令用意之地下之

間、松明止之後、脂燭六位未來程、以彼有職、可令秉脂燭歟、若持香呂、可置火者、以此脂燭可置之歟、是以松明火置之義

ニ可相是愚僧後日之所案也、未一決、猶可思擇、又可談話哉、但羊僧雖入護持相續之室、夜居可在何時乎、進而悲真諦之不德、退而顧俗諦之不涯、更不知其期也、何異小蛇之期龍門乎、爲耻々々、

奏慶

申次出對
路

裏書此置火事、清涼殿燈籠火之說、又篝火之說等也、但先師大王仰云、凡不持香呂云々、

然者如何、今度即不令持給也、如慈嚴僧正嘉曆記者、不持箱、入加香呂於居箱也、是代々現行也云々、此儀叶理哉、而師說分明也、爲之如何、一義就香烟有種々習歟云々、

次奏慶事、僧於北陣朔平門申入之、僧不用拜也、俗於无名門用拜也也云々、先尤可有其儀、朔平門又無所于准據之上、先々寶治、正應等強不及其儀、則仍只被申入之許也、

次申次出對路事、宣方兼日參申云、於无名門可被申案內歟、仍自彼所可奉出對之由所存也云々、被仰云、代々例於和德門申入也、彼門之准據無便、奏慶事雖可爲朔平門子細同前、仍任正應近例、只於中門下可申入也、可令出對彼所也、正應之時、職事顯家先出自殿上屏戸、後出自中門云々、進退自他不宜、護持僧參之時、不可爲無名門也、可存其旨之由被仰云々、

已上條々予相談尊勝院僧正、大略定申了、竹園兼日之御所存又無相違歟、於俗中傍例才學者、即令伴前僧正、向前大納言實守許散鬱了、

就之予可造進御次第云々、且故青龍院宮尊勝タラニ供養導師參懃之時、御出以下事、每事御次第、故慈嚴僧正造進了、非無傍例歟云々、先大概分如形書獻之畢、

彼云、以折帛當座面々進退事以朱註之、

尊式次第
ヲ作進

先申剋可有御出正親町東洞院亭、

彼亭庭上可被引幔左右歟、「幔一帖也、左方也、東西行引之、」

次奉行人泰恒法眼、可令參會、

次酉剋可催促供奉人等、

自申一點各可參儲近邊之由、兼而可觸仰之、

次可立御車八葉長物 見外連子、於中門下、

但彼亭無中門、仍即可被立儲御車寄前歟、「車寄前二 置輓於御榻上如例、 文新引云之、」

次色掌等悉參集、各烈立庭上、

出居次第等、奉行人兼而可定仰之、

次扈從僧綱太政大臣僧都、可參入、

於里僧綱經聽法眼、者、可參儲御下車所云々、

次奉行人可申入事整之由、

次戌剋著御裝束、香御袍、裳、御表袴、金欄平加沙、御持杵、出御々車寄、

次葦御車、

次僧綱進參、撥御簾、寄御車、

行列

次「無警蹕、」專當維那發警蹕聲一反、了御乘車、

次僧綱降庭上、僧綱所從參此所、

次行烈、

先御力者二人「取松明、」兄弟法師同先行、

次專當二人「不取松明、私云、持杖之故歟、」

次維那二人「不取松明、」

次所司二人「同」

次烈大童子四人、為取傳松明於房官立加此所、是先規也云々、

次房官四人、

左前「右前」右前「左前」右後「左後」 經豪 泰存 良堯 泰譽

「任位次而列立、經豪從役之時立廻車後云々、是又本儀也、」經豪雖為泰存之下臈、依御鼻荒役之便、可立左方歟、

已上取松明、

次三綱二人、

榮兼法橋、玄全法眼、

次御車、

御車副四人取差綱、左右、御牛童二人水干、付御牛、又一人如木、持御榻候御車邊、次御後侍、

親尊、可取松明、

次中童子一人、彌熊丸

次大童子長一人、增光丸

次御力者十人、

次御恪懃十人、

御居箱、御草鞋、御鼻荒、御水瓶、御笠等役兼可仰定之、

次退紅仕丁、持雨皮、

次扈從僧綱、

次御路、御車副警蹕如例、維那等同可有警蹕也、

御出門之後南行、入裏築地同北行、可令到四足御、

次到築垣坤角、扣御車、稅駕、出御牛、

此時御力者等參進可付轅、

次前駟等列居御車前、〔今度皆不躊躇云々、未練之至歟、太狼籍也、〕

前行之輩御下車已前、不可入四足內、

次里僧綱兼可儲此邊、可進參御車右、

次扈從僧綱可進參御車左、

次御牛童毗伽羅丸、〔牛童直渡侍了、此事兼而有沙汰、牛童不可渡長之由申子細、爲中童子者可存知云々者、又不相順歟、凡牛童過分、所々諸門跡皆如是直渡坊官云々、即先年座主御出御修法始、燈籠光法等之時、無力坊官請取了、然者則引出御筵之後、退而躊躇御車轅右、侍又申子細歟、仍直可請取之由、内々被定仰之云々、

次烈大童子取御鼻荒渡同長、々傳房官、經豪、々々進扈從僧綱、々々置御榻上、正令履御之時、僧綱可有用意、〔轅ノ下ヨリ鼻荒ヲ抑ル事也、〕

〔私書、先駟直渡榻事、仙洞御牛童申出之時、俗中如是云々、仍諸方依無作意噉議、〕

〔置鼻荒於榻上事、今度自轅上置之了、此事前大納言說云、殿上前駟并公卿從役之時、自轅上置之也、地下輩之時、自轅下置之云々、但常車ハ轅高也、太難置歟、可隨便宜哉、

今度聊雖高手被及了云々、

次降御榻令過給之時、僧綱蹲踞、則自轅外奉從御後、

此等之間、伴僧五人各乍著草鞋降中門、可令佇立南壁內、

次前行輩次第入四足內「維那等此時猶警蹕畢、聊有其恐歟、如何、」

次可令步入御、

參內

次扈從僧綱、

彼前駟大童子已下、此時不可前行、在傍、猶可取松明、

次里僧綱、

次侍、「稱非御後、此時不取松明云々、」

次中童子、

次大童子長、

次御力者恪勤等、

次可立直御車於裏築地際、「今度立樣不如此歟云々、如何、猶可尋之、」

東西行、以轅爲東、可向門、置輓於御榻上如例、

次到中門下、是被准和德門也、前行御力者蹲踞、專當以下供奉人等悉以烈居、

「此時前行房官等悉可蹲踞之處不然、太尾籠也、」

仍泰恒以裏頭之躡徘徊之間、彼就令教訓、職事重出對之時、「躡踞了、仍三綱等同躡踞了、」

於此所可有御佇立、

「扈從里僧綱已下色掌物別悉可躡踞也、進退不分明如何、」

次職事出對之時御揖、職事奉答揖之後參御前、

次職事又出對奉揖、御答揖之後職事退入、

次前行之輩爲先維那「維那三綱不取松明、前駟房官取之也、」御力者、烈大童子、專當等不可入中門內也、各取松明入中門內、烈居北土廊前東雨垂際、「向西、」

次漸御參入、可有御佇立沓脱前、「此時脂燭殿上人漸參進、在中門廊、初者烈立、後者蹲踞了、太狼藉歟、」

扈從僧綱奉相從、於中門下可著草鞋歟、

次御居箱役人「僧綱」桓基律師參進、同奉相從、僧綱後、

次里僧綱并侍同加居士廊前、

次中童子於中門下取御居箱烈大童子可取傳之、參進、於中門良柱內渡房官、泰存可進此所、々々取之獻所

役人之後退下、桓基律師持御居箱佇立、

次大童子長於中門下取御草鞋、大童子烈可取傳之、如前參進、於同所渡房官、經豪可進此所、々々取之此後

猶不可退下、獻扈從僧綱、僧綱進御前、經豪猶不可退下、於此所暫可蹲踞、

昇殿

次於沓脫前履改御草鞋給之後、僧綱取御鼻荒傳經豪、々々取之傳大童子長了、經豪如元退下、長丸步、於中門外渡烈丸、々々渡御恪懃了、抑脂燭殿上人若令降軒下者、被履改御鼻荒等事、雖不到沓脫際給、可有此等儀也、次令昇堂上給、

「僧都」
桓基律師持居箱從御後、左方、

扈從僧綱同奉相從、

此間自餘伴僧四人次第參進堂上、同可奉相從、

「六位殿上人等六七人敷、」
次殿上人秉脂燭參向、

次御參、「殿上人等各不經簀子、經庇也云々、」經臺盤所前并御殿西南等、令到二間「御殿東面、自南第二三間是也、」給、

次御參入御著座、「自南第二間遣戸間也、被垂切御簾也、自此所御參入也、此時不被用御簾役人、二間之時頗爲故實歟、是有出御等之故也、」「御著座令向西御著給也、」

「第三間、」
「僧都」
下格子畢、

次桓基律師參入、置御居箱於御左方而退下、

次御作法可有之、「是夜居作法也、」

作法

著座

後加持

次聊御氣色之時、伴僧爲先上首次第參入、「同阿闍梨御參入之所、」「各候阿闍梨御後板也、」

次後加持如例、

「發願五大願被用之、私云、大梵深遠如意輪等云々、垂念誦如意輪大呪其後不加之也、」

次伴僧爲先下薦退出、「各奉待阿闍梨御出也、」

次少時之後、桓基律師更歸入、而取御居箱出、

次御對面、「隨早晚歟、有之、」

次御退出御候所、「是依大法御勸修也、阿闍梨御後居箱役人、其次扈從僧綱、其次伴僧殘四人奉從了、此時又脂燭殿上人如前也、」

次供奉人色掌等出中門外、或退出、或參御候所、

次可廻遣御車於御宿房、

「抑烈大童子已下之類、不可入中門內之條、兼日治定、各仰舍之處、前駟等之所從悉以亂入、其時每人又同亂入了、頗濫吹歟、爲之如何、御出奉行下知猶大樣之故歟、此上者、居箱草鞋等取傳之在所、無其詮哉、如何、」

供奉人等行粧所役等事、

扈從僧綱 「太政大臣、禮大納言忠季卿子、著法服、平加沙、如意輪法伴僧同也、御履物役晴儀之時扈從役之事、竹園之時連綿例也、」

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月三日

供奉役人

退出

前駟二人、侍也、而著半靴、見聞之輩頗加、謗訕云々、如何、深沓无之故歟、

中童子一人、著染裝、 大童子長一人、如木、取、尻、履沓、 同烈二人、非如木、 力者一人、恪懃、 人、退紅仕丁一人、持唐笠、

里僧綱 大藏卿、雜務印祐法印眞弟、著表袴、裝束、裳加沙、御榻役、 經聰法眼 爲大法行事僧參會之故也、路次不供奉也、

如木大童子二人、沓、 力者四人、恪懃一人、

前駟房官四人、

號宰相寺主、泰譽、泰有法眼眞弟、

如木大童子一人、力者一人、恪懃一人、中間一人、

號大貳都維那、良堯、良舜眞弟、良増法印孫、

僮僕同前、

號肥前、泰恒法眼眞弟、泰存、御居箱役送、

僮僕同前、但染裝束童子 著沓、 一人加之、

號大藏卿、經聰法眼眞弟、經豪、御履物役送、

僮僕同前、但染裝束童子、著闔、 走童 著直、 各一人加之云々、

已上房官前駟各著半靴、於當門跡者、著深沓之條先例也、而向後可爲半靴之由、

〔慈蓮法親王〕 青龍院宮被定仰之云々、他門之傍例無子細、俗中之准儀、道理又必然云々、又於笠

者不持之、非騎馬之故也、下馬之所留之也、仍步儀之時勿論也、

御後侍 號若狹、親尊、親聰法眼眞弟、著深沓也、御榻役送、先々自大童子長取之也、而牛童過分之、 親尊 間、直渡之條頗雖申所存、此間房官凡僧猶以直取之云々、仍無力從役云々、

飼副一人、郎等二人、著水、 當色六人、

童一人、染色狩衣、如木、 大童子一人、非如木、 力者一人、

中童子 承仕法乘子、御居箱取繼、裝束二藍、精好袖單、紅引倍木云々、 彌熊丸 著沓云々、

郎等二人、水干、當色四人、童一人、水干、

大童子長 増光丸、御履物取繼、白張如木、著沓如例、此童尋源法印之中童子也、長當時不被召任之間、先々度々被召渡之也、本種姓烈丸之一族歟云々、

所從可尋之、

同烈四人、各如木、重衣、著蘘沓云々、第三臈御居、箱取傳中童子役、寂末御履物取傳長役、

中童子并長手長事、各雖申子細、不可然之由、嚴密被仰之間、從役云々、又恪懃不可渡烈丸之由雖申之、同伏理了云々、

牛童三人、

一者毗伽羅丸、如木、垂尻、著亂緒、榻持之、

又二人、竹法師丸、普賢丸、各著水干、付綱本、

力者十三人、

乙王法師子云々、

虎王法師、兄部也、前行、

全鶴法師、孫夜叉法師已下云々、

恪懃十人、

乙王法師、兄部也、著表衣、

永壽法師、著表衣、千熊法師著衣、已下、不著衣也、

唐笠、入袋、水瓶、入手洗、瓶頸纏手巾、

鼻荒、居柳、草鞋、同、居箱、尤可入御車也、出入、等、次第爲先

下藤令持之、但招奉行兩三、猶是下藤役也云々、於草鞋者或時力者持之也、今度每物

恪懃役也云々、

退紅仕丁一人、持御雨皮懸、

已上供奉人、

伴僧六人、各著法服、不加沙、用意中門內南脇了、

二位 教祐法印

宰相 長玄法印

兵衛督 實什法印

宰相 眞顯大僧都

伴僧

出儀

大納言 從三位藤原家藤卿子、桓基僧都此僧一昨日轉任云々、仍爲扈從之上首、勤居箱役畢、居箱役人也、

太政大臣 道尋僧都此人不可佇立扈從也、

已上、

御出儀事、

具載御次第也、

先申剋入御々出立所、全分密々也、兒新若、候御車後云々、

彼亭面門東、依爲陣中、自北面門師織、入御、車被遣廻庭上、於車寄東面、前御下車云々、

新若即寄御車歟、御出奉行泰恒法眼著衣、乘車泰存召具、參會、庭上引幔等事申沙汰也、

父子并泰譽於對屋著裝束云々、

良堯、經豪於經聰法眼之宿所近邊儲之云々、出立而令參云々、

次力者大童子等參集、

力者恪懃烈居庭上左右之間、大童子無出居之在所之由訴申之處、遲參之上無力之由、

泰恒加下知云々、頗比興歟、

色掌等烈居之所不定仰之條、不足言之至也、凡恪懃出居、先々不及沙汰云々、近來

此事出來云々、不可然之處、結句依之、大童子等隱居之條以外也、

次戊初點御車長切見、廻參之、即立御車宿前、次寺官公人等參烈立庭上、

此後猶前駢御後等猶遲參、太奇恠也、仍泰恒可加催促之由、連々下知力者等之時、乍立縁上仰之、寺官三綱等烈立庭上之處、奉行之進退頗狼藉歟、凡乍立堂上加下知事背故實哉、何況御前近々也、旁不可然々々々、

次經聰法眼相伴良堯、經豪參、經聰即退出、參大法道場云々、

良堯、經豪參之時、各著鼻荒、御出之剋限著半靴云々、此事如何、不得其意之由、僧正加難云々、仍俄依令著半靴歟、良堯沓際之躰太比興也、凡泰譽、泰存共不宜也、經豪無相違歟、

次色掌參勲之後、扈從僧綱參、

扈從出立所家司秀國宅也、咫尺之間步行也、入自東面門登沓脱了、

次右中辨宣方持參牛車口宣、於縁上道尋僧都請取之、持參御前申入之後、職事退出

了、次出御々車寄、

次扈從僧綱出御車寄蹲踞、

宣方牛車口宣ヲ持ス

次輦御車、力者等付車轅、前行輩次第烈立御車前、

次僧綱撥御簾令出給、

此時維那等可及警蹕聲之處無音、未練之故歟、矇昧之至歟、終無警蹕而即御乘車了、

次牛童二人竹法師丸普賢丸、入御牛於轅內、渡綱於御車副、即付綱本、此時毗佉羅丸飼口著水干取

御榻、渡毗佉羅丸、

次僧綱降沓脱之時、彼所從等進此所、前駢一人獻鼻荒、履之暫佇立庭上、色掌等過了、次第步行也、

此時泰恒可降庭上之處不然、太以狼藉也、

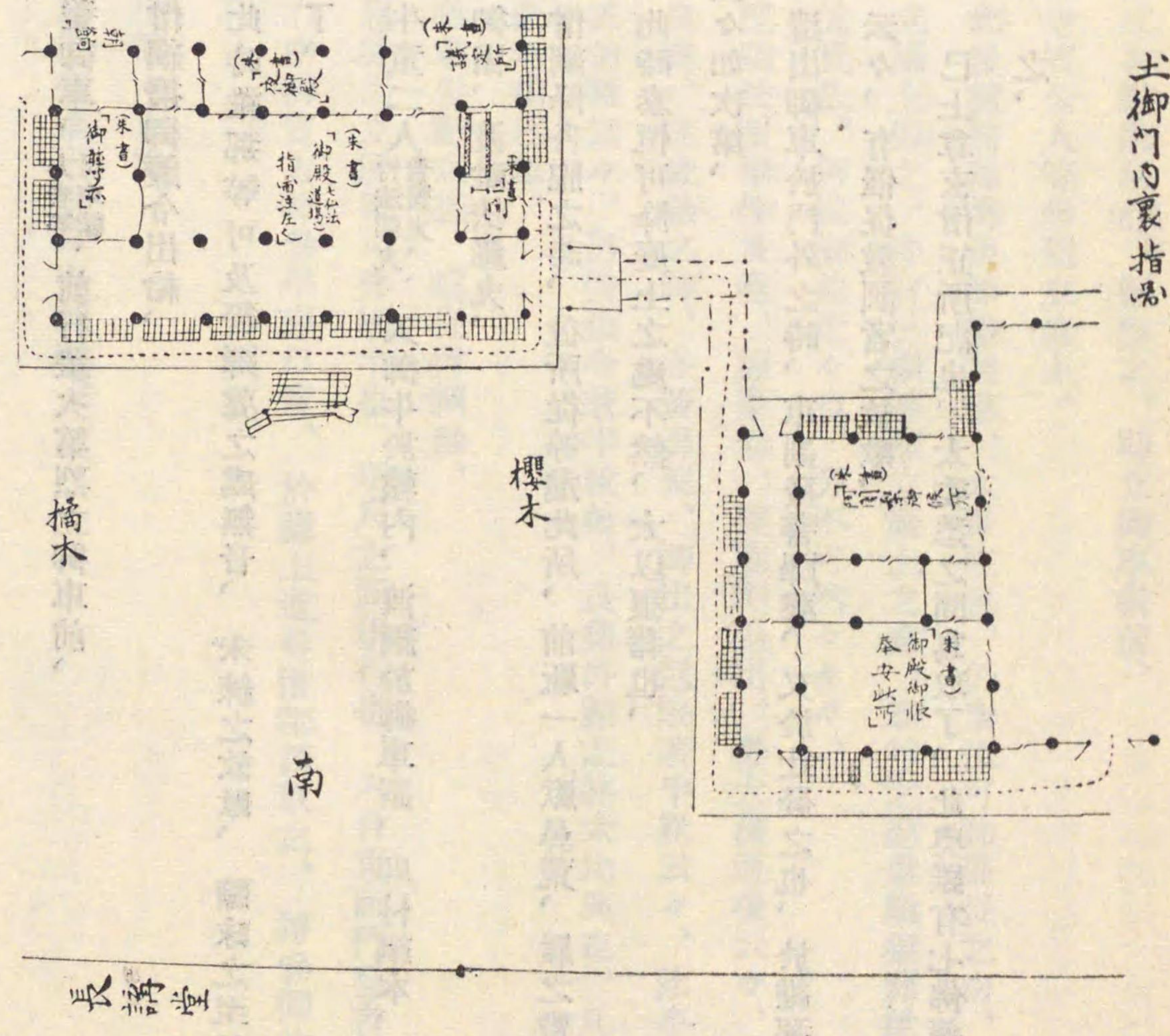
次々如次第、

遣出御車於門外之時、車副發警蹕聲、又於辻發之也、於維那警蹕者、自裏築地內發之云々、有催促教訓者之故歟、

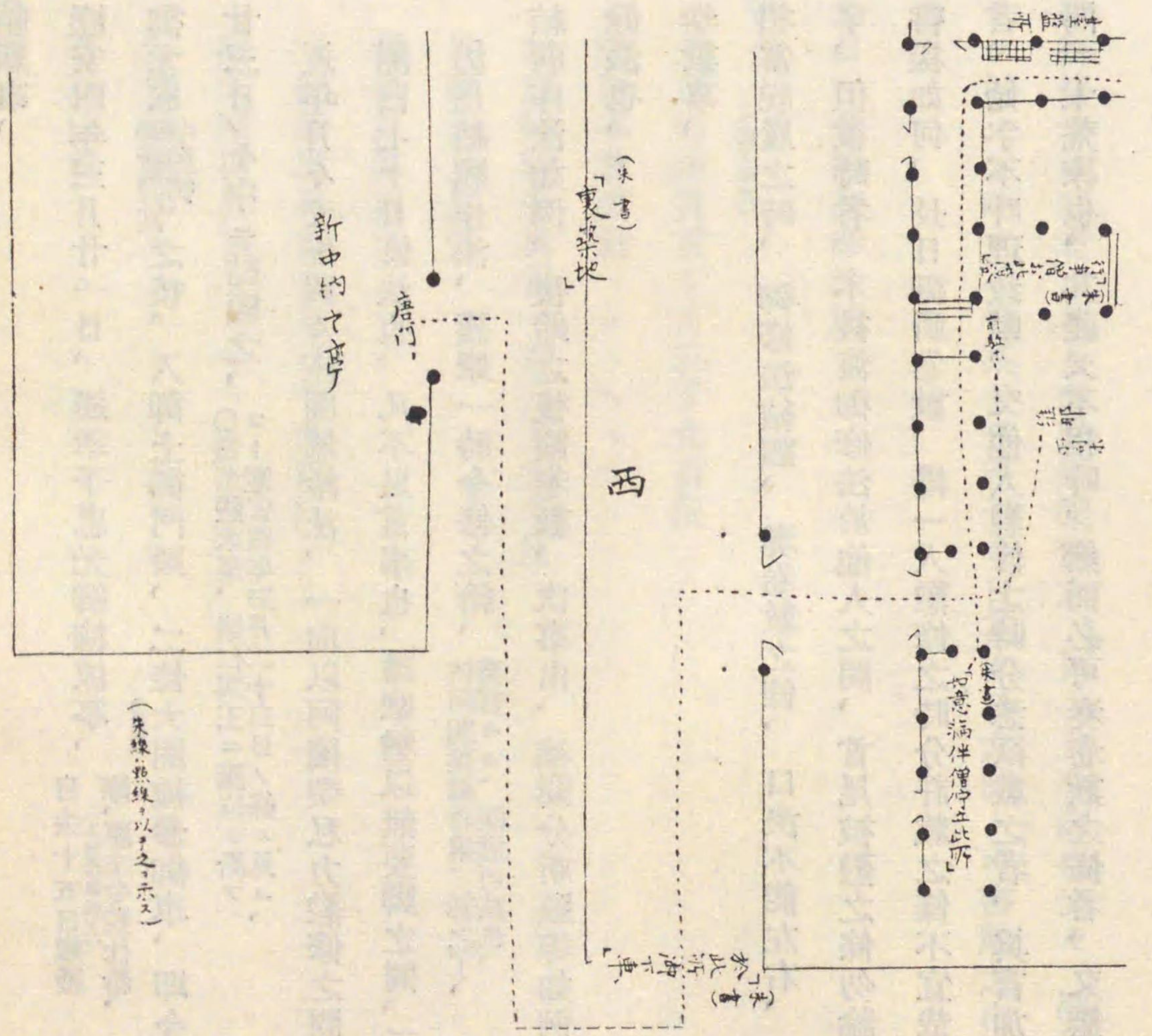
已上尊玄僧正所記也、太委悉之間寫取了、此輿雖有七佛藥師法記、別記置之間不寫之、

以上尊玄僧正記

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月三日
土御門内裏指圖



南朝正平二十三年 北朝應安元年五月三日



(朱線、柱線、以寸之、六分)

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月三日

一結願事、

應安四年三月廿一日、遷幸于忠光卿柳原亭、自去十五日鎮護同日宮立親王、同廿三日御元服御祈同宮之後、入御土御門殿、二條大閣被參御車、即今日御讓位也、仍長日修法廿三日、々々中ニ結願之、○後光嚴天皇、緒仁親王ニ讓位シ給フ、コト應安四年三月二十三日ノ條ニ見ユ、

莊園無沙
汰ニ依リ
阿闍梨私
勤力ヲ以テ
修ス

讓位ノ時
御修法結
願卷數ヲ
奏スル例

近年月々支配國々庄園無沙汰、一向以阿闍梨私力勤修之間、自他流皆以供修之、纔開白七ケ日修法也、凡不足言事也、護摩猶以無要脚之間、三時供以無闕念爲專許也、仍用結願作法、護摩一時令修之給、依阿闍梨御命第二誦之了、莫言々々、深意可察也、結願作法如例、後鈴之後讀卷數、次事由、補闕分祈願等如例、佛布施奉送、破壇等如餘法也、

一卷數事、

相當脱履之時、御修法結願、奏卷數之條、口決不能左右、就中青蓮院久壽被奏卷數了、但彼時者、不被渡御修法於他人之間、首尾被勤之條勿論也、而他人相交之時、其書樣如何、長日御祈卷數、纔一人勤修之時分許載之條不宜哉、其上始自某月日ト令書者、始字不叶理致歟、又他人勤修之時分悉欲載之者、真言加用反數多少、依人可異之間、太荒涼也、其義又不相叶、然而必可奏卷數之條者、又無異儀歟、倩訪傍例、仙洞

廻御修法結願者、其月參勤闍梨奏之、只一月分許也云々、准例之、尤渡修時分可書也、サテ始ノ字略之、自某月日至于今日某ケ日之間ト可書歟之由治定了、仍讀卷數如此書之、

長日如意輪御修法所

奉念

大日如來真言十万三千九百反

護衛本尊真言、、、、、、

如意輪觀音真言一百三万九千反

馬頭明王真言

延命并真言

三部諸尊真言十万三千九百反

諸天曜宿真言、、、、、、

當壇護摩、、、、、、

有功成就、、、、、、

奉供

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月三日

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月三日

二九〇

大壇供一千五十七ヶ度

護摩供三千一百七十七ヶ度

神供七十一ヶ度

右謹依宣旨、自應安元年五月三日、久壽無今年字、至今年今月今日、并一千五十七ヶ日夜之間、七口僧綱大法師等、特致精誠、懃修上件教法、奉祈金輪聖主玉躰安穩、寶壽長遠之由如件、仍勒行事、謹奏、

應安三年三月廿三日

阿闍梨座主尊（道）親王

久壽ニハ長日如意輪字无之、已上讀卷數如此、

如此書之、付奉行可被奏聞之由、兼日沙汰治定了、而俄依有阿闍梨思食旨不被進之、彼久壽例頗不宜歟、其故者、御修法結願以後、置中四日近衛院崩御、阿闍梨（谷）又其年卒、仍公私之例聊可有斟酌歟、其上後宇多院脱履之時、（道）准后被奏卷數哉否記錄無之、仍被略了、凡者相承無疑殆定他流有其例歟、然者強不可泥久壽之例哉、重尋先例、依師傅可有斟酌歟、雖恐憚且千爲後聊記之、

後勘、正元二十一年廿六讓位、件日如意輪法結願、被奏卷數云々、阿闍梨大原宮也、後深草天皇脱履、龜山院受禪也、

一御衣事、

久壽ノ例
不吉ニ依
リテ卷數
ヲ奏セズ

正元ノ例

御衣ヲ返
上シ給フ

同廿四日、御倉參申承仕奉返渡了、此次御元服御祈大威徳護摩、御衣同被渡畢、道尋大僧都内々遣奉行狀云、

長日如意輪御修法昨曉結願、御衣奉渡候、於御本尊者、任例預置候了、可得此意候哉之由候也、恐々謹言、

三月廿四日

道尋

坊後任藏人權右少辨殿

一花注連事、

同廿四日、御衣返納之後、花注連行事僧經聰令下知承仕等、門カフ木北端ニ卷置了、依令奉返渡御衣也、

〔御登山御參内之記〕 應安元年五月十四日二間御參、予行事僧ヲ兼、於御下車之

所令參會了、新製裝束也、

僮僕事

大童子二人、各如木、當色各三百疋下行、隨兩度役了、力者四人、各七十疋、隨兩度役了、恪懃一人、同前、御結願之時僮僕童一人重召具之、

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月三日

二九一

僮僕

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月五日

二九二

ソメ装束、五十疋下行、
童一人、牛飼、狩衣、
五十疋、

已上

經豪僮僕事

染裝束童一人、二百疋、

大童子一人、如木、三百疋、

力者二人、各七十疋、

恪懃一人、同前、

馳童一人、繪畫橋水直
垂、新調

中間二人、海水二千鳥、新調、
貸直垂

良堯寺主

大童子一人、如木、同前、

力者二人、同前、

恪懃一人、同前、

中間二人、

已上、

○北朝、入道尊道親王ニ牛車ヲ聽シ、同親王ヲシテ、七佛藥師法ヲ修シテ慧星ヲ祈
禳セシムルコト本月十四日ノ條ニ見ユ、

五日、甲憲子内親王、嘉喜門院ニ菖蒲ヲ上ル、

〔嘉喜門院集〕夏
○前田家所藏

正平廿三年五月五日、としくのしきなとやおほしめしいてけん、(憲子内親王)
一ぼんの宮よ

御歌ノ贈
答

り、

いまはまたあやめの草にひきかへてうきねのかゝるしる柴のそて
御かへし

おもはずよあやめもしらぬすみそめの袖にうきねのかゝるへしとは

〔新葉和歌集〕十九
哀傷歌 後村上院かくれさせ給ける年の五月五日、あやめにつけて奉

らせ給ける、

(憲子内親王)
新宣陽門院

けふは又あやめの草に引かへてうきねそかゝるしるしはの袖

御かへし

嘉喜門院

思はずよあやめもしらぬしる柴の袖にうきねのかゝるへしとは

六日、乙前大僧正増仁、南瀧院門跡ヲ前大僧正良瑜ニ讓與ス、

〔實相院文書〕四
○山城

讓與 南瀧院門跡事

右當門跡者、(源賴朝)右幕下以來、武家祈禱長日如意輪供合行、令始行、代々抽懇祈了、彼料所伊

勢國山田御厨、近江國宮武名等也、其外又代々寄附相承之地并堀河坊跡等、所讓與前大

僧正良瑜也、仍讓狀如件、

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月六日

二九三

武家祈禱
料所伊勢
山田御厨
近江宮武
名

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月八日

二九四

應安元年五月六日

法務前大僧正增仁(花押)

〔愚管記〕^{十二} 五月七日、丙子、陰、

增仁僧正有相示之旨、師跡間事也、

○增仁、增基ヨリ南瀧院坊舍所領本尊聖教道具等ヲ讓與セラル、コト正平七年七月十七日ノ條ニ、寂スルコト本年六月十一日ノ條ニ見ユ、

八日、^丑南黨駿河守河野邊某、河内小高瀨莊領家二分ヲ觀心寺ニ寄ス、

〔觀心寺文書〕

當國小高瀨莊領家貳分^{并軍勢分一揆分}、事、所被付觀心寺也、早得其意、可沙汰居寺家雜掌於當所之狀如件、

正平廿三年五月八日

駿河守(花押)

菱江民部大夫入道殿

當國小高瀨莊領家貳分^{并軍勢分一揆分}、事、任御書下之旨、所被付觀心寺也、早得其意、可沙汰居寺家雜掌於當所之狀如件、

正平廿三年五月十日

散位(花押)

草地右衛門次郎殿

○南朝、小高瀨莊領家職ヲ觀心寺ニ寄セテ御祈禱料所ト爲スコト興國元年二月二十三日ノ條ニ、楠木正儀、同寺ヲシテ同莊領家方諸給分ヲ安堵セシムルコト正平二十年九月六日ノ條ニ見ユ、

十日、^卯北朝、彗星出現ニ依リ、後白河、後鳥羽、後嵯峨三天皇ノ御陵ニ山陵使ヲ發遣ス、

〔後愚昧記〕^{○柳原家記録 百五十二所收} 應安元年五月十日、依彗星出現、今日被立山陵使、^{法住寺後白川院御}

廟、大原後鳥羽院御廟、淨金剛院^{大宮宰相隆仲朝臣}、等也、被獻宸筆勅書、^{勸解由三位高(實原)後光嚴天皇}主上出御畫御座、使參議等著殿上、賜勅書之儀、如公卿勅使之時云々、

如異國事并即位事被立山陵使之時、於陣上卿定使并日時奏聞之、使等於陣賜宣命進發也、自仙洞^{院御世務時歟}被立山陵使之時、被獻勅書事、每々有例云々、自禁裏被立之時、如今儀事頗可謂邂逅歟、天曆四年以後中絶、後嵯峨院寬元以後、至永仁元年三ヶ度之儀如此、是皆依彗星出現也、今度被用寬元例也、^{○宸筆ノ告文ヲ法住寺、大原、金原等ノ山陵ニ奉リテ、此天變ヲ告ケラル、コト寬元三年三月十二日ノ條ニ見ユ、}此山陵使事、松殿大納言入道觀意、此間相尋之、寬元以後儀不思寄之間、以尋常山陵使儀注遣了、其後相尋四位大外記師茂朝臣之處、寬元以後之儀注送之、仍令參差了、仍其趣示

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月十日

二九五

寬元ノ例ニ依ル松殿忠嗣ノ山陵使事ヲ三條公忠ニ問フ

宸筆勅書ヲ獻セラ

遣松殿入道了、如此事先尋先例之後、可答遣事也、頗可謂後悔者也、

〔後愚昧記〕 六

山陵使作法

山陵使事作法、

上卿以下著仗座、

納言與、參議橫敷如常、

次有使定、

依上卿與奪、參議書之如常、

次定文奏聞之、被返下之、

宣命ヲ給

次上卿召使、々給宣命、納言以下直自座前進寄先揖起座、居上卿前無揖、指笏、以左右手給宣命、

或懷中笏、以片手給之、右廻、宣命取副笏、復座一揖、次自上首次第起座、有揖、經床子前、依持宣命、雖有上官不揖之

於立部西邊懷中宣命、退出歸家、向陵、或騎馬、或乘車、

山陵ノ儀

山陵儀

先於便所洗手、手水禪衆役之、爲無沙、汰者以僕從可催促也、

次解劔、取笏著座、

件座高麗端疊、陵守設之、

宣命ヲ讀

先二拜、宣命副笏、次置笏、跪讀宣命、

次又二拜、

次燒宣命、先置折敷於前地上、以紙燭火燒之、禪衆折敷脂燭等出之、若不然者、仰僕從令用意之、令陵守燒之、或又以僕從令燒之、

忠嗣書狀

尙々自由申狀恐存候、陣儀相構付返被注下候者恐悅候、

昨日委細貴報殊恐悅候き、近日必可參申入候、兼又山陵使次第注預候、返々畏悅存候、不相應所望比興候き、未著陣參議使勲仕定無其例候歟、如此御次第者、納言以下直進上卿之前候歟、未著陣給宣命候之條無其所候歟、早可遂著陣之由諷諫仕候也、參議書定文御次第、聊被注下候者恐悅候、只使々名字許候、是者若外記進上卿候、上卿給執筆候歟、荷前儀風情不可相違候哉、難去子細候ハ、重申入候、〔親下同シ〕親意老耄上、文書等聊參差事候間重申入候、如此事一向可申入由存候、預御扶持候者畏存候、如此事早々參申入候也、誠恐謹言、

五月七日

親意

公忠返狀

山陵使發遣可爲何日候哉、今度山陵何所々候哉、御才學分〔覺〕可示給候、

連々芳間爲悅候、以便宜入見參可申承候、抑參議書山陵使定文間事如何、別儀大略無相違候、仍委不及注進候、文永定文案使進覽之候、外記以今度土代進上卿、々々與奪執筆無子細候、未著陣之參議先可逐著陣之條、誠勿論候哉、但勤仕使節事、仁治三年四月廿五日、即位由被告申山陵之時、右兵衛督未著陣、仍不著陣座、上卿召大外記、取金原宣命、仰可傳給右兵衛督之由云々、雖未著陣、非無先規候歟、不可有子細候哉、如何、謹言、

五月七日

(三條公忠)
(花押)

此次第不注進之、先上卿已下著陣、與、職事來仰、依其事、可被告山陵日時使等可令定申之由、次上卿移端座、令敷軾、次以官人召辨、問陰陽寮參否、次仰日時事、次辨持參日時勸文、上卿披見之置前、辨退、次召外記、可仰可進例文硯之由、次外記一人置例文於上卿前、次一人以例文硯置參議座前、次目參議令著座上次、

公忠書狀

遣松殿入道案抑依變異被立山陵使事、委引見之處、寬元以後至永仁上卿以下不及參陣、被獻宸筆御書於山陵之由所見候、然者何沙汰にも不及事候哉、今度被用何度例候哉、此間申奉事

候間、重令申候、

五月九日

(公忠)
判

師茂ノ公
忠宛返狀

應安元、五、九、四位大外記師茂朝臣返狀

おほせかふり候むね畏候てうけ給候ぬ。さしたることも候はぬほとに、さいく申上候はねとも、心中等閑をそむせず候ところに、こまかにおほせ下され候かしこまり入候、さて依變異候て、自公家被立山陵使例、別紙にしるし申入候、毎度陣儀におよひ候はぬあいた、上卿以下さたなく候、異國并其陵鳴動により候て、於陣被發遣例存之候、このよし御心にて申され候へく候、あなかしこ、

もろもち

依變異公家被立山陵使例 四位大外記師茂朝臣注進之、依相尋也、

依變異、自公家被立山陵使例

寬元三年三月十二日、是日公家令獻宸筆御書於後白河院、後鳥羽院、土御門院等法花堂給、被申天變以下事、自公家被獻御書於山陵事、天曆四年以後無所見、於院中者度

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月十日

二九九

師茂ノ注
進異ニ依
リ山陵使
發遣ノ例
寬元ノ例

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月十日

々有例歟、

法住寺

使從二位藤原隆綱(四條)

大原

使參議右近中將源通成(中略)

金原

使參議右近中將源通行(十御門)

件度次官勲仕輩有之、但名字無所見、

正元々年十月二日、今日公家被獻宸筆御書於山陵、是依天變并御不豫也、天曆、康和、寬元等例云々、

法住寺後白河院、

使參議右近中將藤原伊賴(總司)

次官少納言平棟俊

大原後鳥羽院、

使參議藤原顯雅

正元ノ例

永仁ノ例

次官民部少輔菅原在嗣

永仁元年十二月廿二日、今日公家内々被立山陵使於後白河院、後鳥羽院、後嵯峨院法花堂、依彗星御祈也、

後白河院

使參議侍從藤原資高(二條)

次官宮内大輔藤原藤朝

後鳥羽院

使參議平經親

次官右近中將藤原雅孝

淨金剛院
後嵯峨院

使左兵衛督藤原保藤(持明院)

次官右衛門佐藤原資冬

此外自院中被發遣例存之、

忠嗣書狀

松殿大納言入道山陵使事、應安元、五、十二、

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月十日

昨夕預尊札候之處、折節難去客來子細候て、不申入愚報恐存候き、近日必可令參入言上候、抑山陵使今度之儀邂逅候けり、不及參陣著殿上候、相同公卿勅使作法候、其子細自是可令言上之由存候處、此間聊計會、忌他事子細候之間、乍存不言上之處、遮蒙仰候畏存候、山陵之儀者、被注下候分、無相違候之間恐悅候、近日以夜景必可令參入言上候、誠恐謹言、

應安元

五月十一日

松殿大納言入道 親意

三條實繼
書狀及
公忠返事

今度使參議誰々候哉、又七佛藥師法自何日可被始行候哉、每事如白壁候、比興候、條々可勘奉候也、

其事候、

以外候、去比服藥事了、不治事等候て損事了、御同心候、

此間又恐鬱候、何御事候哉、涼氣過法之間、咳氣出來無斷候、自昨日聊得減候、さて

も、山陵使發遣可爲何日候乎、永仁ニハ三ヶ所候歟、正元ハ二ヶ所にて候しなから、

今度被用何度例候哉、寛元と承候、件度、法住寺、大原、金原三ヶ所候、今度者法住寺、大原、淨金剛院云々、

使節給御書之時儀、所持記不分明候、無何不審なる様候、いかゞ御覺悟候やらん、迷惑

候、昔星出現候しなから、年少事候間分明不覺候、彼時ハ被告申山陵候けるやらん、

徒然之餘無何思連之間令申候、比興候、且又此間相續之次第云々、爲令申之染筆候、

可爲何時候哉、無覺候、
心事非奉謁者難申盡候、爲之如何、

實繼

〔愚管記〕 十二 五月十日、己卯、晴、傳聞、今日被立山陵使、三ヶ所、寛元例云々、後白

河、侍從宰相 後鳥羽、平宰相 土御門、大宮宰相仲卿云々、

○彗星ノ現ハル、コト二月十九日ノ條ニ、北朝、恒鎮法親王ヲシテ、禁中ニ佛眼法ヲ修シテ彗星ヲ祈禳セシムルコト本月一日ノ條ニ、入道尊道親王ヲシテ、禁中ニ七佛藥師法ヲ修シテ同ジク祈禳セシムルコト同月十四日ノ條ニ見ユ、

北朝、駿河小路梁清ヲ石清水八幡宮護國寺檢校ニ補シ、尋デ平等王院會清ヲ同寺別當ニ補ス、

〔石清水八幡宮略補任〕 檢校 梁清 應安元五十宣下、

〔石清水八幡宮略補任〕 別當 曾清 應安元五廿四宣下、

〔石清水祠官系圖〕 孝清 駿河少路、母靈山定觀法印女、周ト改、又梁ト改、○中略

應安元年五月十日、補檢校、執務、四年、

十二日、巳、辛北朝、内膳奉膳某ヲシテ、近江粟津橋本五ヶ莊及ビ大江萱松本等供御人ノ公事ヲ知行セシメ、供御役ヲ全ウセシム、

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月十二日

三〇四

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲七十 舊記地下一

貞治四年
閏九月十日
勅裁
ニ依ル

内膳司供御人近江國栗津橋本五ヶ庄并大江萱松本以下萬雜公事、任貞治四年後九月十日勅裁之旨、令知行、可全供御役之由、御奉行所候也、仍執達如件、

應安元

五月十二日

左衛門尉泰朝奉

謹上 内膳奉膳殿

和泉松尾寺、藥師寺ト同國惣講師職及ビ佛事供養導師等ヲ争フ、是日、南朝左京亮某、藥師寺ヲシテ之ヲ安堵セシム、

〔藥師寺文書〕〇和泉

和泉國松尾寺代源遍與穴師堂代實金相論國中佛事供養導師等事

右就兩寺之訴論、訪一決之是非、松尾寺者、捧元應二年四月、五月、七月等六波羅問狀、爲惣坐頭可致所々佛事供養導師之由訴之、穴師堂者、備曆應二年十月、正平十年二月、同十月國衙補任狀等安堵下知、惣講師職所々供養導師勤仕者、代々任令旨國宣等御下知、于今領掌無相違之由論之、訴陳之趣雖似多端、所詮穴師堂者、代々蒙安堵下知、管領無相違上、相尋卷尾寺□神於寺大鳥郡五師等之處、松尾寺者、惣講師職并供養導師等勤仕事、且無先規、於穴師堂者、爲惣講師、令勤仕供養導師等之段、無子細之旨、皆

元應二年
六波羅問
狀
國衙補任
狀

以捧請文訖、早任代々國宣等安堵下知、爲當管領上者、穴師堂相傳領掌不可有相違矣、仍下知如件、

正平廿三年五月十二日

左京亮（花押）

〔附箋〕
當年應永卅三年丙午五十八年戌〕

和泉國々中佛事供養惣講師職事、可被全藥師寺々僧管領旨、任今月十二日御下知、悉所令打渡也、仍執達如件、

正平廿三年五月十五日

左兵衛尉重政（花押）

〔參考〕

〔泉州志〕三和泉郡 藥師寺或云穴師堂 穴師神宮寺也、

廬山寺照源明導寂ス、

〔愚管記〕十二 五月十二日、辛巳、晴、廬山寺照源上人入滅云々、天台之碩學、當世

獨歩之人也、故仲圓僧正門弟也、隱遁之後、歸淨土宗之人也、

〔三鈷寺廬山寺二尊院歷代〕 廬山寺

第四 明道上人 照源、本名房雲僧都、號淨聖院、西山廣惠和尚弟子、

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月十二日

三〇五

天台ノ碩
學
淨土宗ニ
歸依ス
廬山寺第
四世房雲
本名

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月十二日

三〇六

〔盧山寺住持次第〕

○柳原家記錄 百二十三所收

禪覺 諱照禪

明導 應安元五十二滅、
諱照源、有房公子、

明導上人、後醍醐天皇御孫也、與願金剛院第三世、此時以出雲路廬山被移當寺、備號廬山、仍以明導爲廬山中興也、

禪也 上人廬山前住、此時以出雲路廬山付屬明導、々々
初以彼寺被移此寺、建武三十一十八滅、

實導 上行院、諱惠仁、諡號圓應仁空、字靜山、
嘉慶二十二十一滅、
仙圓法師 東塔南谷南光坊社、

〔廬山寺文書〕

沙門照源申

欲以廬山小寺可爲勅願寺由被仰下事

右佛法宜通起自王者之珍敬、王道繁榮出于佛陀之勝利、古今傳來蓋如斯、眞俗相資良有以矣、爰有草堂、稱廬山寺、又有小院、號與願金剛、照源懋執兩院規矩、謬致一身荷負、經涉有煩、行學多妨、仍以廬山小堂移與願金剛院了、此院者自元（後醍醐天皇ノ）先皇御願也、（四條大納言奉行）基雖在數步、誓攝盡虛空、覺雖同徑寸、遙期无上道、因茲讀法華仁王金光明等大乘經、致

廬山寺ヲ以テ勅願寺ニ爲サレシコトヲ請フ
廬山寺ヲ與願金剛院ニ移ス
先皇ノ御願寺

與願金剛院第三世廬山寺ノ中興

叡山ノ舊風ヲ摸ス

後醍醐天皇ノ御願寺ニ依テ受ク

大原來迎院ニ住ス
金剛院ニ移ル
天台三大部ヲ講ズ

鎮護國家之精誠、學遮那止觀菩薩戒等深法門、酬山王垂迹之本懷、皆摸叡山之舊風、敬資聖朝之長久、加之修如意輪法、祈王家之安泰、轉大般若經、擬國土之攘災、是則每日勤行永劫軌範也、就中雖卜練若之居、不出洛城之境、雖開講經之樞、永隔慣鬧之席、佛法精研敢不妨、皇家護持甚有便者也、但機感不交、法利難彰、水月相應、浮影自然矣、早任申請被下勅願院宣者、廻三十餘年顯密之薰修、祈百王繼嗣之嘉運、待五十六億慈氏之出興、滿三寶紹隆之善願而已、

〔廬山寺緣起〕

中比明導上人、諱者照源、六條內大臣有房公六男、始於山上者稱大僧都房雲、後醍醐天皇世に超て尊重した

まふ餘りに、忝く衰龍の御衣を以て、傳教大師の衣を縫うつして著せしめ給ふ、それよりして宗門の衣を改かへて、門徒一同に是を著す、當時の眉目何事か是にししかむ、○上、下略

〔本朝高僧傳〕

十六 淨慧二之十三 京兆廬山寺沙門照源傳

釋照源、字明導、源僕射有房子、少登叡峰、陪諸師席、該貫顯密、才優義富、住大原來迎院、（撫）誘昇四衆、講台密乘、授圓頓戒、勸淨土業、後隨檀請、移京之金剛院、改額廬山、四方來就、源有四宗兼學之名、（後醍醐天皇ノ）天子屢召宣問台教、賜如法衣、在猪熊亭、講三大部、學者筆記成一百卷、名猪熊鈔、或曰廬談、今行于世矣、

〔尊卑分脈〕

村上源氏 六條

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月十二日

三〇七

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月十二日

有房

山雲 房惠 大僧都、通世、寂初住大原來迎院、西山淨土宗、又顯密兼學、廬山寺明道上人、昭源、

三千院文書 七 山城 南房系圖

遊觀房 栖空大德 承空大德 廣惠和尚 示導房

尋聖房 弘惠大德

觀一房 源舜大德

示淨房 隆空大德

明導房 照源大德

佛日房 遵空大德

實導房 仁空大德

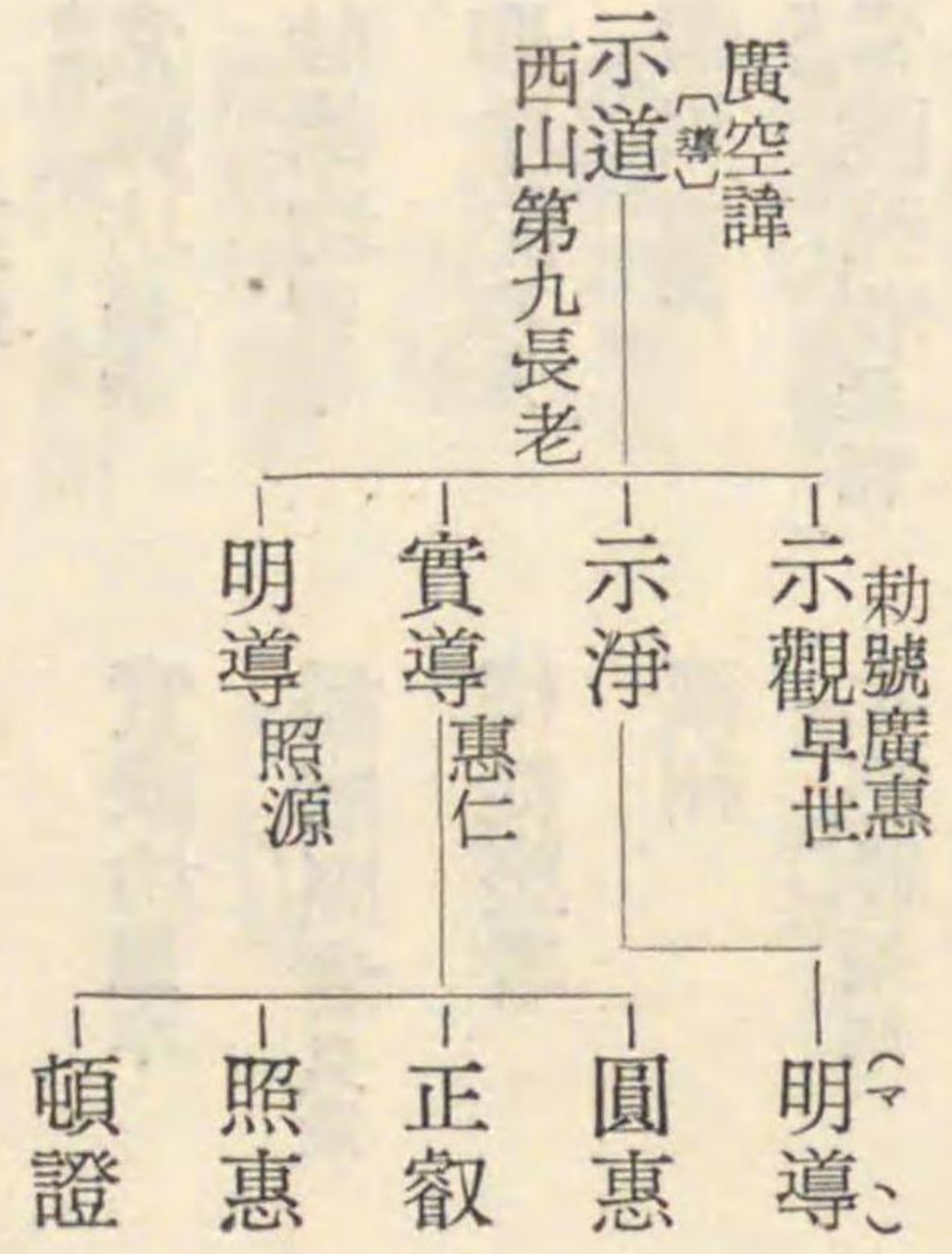
明空大德 明源大德

法水分流記 西山義、又號小坂義、

顯西 康敷 向空示道 八條、住東唐堂、西山北尾、

示淨住西山、 實觀住東唐堂、 明道住廬山寺、 照源 仁空實道

淨土源流章圖



洞院系圖 卷首所載

公賢

教俗 廬山寺明道上人資ノ實照源ノ弟子トアリ、
示鏡 母同、

止觀義例猪熊鈔 龍谷大學所藏

貞和三年丁亥九月十四日、於猪熊被始行之、盧談、

義例云名言、左丘明付春秋注立之名目也、就其立三例、

一、凡例、經國之常制、周公垂法、史書舊章也云云、

二、變例、起新舊、發大儀、謂之變例云云、

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月十二日

弟子

開書 止觀義例 猪熊鈔

三、非例、以直言所史趣云云、

經無義例、釋有義例也、今准之、釋止觀立義例名也、止觀無義例、釋有義例可云也、義者一宜也、二利也云へリ、例者類例也、今止觀一部以七例釋之也、○本文略ス、

〔止觀義例猪熊鈔〕三 ○龍谷大學所藏

(内題) 義例猪熊鈔中 貞和三亥丁九月二十二日

〔止觀義例猪熊鈔〕四 ○龍谷大學所藏

(奥書) 右於廬山寺御談、又號淨聖院明道上人慧達上人聞書、此間孝經談義一返已、北隣上岡爲群集人談之、玄惠法印、

結緣人人

東塔

常禪坊珍豪 南谷 實藏坊顯幸 龍鳥坊增海 大進堅者有性

妙德坊澄運 播磨堅者良承 帥堅者仙圓 仰注記永仙

仰注記幸承 侍從堅者 式部卿良重 大夫公定增

讚州澄禪 濃州

常陸堅者尊範 北雙殿榮仙 金蓮坊清存 侍從幸舜

福生坊聖澄 備前注記光海 帥公光選 交乘南谷 讚州澄全

乘如坊良什 與州

慈護坊憲順 北谷 東藏坊快運 大進注記 三位公觀澄

練禪坊教頤 西谷

西塔

莊嚴坊俊器 永林坊 安藝堅者豪英

堂僧 與州

已上此中或有始無終、或有終無始、或始終俱有、又自他往復少少有之、

貞和三亥丁年九月十四日始行、同十月六日給願、首尾二十二箇日、大云

以惠達上人自筆本寫之畢、

凡一流之肝要、天台之大綱、誠不可過此抄、可謂髻中明珠、來葉所聊爾不可及他見云云、(難力)

萬治二己二月月上旬、於山門寶幢院令勘校訖、

〔六即義廬談〕○觀山文庫所藏

(奥書) 貞和元年十二月廿六日西、於廬山寺終書功了、是則去月大師講之時、被遂行當科間、

聽聞趣雖記之、楚忽之間、筆跡彌以散々、仍依難備後見、再染筆者也、是併雖一句一

言、不交他人之義、偏所記嚴師之貴言也、更不可出櫺外而已、求法沙門承禪廿八才

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月十二日

十如是義

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月十二日

〔十如是義〕

○上野圖書館本

十如是義 真治六年十二月十七日

應永五年 二月十九日、於洛廬山詔同法寫之、

則手自一校了、

明空

〔自在金剛集〕

八 密林目錄 諸師撰述

法 息心立印鈔 十一卷、六卷廬山明導諸尊法傳授口決也、諸經部、山門鷄足東觀慈眼堂藏俱缺之、

〔本朝台祖撰述密部書目〕

中古明匠述作

曉示抄廬山明導、應安三於廬山寺作之、建武ヨリ三十五年以後

曉示抄

息心立印鈔

天台三大部廬談

一百三十五卷

〔頂妙寺文書〕

三大部廬談卷數并緣起

法華玄義廬談 三十五卷

法華文句廬談 三十八卷

摩訶止觀廬談 六十二卷

都合一百三十五卷

此外中古卷冊紛失歟、故如文句第五廬談闕之、希後賢補之整足焉、

天台日光道場ノ寶物ニナサントス

廬談一百卷ヲ日蓮宗中ニ得タリ

右三大部廬談者、文保元應年中以來、於洛陽廬山寺、叡峯義虎尊契法印等碩德對諸生講之焉、聽徒顯幸等述其所聞記之、故名廬談、或謂聞書、亦號述聞、蓋是台宗深祕之書也、因之寬永第十六己卯年、前京尹板倉周防守召當寺老僧三人曰、南光坊慈眼大師請告幕下、大猷以鴻命其寺所傳摸寫天台三大部廬談、永爲日光道場寶物、老僧答曰、振古當寺所藏廬談祕重而敢不出門、雖然嚴命難默止、請垂推惟察焉、板倉氏重曰、祕藏之書不出門外、最有其謂爾、於其寺令寫之矣、老僧諾焉、厥後南光坊之法弟上足山門正善院、將僧侶五十九人、夜宿別處、晝尅三時於當寺客殿孳々寫之、大槩遂功猶有餘殘、翌年寄宿寺內良叔坊寫之、首尾經歷二年、全部一百三十餘卷膳寫之畢、余亦曾聞之、貞享四丁卯年八月、叡山橫川常光院主八十二歲、一時之大耆也、語本國寺老僧某曰、元龜二年我山爲信長所焚、佛殿僧房台典密墳一時回錄、山徒被殺戮者不可勝計、十九年之中焦土矣、至天正十七年豐臣秀吉公復營構、殘僧才三十六人應命處々歸來、雖然我家經籍祕決求之無由、就而求請日蓮宗而立法規、其後寬永年中慈眼大師告幕下、大猷以尊命得廬談一百餘卷於日蓮宗中矣、案此常光院主談話與當寺舊記宛如符契也、凡此廬談者、文保年中已來親於講席所書直本、而至今歷三百八十餘年、故朽廢最甚乎哉、余歎後代盡滅、採集古篋之中、新其帙及函、入之寶藏、且又慮歲月稍久口碑磨滅、欲記其梗概以傳無窮、而叨馳禿毫、冀天下豐寧、

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月十二日

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月十二日

三一四

妙法廣布、自他俱安、同歸常寂耳、

維時元祿第十一戊寅年十二月十六日 聞法山頂妙寺第十九嗣法知覺院日啓(花押)

〔稿〕日本天台宗宗典目錄

法華三大部猪熊鈔 一二四

或云廬談、安居院聖覺說、明導筆記、

法華經玄義述聞 一四

觀應元年於西尊院始、弘應元年七月頃了、

法華經玄義見聞 二〇

觀應三年七月始、文和二年五月頃了、

法華經文句述聞 二三

但缺文句第五已下、

法華經文句見聞 一九

摩訶止觀述聞 二二

延文元年始講、第九末云、觀應元年六月於西尊院講、

摩訶止觀見聞 三五

延文元年八月於東塔東谷寶地房始、觀應元年七月於西尊院廬山寺了、

目錄

止觀義例猪熊鈔內題云開書 四

貞和三年十月講、慧達記、萬治二年頃刊、

十不二門廬談內題開書鈔 二

貞和五年八月於猪熊與房談之、慧達記、萬治三年初冬刊、

十不二門本書聞書鈔 一

觀應三年六月廬談、慧達記、

十如是義 一

貞治六年十二月十七日廬談、應永五年二月十九日於廬山詔同法寫之、

明空

〔史料蒐集目錄〕昭和二年 京都府 三千院

一 雙身私記 一帖

(與書) 元亨元年五月十六日奉從大僧正奉受了、同十八日於靈山以師御本書寫了、賜印信了、

房雲記之、

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月十二日

三一五

一合灌私記夜

一卷

(與書) 元亨二年六月七日以右御本書寫之了、

前權少僧都房雲

一三摩耶戒

一卷

(與書) 元亨二年六月廿五日以右御本敬書寫之了、

金剛佛子房雲

交點了、

一東灌略記

一卷

(與書) 元亨二年七月五日賜右御本書寫之了、

房雲金剛

交點了、

一西灌略記

一卷

(與書) 元亨二年七月十日以右御本敬書之了、

房雲金剛

交點了、

一三戒私記

一卷

(與書) 正中二年五月十七日校合小山次第了、

房雲金剛

一梶井門跡靈寶聖教ノ事明導上人筆

一卷

(與書) 戊申歲沾洗上旬日

老釋照源記、

(應安元年)

○光嚴上皇、照源ヲシテ若狹前河莊ヲ安塔セシメ給フコト建武三年十一月二十五日及ビ同四年七月二十三日ノ條ニ、北朝、更ニ安塔セシムルコト延文元年五月六日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

廬山寺

〔山州名跡志〕

二十 洛陽寺院

廬山天台講寺、

略云、廬山寺、

在淨華院南、宗旨四宗兼帶、

天台、律、淨土、眞言、

○中 元亨の比、當寺一代の住職明導上人六條内府有房六男、道德兼備す、後醍醐帝御歸依あつて爲祈願寺、庄園を寄附し玉へり、初所開猪隈一條北也、天正中移今地、

十三日、壬午、後光嚴天皇、笙ノ祕曲ヲ豊原信秋ニ受ケ給フ、

〔愚管記〕

十二

五月十三日、壬午、晴、今夜主上(後光嚴天皇)御灌頂云々、被召信秋(曾原)於朝餉前庭、

前右衛門督教言卿祇候御前、御傳受羅陵王荒序、奉行頭中將公時朝臣賜單重一領、重又賜衣一領、後日御馬二疋被引遣之、相尋三條大納言(曾原)所記也、於當座獻上與書云々、勸賞

事後日可被仰之云々、

廿八日、丁酉、陰、入夜雨降、於陣被行小除目云々、信秋奉授荒序賞、讓子息音秋、被

任左近將監、有尻

〔應永年中樂方記〕 應永十五年八月廿七日、晴、癸卯、

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月十三日

信秋ノ左近
音秋ノ任
將監ニ任
セララル

羅陵王荒
序
御衣御馬
ヲ賜フ

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月十四日

三一八

一後光嚴院笙御沙汰之次第、予私記注進之、○中略

一御灌頂 應安元年五月十三日、信秋、山科教言、堂上常言

〔舊樂所系譜〕 樂所 豊原

龍秋

〔信秋〕 龍秋男、應安元五十三、
後光嚴院荒序御師範、

〔音秋〕 信秋男、
年月日任左近將監、

北朝、正四位下室町公彦ヲ從三位ニ敍シ、尋テ彈正大弼ニ任ズ、

〔公卿補任〕 四十 非參議從三位藤公彦 五月十三日敍、同十八日任彈正大弼、

十四日、未、癸北朝、入道尊道親王ニ牛車ヲ聽シ、同親王ヲシテ、禁中ニ

七佛藥師法ヲ修シテ彗星ヲ祈禳セシム、

〔愚管記〕 十一 五月十四日、癸未、陰、座主尊道法親王、自今夜於禁中勤行七佛藥師

法云々、以御殿爲道場云々、

結願

廿一日、庚寅、陰、入夜大風大雨、終夜不休、至天明止、七佛藥師法結願云々、

〔後愚昧記〕 ○柳原家記錄 百五十二所收 應安元年五月十四日、自今日於禁裏、被始行七佛藥師法、

彗星御祈云々、阿闍梨青蓮院入道親王 後伏見院宮 云々、今日被聽牛車宣旨云々、○以下乘車先例ニ關スルコト、本月三日長日如意

牛車宣下

尊道親王
車ノ事ヲ
三條實繼
ニ尋ネラ
ル

輪法行ハル、條 三條公忠 車事被仰談内府 實繼 云々、彼間事、内府不審題目等、此間所相尋予也、所

詮八葉長物見車被新調之云々、件車上古無之歟、中古以來用之歟、野宮左府建保 前官之間、以

後、或駕網代車 也、文車、或乘殿上人車、或又此車用之、每度物見ニ懸小簾用之、車副差綱遣

之、抑物見懸小簾事、強非本說由、見彼 公繼 元仁元年六月十八日記、彼記文注遣内府了、

又物見ノ上爾有連子事、久我故相國 長通 如仙洞評定參仕之時、度々用之、彼車 八葉長物見、不懸小簾

有連子云々、今度連子有無可尋之、野宮左府車無連子也、公經 西園寺 公車又無連子由有所見、

今度車委尋内府可注置之、

廿一日、今日大法 七佛藥師法 結願義也、○中略 大法結願御時御加持以下事々仰度者、三條公忠 次仰

勸賞、權少僧都深轉大、并青龍寺置阿闍梨 次祿、大阿闍梨分公時取之、番僧於弓場代給之、

僧綱六位、凡僧出納、此外免物、上卿權中納言、官人明宗參陣云々、

廿五日、座主宮八葉長物見車事、有外金物之由聞之、仍相尋内府之處、返事云、外金物

不存知候、大方治定儀不計申候、只所見分少々注進候き、爲後記治定分可尋申竹園、追

可進覽云々、

實繼返書

廿六日、内府送狀云、座主宮車事、昨日尋申了、返事如此、進覽之、外金物候けり、說

者不審候、物見ノ廂なと、前後兩方開たる物候、八葉長物見不然候哉、才學不詳候、文

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月十四日

三一九

公忠車ノ
事ヲ實繼
ニ問フ

尊道親王
御返事

野宮左府
記所載ノ
記事

實繼網代
車ヲ八葉
長物見車
ト誤ル

實繼書狀

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月十四日
車ナトハ近比までも開門任意了、今も本儀ハ尤可然候哉、今度事宗と誰ニ被訪候けるやらん、不審候、大閤、久我などの外不覺云々、
座主宮返事云、

車事、長物見開前方戸懸簾、外連子心地にて候、仍立フチ、横フチナトノ折目風情ニ、少々金物候き、外連子時如此候やらんと或仁申候程に、如此致沙汰了、先日宮槐記ニも長物見にも外ニ所々金物候之様ニ見候しやらん、仍才學も符合候し程に、如此用候、
野宮左府記内府注遣座主宮云々、先日所示送也、

嘉祿二年十一月十六日童御覽、

網代車、稱チカヘ物見、是對半部名也、常網代車也、有外黄金物、開戸ノ金物ハ散物也、以下略之、

予案之、稱網代車者、文ノ車事也、定事也、上白トモ號也、其趣見記錄等、委不違記之、勿論事也、而内府以此稱網代車之記、八葉長物見ト心得天、注遣座主宮歟、僻案無口傳之所致也、可嘲可歎、如此事、能々可有斟酌事也、非累家而當時稱有識之所致也、比興々々、

〔後愚昧記〕 五

應安元、五、廿五、
誠此間閣筆候之處、恩問恐悅候、兼又座主宮車事、八葉長物にて候へしとまては承候

深雨ニ依
リ樂人行
道一反

同書狀

き、外金物事不存知候、さてハ如然候けるやらん、大方治定儀不計申候、只所見少々注進まてにて候き、見物者説ハ、長物見小簾懸内、開物見、車副四人とまて承候き、金物事者不見答候けるやらむ不申候、爲後記治定分可注給之由欲令申候、此間懈怠未申候、念尋申候て、注給候ハ、可進覽候也、大法結願儀御時御加持以下事々仰度者、公時、次被仰勸賞、權少僧都道深轉大、并青龍寺置、次祿、大阿闍梨分公時取之、番僧於弓場代、中門邊、賜之、僧綱六位、凡僧出納、此外免物、上卿權中納言、官人明宗參陣候云々、傳説分大概如此候、剋限五位殿上人宣方、卷階間御簾、四位殿上人、親雅、上内陣幕候けると承候、深雨之間、樂人大行道一反仕候、他事省略候也、

實繼

此狀御一覽之後、可返給候、手跡うつし進之候、
應安元、五、廿六、
昨日申承候、爲悅候き、座主宮車事、昨日尋申候之處、如此承候、外金物候けり、説者不審候、物見ハ廂などハ前後、兩方共開たる物候、八葉長物見ハ不然候哉、凡いたく才學不詳候、文車などハ近比までも開閉任意候、今も本儀ハ尤可然候哉、今度事宗と誰ニ被訪候けるやらむ、不審候、大閤、久我などの外ニ不覺候、奉調之時、猶委可尋申候也、

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月十四日

三三二

〔門葉記〕

七十 門主行狀三

入道一品尊道親王

號後青龍院

第百卅四代座主

(應安元年五月) 同十四日蒙牛車

宣旨、

助修二十

同日、七佛藥師法始行、

助修廿口、護摩壇隆壽大僧正

廿一日、結願、後加持以後被仰勸賞、

(三條) 藏人頭公、時朝臣

以道尋僧都轉任權大僧都、又西山青龍院

阿闍梨二口被寄置之、

〔門葉記〕

二十九 長日如意輪法三

○山城 入道親王

(尊道親王)

應安元年五月三日、被渡修長日御修法、

尊什大僧

正辭退替、去 月 日御請書到來、

○中

一二間御參事

尊玄僧正記委悉也、仍續加之、彼記云、

應安元年五月十四日、天台座主入道无品親王蒙綸旨、爲彗星等御祈、於禁中始修七佛藥

師法、先是遂二間初參之儀、

○本月三日

又令奏牛車慶給也、

牛車宣事

先師入道二品親王尊圓、卅五歲而蒙宣給、祖師二品大王慈道、卅八歲而被聽給了、

爲院尊勝陀羅尼供養御

導師、參勸 今年大王御年齒卅七

兩代之中間也、時分依無相違歟、今度被申請之、内々付女

房被申之、勅許無子細、而上卿依無出仕之次、此間遲引、今夜被宣下畢、

口宣案

上卿三條大納言

應安元年五月十四日 宣旨

無品尊道法親王

宜聽乘牛車出入宮中、

(中御門) 藏人右中辨宣方奉

右口宣案御參已前、奉行職事宣方、令持參御出立所訖、

〔石清水文書〕

四 鳩嶺雜事記

一五月十五日ヨリ青蓮院宮七佛藥師法令始行給云々、

〔華頂要略〕

七十八 御寺務所

青龍院

寛元々年春御建立、道覺親王御住坊也、其後代々門首御隱遁之地也、

○中

應安元年五月廿一日依七佛藥師法

御門主御勤仕

勸賞、西山青龍院阿闍梨二口被寄置之、

○北朝、恒鎮法親王ヲシテ、佛眼法ヲ修シテ彗星ヲ祈禳セシムルコト本月一日ノ條

ニ、入道尊道親王ヲシテ、長日如意輪法ヲ修セシムルコト同月三日ノ條ニ見ユ、

十六日、乙酉、蒙古襲來ノ風聞アリ、

〔愚管記〕

十二

五月十六日、乙酉、晴、異國襲來之由有風聞云々、

廿五日、甲午、晴、異國襲來事、虚説之由又風聞云々、

〔後愚昧記〕

○柳原家記録 百五十二所收

應安元年五月廿一日、○中 或説云、蒙古欲攻來日本國云々、

虚説ナリトモ傳フ

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月十六日

三三三

鎮西ノ海
畔ニ馬糞
漂フ

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月十八日 二十日

三二四

其地馬糞多寄來、鎮西海畔云々、先々弘安、文永且如此也、以之知之云々、

十八日、丁亥征西將軍懷良親王、菊池武光ヲシテ、安富泰治女ニ還付スベキ肥後大野莊岩崎村半分ノ替地ヲ肥前關所内ニ索メ、之ヲ注申セシメラル、

〔深江家文書〕下

安富孫三郎泰治女子字帝、申肥後國大野庄岩崎村事、於半分者、爲勅裁被行恩賞畢、不及改動、至殘半分者、爲料所被付給人畢、宛給替於當給人、可被返付彼女子之旨、御沙汰了、依替地事、任先度被仰下之旨、以肥前國欠所内相當件半分之程、可被注申之狀、依仰執達如件、

正平廿三年五月十八日

胤房左少將(花押)

菊池肥後守殿

○懷良親王、岩崎村半分地頭職ヲ安富泰治女ニ還付セラル、コト建徳元年二月二十一日ノ條ニ見ユ、

二十日、己丑美濃守護土岐頼康、父頼清ノ三十三回忌法會ヲ佛心寺ニ修ス、

導師良憲
伶人三條
實音

妙葩ノ拈
香法語

〔後愚昧記〕

柳原家記録
百五十二所收

應安元年五月二十日、土岐大膳大夫入道、於佛心寺一條大宮、禪僧寺也

爲親父卅三回追善修佛事云々、導師安居井法印良憲、說經云々、伶人三條大納言實音、以下行向、勲所作云々、

〔智覺普明國師語錄〕

三陸座下

爲土岐霜臺祥雲孝公居士三十三回忌請

拈香、得種塵勞裏、托根菩提場、統衆德爲花果、把五分作馨香、爇向爐中、供養云々、遂跌座、垂語曰、十方無影像、觀面露堂々、今日明府入寺、大開齋僧會場、時節因緣不回避、黃金色上誰添黃、有麼、問答師迺曰、堪報不報之恩、以助無爲之化、不是目前法、亦非心外機、一句截流、千差路絕、當陽揭示、全無遮藏、所以文殊不二玄談、淨名只消一默、諸佛出身處、東山水上行、西江吸盡底人、不與萬法爲侶、凜如倚天長劍、皎似呆日當空、直饒大悲千眼、亦當頭難覩著、若也放開一線路、吸劫火於腹内、擲大千於方外、掌上擎妙喜界、毫端開寶王刹、若凡若聖、情與無情、日夜轉大法輪、成大佛事、且道、是什麼境界、佛也不知、祖也不會、復曰、今日法會旨趣無佗、賴康光祿大夫某甲、令弟前羽州太守、前與州太守等、今月晦日、伏值先考霜臺祥雲孝公居士三十三年遠忌之辰、預於日外、身心齋戒、勤修種々白善、又命大衆、看閱毘盧法寶大藏經文、又依法華懺摩法、精修五種妙行、特爲台靈、懺悔無始廣大劫來六根罪障、又就于南禪建仁、東福等大利、平

忌辰ハ今
月晦日ナ
南禪建仁
東福ノ諸
大寺ニ法
會行ハル

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月二十日

三二五

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月二十日

三二六

等設供佛齋僧會場、陸座諷經、又於濃州諸刹、修善不遑枚舉、今日特就本寺、設茲會場、嚴備香華燈燭等妙供、伸供養之次、命山野命陸座說法、所集善利、奉爲台靈、嚴淨報地、追修冥福者、如是妙行妙善、贊揚當在正日具陳、只爲增長見聞隨喜功德、略舉大綱爾、普賢菩薩十大願、以超越諸佛願、名曰願王、隨喜功德其一也、熟案、此十大願、諸願之中、可撰取最勝最大者、然亦太似沒緊要、人所作功德、爲其一者隨喜、是何謂哉、夫凡夫之性、見人作好事、妬忌之心動于中、誹謗必發于外不休、則中下之機中道而止矣、由茲不能成立世出世事、若得人隨喜贊嘆則必成焉、世間例說道、人要作善事時、必障難出來、若惡事舉意便成、是亦無佗、今此欲界乃魔王所領、其中衆生、亦日夜與彼等、同住同行、同見同聞、起善念亦知、起惡念亦知、彼天魔以衆生爲田疇、以衆生爲資糧、以衆生爲眷屬、是以若有衆生一念歸向佛乘、則出世死界外、衆生界便空、衆生界空、則彼等天魔田疇不熟、資糧匱乏、眷屬亦減少、無故魔宮振裂崩倒、經曰、若有一人、發真歸源、十方虛空、悉皆消殞、以之觀之、如何魔宮不振裂崩倒乎、宜乎、舉意作善時、魔便來作障難、非是人爲性好作障難、々々心起、可知皆魔心生、而有魔心之人、當有所成立、必有因果相酬、是皆古聖所定、非一己之私言、請各著意看、是故普賢菩薩、觀見一切衆生、於所作善、多諸障難、不問大小、隨喜其功德、教其增進成就、此願可謂最大最勝、至要

至切、是以少讚揚今日功德、布施諸人者也、世間之人、無貴賤養育子孫者、意在送終成家傳業也、然先父母死者、亦有何限乎、是皆不孝之所致也、爰今日功惠主光祿大夫諸昆季、稟父母遺體之日、身體髮膚不敢毀傷者、是孝之始也、捐館之後、卒哭小祥大祥、至于今日三十三年追修、深堪^(體力)丹衷、力竭孝道、猶如事生、中間許多大善事、終不爲魔難所擾、以盡終始美、不是大丈夫能事、末世希有事乎、以之推原、孝公居士、平生秉心無二、忠於君上、孝於父母、武以安國、信以懷民之所感也、夫至內有陰德、見光榮、千金之嗣、人之所不測也、譬如源深則派流益遠益激、根深則枝葉彌盛彌大、固毋可疑焉、若猶養之功至無功、前程不可測焉、古云、只行好事、莫問前程、是也、良以一大藏教五千四十八卷、釋尊四十九年三百餘會說、然光祿縮於一念之頃、轉得無有遺餘、試問、此經未轉先、收在何處、今日轉至百千萬卷、又從何得來、須知人々方寸中、本有如是無盡藏陀羅尼門、無盡藏三昧解脫門、一切智慧福德海、自威音以前、直至于今、全不缺少、佛言、一切諸佛及諸佛阿耨菩提法、皆從此經出、此經者何也、所謂人々本有一卷經也、此經在凡不滅、在聖不增、流出一切父母、一切鷓鴣鵲噪、晝明夜暗、春生夏長、法法塵々、皆無不演此經義、華嚴曰、塵說刹說衆生說三世一時說、何怪之乎、諸人只要常轉此一卷經、六祖大師云、心迷法華轉、心悟轉法華、者箇道理、昧之者坐飯籬邊終日叫飢、明之者衣裡珠不

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月二十日

三二七

從人得、久立珍重、復舉、百丈大智禪師、一日在方丈坐、忽有一僧、哭入云、父母俱喪、請師擇日、丈曰、來日爲汝一時埋却、(案)大惠禪師曰、者箇因緣、如何提持、如何下語、又曰、父母俱喪、請師擇日、來日爲汝一時埋却、提持亦提持了、下語亦下語了、切忌作禪在口唇皮膾上會、拈曰、父母俱喪、請師擇日、來日爲汝一時埋却、者箇因緣、爲者僧提持也得、爲古人出氣也得、就中有譚訛處、若人檢點得出、今日供養、功不浪施、一拂、

○賴清、尊氏ノ招キニ應ジテ上京スルコト延元元年五月十八日ノ條ニ見ユ、

二十四日、已前東福寺住持一清夢寂ス、

東福寺三世

〔扶桑五山記〕

五山山城州慧日山東福禪寺住持位次

三十 無夢和尚、諱一清、嗣玉溪、塔于天得

菴、應安元五月廿四寂、

○五山傳、五山歷代等同ジ、

一以ノ下
火法語

〔大道和尚語錄〕

乾小佛事拈香

無夢和尚下火

覺天雲臥月何運、性海舟行岸不移、昨夜一人發真去、社鵲啼斷杜鵑枝、恭惟、前往當山無夢清禪師大和尚、識得大唐國裏無禪師、信受日本國裏有知識、疏通玉溪正流、而激曹溪波浪、運出寶福家財、而助東福寂寥、長篇短篇、語言有味、橫說豎說、辯才無窮、至其末後一句驚人、非我舌頭三歎所及、一顆寶珠、照耀江湖、〔乾〕人我山、饒益世間、今日擊碎、遊戲三昧、地闊天寬、佛祖肺肝、正恁麼時、仲夏漸熱、且居清涼樹下一句、作麼

遺偈

士德ノ祭文

生、打圓相云、五月榴花照眼明、

〔友山錄〕

中祭天得無夢和尚

維應安元年歲次戊申六月初二日、友末士德、謹具蔬果齋饌、再拜告祭于前住東福無夢和尚大禪師之靈曰、維師、出玉溪之門、與余同爲惠日之孫、而師長余七歲、德臘俱尊、及乎論其推敲、初无二彼、猶如弟昆、誠是蘭之得孫、其道必存、中年航海而遊大元、快奮鵬搏之壯志、高駕鯨浪而駿奔、窮異域之絕境、叩諸老之門闥、〔開九〕師典大藏於新吳百丈、余居後版于姑蘇承天、同在大方辦事、飯來復此聯軒、於戲、如師德業、五山雖領其三四、不爲分外、惜哉、叢林絕无公論、世緣已畢、遽返真源、法梁既折、天地黯昏、遺誠不許江湖道舊一切祭典、蓋慮一衆之勞煩、而疇昔情義之所鍾、余亦不能无言、尚享、

大智寺ニ
藏主タリ

〔東海一漚集〕

五白歷譜

應安元年戊申 夏五月、作祭無夢和尚文、

〔友山錄〕

中題跋

題悼無夢和尚頌軸

二覺居雪竇、三佛過蔣山、奔走四方之龍象、猶如萬派之肅海、大栢宗匠得人則山增其高也、如珠之在淵、草木自然滋、余私謂、惠日之門智覺、〔二以〕少林、〔二禮〕天得三老、巋然鼎立、誰敢道秦无人乎、惜哉、天得永逝、司南之車、既折其軸、行者其與誰共歸、況余於夢翁、〔二禮〕日本大唐五十年前畏友、彼此老大、來董此山、各自退居東庵、又分隣壁之光、情之所鍾、義之所

士德ノ序

哀悼頌軸

圓月祭文
ヲ作ル

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月二十四日

三三二

南嶽ニ游
守一ノ餞
偈

一無夢友、聚首雄峰二三載、實有而若無者也、今春掌藏鑰、凡出一言半句、必驚群駭衆、可敬可羨、職解游岳、率此以壯行色云、

爛泥一悖影團々、聳人兩耳毛骨寒、無夢舌頭本無骨、禪在口邊胡亂屈、傳來此語驚幽栖、至今頭縮三寸低、靈光堂上喜復喜、得此寧馨非偶爾、它年此話行扶桑、梅洲一派流水香、手上竹篋握三赤、打雨敲風無祖佛、勸君休弄摩尼珠、一顆兩顆阿誰無、明朝且去游南嶽、萬里秋空飛一鶚、

至順癸酉秋七月

靈境幽栖守一再々 拜字乎

幽栖

宋字

惟堂

宋字

宗派并續傳灯六ニ惟堂トアリ、此印モ唯乎、

紙内、豎一尺一寸、横二尺三寸六分、表具、上下鼠色ノ絹、中柿地ノ金紗、一文字白地ノ金紗、一風帶トモ、二月廿八日ニ小袖ヤ宗是持來、類筆終ニ見不申候へ共、似物トハ不見候間、正筆タルヘシカ、宗是間柄ノ人久持之ト被申候、左様之由來於有之ハ、定而可爲正筆候、朱点有之タソ、

宗派

無準師範

雪岩祖領

欽乎

虚谷希陵

唯堂守一

〔江月宗玩墨蹟鑑定記〕

原題墨 四十三 寬永十七辰十八巳兩年上蹟之寫 〇筑前崇福寺所藏

一出處從來自不期、滄波從簡偶應機、大千沙界俱旅跡、一箇回身何處歸、雲去帝鄉寧有

□、誠因海藏愈輪輝、漁夫一見休相訪、吾家無人罷無時、

百丈清藏主、將還日本、出示前淨慈靈石翁餞行之偈、因次韻云、

元統三年十二月三日

文智老人覺恩 書于雲門千峰之閣、

紙ノ内、ヨコ一尺三寸七分、豎一尺三分、表具、上下淺黃絹、中カキ地今織ノ金ラソ、一文字風帶今織白地金ラン、六月十二日、奥山宗巴カ來候、何トモ知ヌモノ由申遣也、

〔了庵清欲筆偈頌〕

〇守屋孝藏氏所藏

獨坐大雄峰、有什麼奇特、轉得一大藏、自然超語嘿、神通妙用兮手面施呈、換斗移星兮聖凡莫測、捉敗野狐精、擊碎天篷尺、俊鶻梢空亦等間、推眸擡已過新羅國、百丈清藏主徵偈還鄉、書以贈之、

元統乙亥中和節

本覺 清欲

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月二十四日

三三三

歸朝セン
トス

如芝ノ餞
覺恩韻ヲ
和ス

清欲ノ餞
偈

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月二十四日

三三四

惟一ノ餞

〔了堂和尚語錄〕

三 次南堂和尚韻贈清禪客

開口即錯、端的不容、一句道著、喪我門風、直饒壁立萬仞、也須未磨粉春、釋尊推微細禪病、明言五蘊、初祖具真正知見、大破六宗、五葉花開震旦、萬年松在祝融、狸奴倒上菩提樹、午夜金烏海底紅、

〔石室祖瑛筆偈頌〕

○井上房一 郎氏所藏

無夢禪師清公、嘗掌予百丈東陽法兄之藏、又從吾龍翔法兄遊兩年、道聚山中、一日來別言、將再參龍翔、因賦一詩餞之、

雪竇 祖瑛

已明崖瀑無窮意、更淺山雲不住心、一覽大千纔跬步、普觀塵劫只如今、野桃照日花全放、陰洞含風春未深、送子出門生百感、龍河西望壽長吟、

至元三年正月十八日

朱印

朱印

朱印

〔名僧行錄〕

四

延文四年己亥二月十日受請、四月五日入寺、

山門、廣大法門、猶若虛空絕表裏、看々、新長老入作底、驟步紅日麗天、清風匝地、

東福入寺法語

大新ニ再參ス 祖瑛ノ餞

佛殿、諸佛身金色、有福相莊嚴、噢、只得施三拜、不消更再瞻、禮拜、土地、有靈而應、有感而通、聰明之下、昧者何容、祖堂、眉毛厮結、鼻孔相拄、四七二三、西天此土、拈香、此香、爇向爐中、供養在大唐三十年所參見諸大善知識、以報一句一語請益之恩、又拈香、此香、全無香氣、不直分文、今日對衆拈出、奉爲前任普門凌霄殿主先師玉溪和尚、不是報恩酬德、要且知有來所、

東福退院頌

名字住持真可憐、不知頭上有蒼天、一節今日下山去、放得生涯樂暮年、

〔東海一漚集〕

二 無夢住東福江湖疏并序

東福禪寺虛席、檀越大丞相、敦請無夢禪師、起井山之隱、膺此補處、吁、公舉久廢、宗門寂寥、妄庸競馳、以住持爲奇貨、善良見忌而永沈、無復應世弘法之念、所在精藍、皆成業窟、陰翊王度之道、殆乎熄矣、今斯一舉、出於相公護法之志、俄以選掄本色宗門之爪牙、拔乎淹滯之中、凡吾雲水之流、散在江湖者、僉曰、叢林稍復古規、喜不自勝、且扑且躍、而況吾儕與禪師舊好最厚者乎、輒緝儷詞、同伸慶幸之

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月二十四日

三三五

退院ノ頌

圓月ノ江湖疏并ニ序

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月二十四日

三三六

誠云、

陽晶升乎雲表、岑樓光明、潮信通乎海濱、映澹早接、矧惠日高照豈比陽焰翁赫、而玉溪深流何同狂濤春撞、克紹乃高乃深之家、還他至精至信之士、恭惟、某人、高踏孤峻、允塞精淵、十年讀菟奇獵珍、千首偈貫珠綴璧、泛孟遠渡光孝分座、儘謂象駕屈兔蹊、衣錦榮旋新山領徒、自奏牛刀屠鷄肋、開普門力振乃祖墜緒、鎮寶福座還故家青氈、常憶陪行孤山、詠蘇柳尋逋梅迷六橋煙雨、亦知卓錫雄嶺賞仙花、步靈境睨千尺山巒、往事焉用捕風、來盟請可温故、

普門寺十
九世

〔普門寺前住籍〕

十九 無夢和尚

一清○禪利住持籍異事
ナキヲ以テ略ス

〔大道和尚語錄〕

乾 住慧日名山東福禪寺語錄

次惟、普門堂頭無夢禪師老和尚、知大唐國無禪師、信小蓬萊有大祖、不嘯萬松山之月、

聞吟千松林之風、不欲爲人之先、不患爲人之後、誠是末世榜樣、本色住山者也、○上下
略、全

文ハ延文元年正月是月一以
東福寺住持トナル條ニ收ム、

〔井山本末改簿〕

○寶福 寺所藏 住持歷代

第三世無夢 諱一清、應安元年戊申五月廿四日寂、塔號般若、嗣法玉溪惠璿、

備中寶福
寺第三世

略傳

釋一清、未詳何許人、師玉溪、遠游宋地、經三十載、參數十員善知識、究宗乘要旨歸朝、嗣法玉溪惠璿、住寶福、定井山僧規、大振宗風、故唱準開山云々、傳詳載于續扶桑禪林僧寶傳、

〔井山本末改〕

○寶福 寺所藏 寶福寺末派

一龍雲山報恩寺

建立年代不明、永正年中再興、
在于同郡門前村、

開山不明、勸請開山無夢一清、

一常福山真如寺

長享年中建立、
在于同郡小山村、

開山不明、勸請開山無夢一清、

一明見山田上寺

古者日蓮宗也、寬永年中改宗而成禪宗、
在于同郡足守村、

開山不明、勸請開山無夢一清、

一如意山安樂寺

康元年中建立、貞和年中再興、
在于同郡日羽村、

開山鈍庵慧聰傳見寶
福寺下、

無夢一清同前、

一安禪寺

康安年中建立、
在于同郡市場村、

備中安禪
寺ノ開山

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月二十四日

三三七

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月二十四日

山林領主伊藤信濃守殿寄附、

開山無夢一清傳見寶福寺下

〔寶福寺文書〕

中備

〔寶福〕寺 〔寶福〕ノ二字ニカケテ未印アリ、印文「清三」乾坤曆、下同シ、

〔山門〕所定置條々式目事

- 一「當」寺專致公家武家御祈禱道場也、開山以來所定置勤行、大凡叢林所有之禮儀等、一々不可闕矣、
- 一「住」持職事、本寺末寺門徒中、選有德行才智器用之仁、以可召請之、今時多以黨類作長老、以財福爲住持、是皆佛法破滅之因緣也、尤可慎之、
- 一「寺」內山林甲乙人等致狼藉者、任公家武家被仰下之旨、宜禁斷之、不拘制止者、以彼仁名字、注進公方、可被處罪過云々、
- 一「寺」領田畠等、其煩出來之時、本寺末寺門徒中、同心談合、可被致其沙汰云々、
- 一「當」寺衆屋未完備、門徒法眷一同各添氣力、運手脚、以可事造營、所謂莊嚴報地、引接衆生、是皆諸佛出世之本懷也、
- 一「上」津江庄年貢、當於本寺造營僧食等、〔住方〕常位相互融通、以可成就諸事、但此年貢內每

寶福寺ノ規式ヲ定ム

寺領備中
上津江莊
年貢米五
十石ヲ東
福寺天得
庵ノ支用
ニ宛ツ

行人人工
ノ懈怠ヲ
戒ム

年分伍拾石、以當東福寺天得庵之支用、庄家管領之仁、無懈怠可致其沙汰、當庵者、井山總門徒寄身之地也、是故如此所定置也、向後管見蠶測之輩、不知佛法興行、門徒繁昌之理、破今朝所定置之法、致他日失所依之憂、不可入衆數云々、

一「滿足」庵、靈照庵兩塔頭、田產微薄之間、爲房主僧難守塔頭、仍分上津江庄年貢內運上、以可助支用云々、

一「行」者、人工等、懈怠懶墮、不致奉候之輩、兩班者舊評定、加治罰、取上給田畠等、退出其身於寺外也、無用之俗人、附相識之僧、取在家之緣、居住寺內、作屋敷田畠等妨、衆議一同、不可許容、若有寺家之所益、有寺家之功勞者、宜評定以可安置之、衆徒存公心驗察之、

右門徒中內外堅守此旨、不可違背、若有違背之輩、吾門不許共住、所定之法如件、

延文六年廿月廿三日

住山〔一〕 (花押)

〔住山〕ノ二字及ヒ花押ノカケテ未印ニ類ヲ推ス、印文詳ナラザルモ無夢及ヒ一清ナルベシ、

兩班

首座譽震 (花押)

書記乘光 (花押)

都寺志玉 (花押)

維那志詢 (花押)

次住〔老匠〕 (花押)

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月二十四日

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月二十四日

三四〇

次住 (花押)

父母寺 器哉 (花押)
 善根寺 慎終 (花押)
 守福寺 守源 (花押)
 稻保寺 空蘊 (花押)
 永福寺 將秀 (花押)
 弘誓寺 高郁 (花押)
 隣松庵 繼遙 (花押)
 靈照庵 志篤 (花押)

耆舊

金龍寺 祖心 (花押)
 大義庵 自璨 (花押)
 滿足庵 智通 (花押)
 修禪寺 明意 (花押)
 賢福庵 繼玄 (花押)
 紹洞庵 守益 (花押)

○本文書、年月日及ビ兩班、耆舊ノ署名ニカケテ朱印十四顆アリ、印文吉備里人、

〔天得ノ二字ニカケテ一清ノ朱印アリ、印文無事、下同シ〕

〔天得〕庵

一「當庵」者、井山開山門徒一會寄宿之地也、爲塔主人闕如之時者、自總門徒中、撰器用人、可被差置之、
 一定人數事、塔主一人、侍者一人、行者一人、々工二人、以上五人、月別每人三百、都

天得庵ノ
 規式ヲ定ム
 寶福寺總
 門徒寄宿
 ノ地
 住侶ノ人
 數

料足

遠江内田莊

塔主ノ年限三箇年

合一年中拾捌貫、衣物者行者分三貫、人工二人分三貫、都合六貫、油炭料足月別三百、一年中都合參貫陸百、修正中節々料足貳貫肆百、總都合參拾貫、以此内一々可支配者也、

一「僧」行者、人工之事、可爲時塔主之計云々、

一上津江庄年貢内伍拾石、爲天得庵分、可納般若庵、時坊主并門徒老僧達加評定、運上一年中受用參拾貫、殘分可爲天得庵造營料足者也、

一遠州内田庄大野忠意禪門寄進分年貢事、料足到來之時、都鄙之門徒加評議、可致修造之功者也、

一當庵寄宿僧衆事、不可胡亂止住、若於遠塔主之意輩者、可停止共住、若又塔主非法之時者、總門徒訪都鄙之義、可改易之、但塔主之職限三年、隨意不可進退者也、

一庵中動用什物繪本尊聖教細々家具等、任目錄之旨、能々取調、不出庵中、可存遠大之計、若有紛失者、當住之庵主可補之、古語云、護惜常住、如守眼睛、豈虛語哉、可存知此旨云々、

右守條々定置法、不可違犯、若越規繩之輩者、不可爲門徒、爲永代所定置如件、

〔應安〕元年 申三月十一日

天參 (花押)

繼榮 (花押)

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月二十四日

三四一

至秀(花押)

繼最(花押)

志近(花押)

真順(花押)

真雄(花押)

繼照(花押)

智通(花押)

自璨(花押)

譽震(花押)

自廓(花押)

知酬(花押)

高郁(花押)

將秀(花押)

志全

寶福寺芝丘(花押)

(芝丘ノ二字ニカケテ朱印アリ、印文書卷)

○本文書、繼目表ニ一清ノ朱印、及ビ裏ニ一清ノ花押アリ、

一「清(花押)」住持復圭(花押)

定置 上津江庄内三別所事

一寺原者、附満足庵、

以彼年貢料足可致當庵造營之功云々、

一麥草者、附靈照庵、

以彼年貢料足可致當庵之造功云々、

上津江別荘
内三別所
滿年貢ヲ
照庵足靈
庵ニ般ス

一高澤者、附般若庵、
彼年貢料足之内、以半分可致庵中造營、以半分可爲茶湯料足云々、
右可守定置之旨、但満足、靈照二庵者、先度配分米二石、雜穀一石、自常住方雖出之、
可停止者也、仍爲永代所定如件、

應安元年 戊申三月十八日

一清(花押)

(一清ノ二字ニカケテ朱印アリ、印文書卷)

〔名僧行錄〕 四

自贊

一握竹篔、不分背觸、說黑道黃、將曲爲直、不覺滿地葛藤、豈知參天荆棘、侮慢乎赤鬚、
胡、罵冒乎白拈賊、行脚南方兮一百城、歸來日本兮六十國、不直半文錢、那有一人識、
只者隨身破沙盆、留與兒孫盛蘆菔、

貞治甲辰仲秋日

無夢一清書于惠日山天得菴、

次佛成道韻

明星常自照雲間、何事瞿曇被眼瞞、昨夜山僧眠失曉、通身不覺雪霜寒、

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月二十四日

自贊

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月二十四日

三四四

佛手

我手何似佛手、西南袖將北斗、然雖妙用神通、推門依前落白、

觀音

歷々耳中能見色、明々眼所只聞聲、長年靜坐對崖瀑、那得工夫度有情、

玉溪和尚贊

惠日直傳圓照孫、山陽禪刹大開門、可憐文武百年火、暖氣烘々今尙存、

和固山和尚見寄

霽月光風瞻仰外、蒼梧翠竹自爲隣、吾來最喜依栖好、四海遺翁百世人、

和大道和尚移桂韻

誰知金粟活如來、分得天香下土栽、不信今霄和月看、探花郎是翰林才、

自咲

世間誰管事紛々、靜坐茅簷到夕曛、白髮重添今歲雪、青山猶帶去年雲、

〔永明院文書〕

○山城

瑞雪紛々滿帝城、瓊樓玉殿□明々、忽焉今見太平象、盡十方空五穀精、

南禪 一以

慧璿ノ像

一鞏ノ韻

一以ノ韻

自咲

瑞雪ノ頌

一以ノ韻

德眞ニ偈

悟逸ノ道

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月二十四日

三四四

佛手

我手何似佛手、西南袖將北斗、然雖妙用神通、推門依前落白、

觀音

歷々耳中能見色、明々眼所只聞聲、長年靜坐對崖瀑、那得工夫度有情、

玉溪和尚贊

惠日直傳圓照孫、山陽禪刹大開門、可憐文武百年火、暖氣烘々今尙存、

和固山和尚見寄

霽月光風瞻仰外、蒼梧翠竹自爲隣、吾來最喜依栖好、四海遺翁百世人、

和大道和尚移桂韻

誰知金粟活如來、分得天香下土栽、不信今霄和月看、探花郎是翰林才、

自咲

世間誰管事紛々、靜坐茅簷到夕曛、白髮重添今歲雪、青山猶帶去年雲、

〔永明院文書〕

○山城

瑞雪紛々滿帝城、瓊樓玉殿□明々、忽焉今見太平象、盡十方空五穀精、

南禪 一以

看雪家々人上城、山河表裏玉壺明、兩岐麥秀遺蝗陷、持呪師僧益致精、

前東福 無夢

〔龍巖德眞筆偈頌〕

○根津美術館所藏

無夢出昏須語、爲證一偈美之、

至人想念何曾有、寐語皆從亂想生、空臥夜床多少睡、獨聽樓鼓數殘更、

至順二年辛未重陽後十日、寓廬山東林樂間自覺道人老巖德眞書于菊邊、

朱印

朱印

〔樵隱悟逸筆偈頌〕

○鄉誠之助氏所藏

無夢偈號、至順三年壬申八月十九日、南閩雪峰佛智樵隱悟逸、書于三毬堂、

心若不睡自消亡、妄想纔形昧本光、譏破功名了如幻、邯鄲一枕冷炊香、

信筆爲清侍者作

朱印

朱印



〔名僧行錄〕

四

無夢號爲日東清侍者賦

迷頭認影取何爲、靦面相呈不汝欺、黑漆竹篋打出去、任教罵我弗慈悲、

爲日本清上人書勉之、雲中無見識漢、一清上人請贊、雲中無見識漢、

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月二十四日

三四五

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月二十四日

三四六

右爲說無夢偈號、至順三年八月十九日、南閩雪峰佛智樵隱悟逸、書于三毬堂、

〔蕉軒日錄〕天 文明十六年六月廿三日、晴、(六條)先師真前燭茶香、誦咒三拜、看觀(先觀)無見

錄、(妙倫)倫斷橋、(方山文選)文寶山、(觀無見)觀無見、(佛鑑)佛鑑三世孫也、(寶山)寶山者東福大明國師所參見之祖師也、無

見者天得無夢參底之人也、無夢畫像求贊、々書雪中無見識漢也、有髮像也、不知今猶存

否、恐亂世失之、略○下

〔明極和尚語錄〕四 偈頌古風類

無夢清侍者

兩楹奠羽成虛語、一枕黃粮亦妄言、白日青天開眼睡、喚他不醒只恬然、

〔名僧行錄〕四

玉溪和尚贊

無相之相、太虛蕩々、絕点絕清、一爲無量、坐山陽之道場、走東海之龍象、用文武火、

煨聖鎔凡、示抽顧機、興風作浪、叢林耆龜、人天榜樣、双徑如此讚揚、後代從教鑽仰、

夫是之謂東福聖一之真子凌霄圓照之的孫玉溪和尚、

日本一清首座、持素絹請贊其師玉溪和尚、故爲泚筆、

皆至正庚寅(十年) 徑山不動軒主祖銘題

先觀ニ畫
像ヲ求
ムトノ説

楚俊ノ偈

祖銘ニ慧
請琢ノ贊ヲ

無夢號

○偈略ス、郷誠之助氏所
藏悟逸自筆ノ偈ニ同ジ

清侍者雅號無夢、出紙須語、爲證一偈美之、

又

○偈略ス、根津美術館所
藏德眞自筆ノ偈ニ同ジ

至順二年辛未重陽後十日、

又

○偈略ス、明極和尚語錄
四所載ノ楚俊ノ偈ニ同ジ

寓廬山東林樂間自覺道人龍岩德眞書于菊邊、

〔月江正印筆偈頌〕○守屋孝
藏氏所藏

無夢

困亦惺々覺不迷、清風一枕絕思惟、睡魔倒退三千里、蝶與莊周捨不知、

清禪人請賦

雲峰 正印

(正印ノ字ニカケテ未印アリ、印文月江)

〔石室祖瑛筆偈頌〕○守屋孝
藏氏所藏

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月二十四日

三四七

正印ノ道
號頌

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月二十四日

三四八

正印無夢
歌ヲ作ル
祖瑛ノ和
韻

育王(正印)月江和尚、爲百丈清藏(二清)主作無夢歌、雪竇山人祖瑛和之云、

鄧峰喝出無夢歌、掃空睡蛇并睡魔、譬如獅子一哮吼、百獸腦裂爭奔波、有人持向乳峰觀、
妙高頂上日卓午、推出枕头起來看、政是夢中添寤語、三世諸佛也說夢、六代祖師也說夢、
若言覺了夢元空、須信覺時亦是夢、(語力)有夢者亦是妄、說無夢者亦是妄、有無雙遺亦非真、
斷妄求真成大謬、說有說無俱話墮、婆羅金鼓猛槌破、燒却周乙占夢書、携取枕頭別峰臥、
忽然得夢也不原、瞞殺仰山與香嚴、百千圍績奚不出、教渠到此須茫然、無夢師無夢師、
憑君說與鄧峰、知夢幻伴爾、四百个甲子、剛然謗却何所爲、莫教被夢惡發、擁放冷泉
亭、日夜猿號夢不成、此時應作有夢歌、大斧斫了手接抄、何如空生口不開、千峰六花白
皚々、

〔了菴和尚語錄〕六

偈頌

次松月翁韻送清上人

佛身無爲不墮數、往復要須行大路、鐵壁銀山拶得開、四方八面無回互、沒絲毫全體露、
禪之龍律之虎、苦中之樂樂中苦、清禪清禪聽我言、先天未是心之祖、

〔寂室錄〕下之一

書簡

寄無夢和尚

某拜覆、雄峰前前板座元禪師、違奉既是幾乎三十有餘年、然無一日不在瞻望風采之中、

正印錢偈
ヲ作ル
清欲ノ和
韻

元光ノ宿
所ヲ訪フ

士偈一和
ノ韻ヲ和
ス

忽辱過訪、忻慰之至、豈可勝言哉、第恨象駕登途太疾、不獲陪從清談、究盡款曲耳、
羊皮一片、鹿茶二袋、聊表微忱者、幸勿罪浼瀆、伏希慈亮、爲道自重、不備、

〔友山錄〕下

七言八句

和無夢新晴韻

又將佳句賞春晴、三復令人樂性情、識得榮枯皆是數、何須寵辱謾相驚、
斬新日月輝天宇、鼎盛衣冠滿帝城、若也高才明主舉、莫辭一出救蒼生、

和無夢寄石室兼簡無夢老師

全機石虎射藍田、一句靈明劍倚天、老氣逼人頻咄々、清風滿肚飽便々、
西丘法道行今日、東土宗猷興晚年、但願紫泥鳳脚去、翩然飛下井山前、

和無夢和尚書懷韻

憶昔江湖汗漫遊、南投閩嶺北通幽、歸來故國三千里、又歷京華二十秋、
堪笑匏瓜懸不食、胡爲萍梗跡長浮、晴窓發興寫懷抱、倒把須彌作筆頭、

和無夢和尚感懷

一遽廬內且容身、不拂古菱花上塵、北阮曾聞元富貴、南隣依舊只孤貧、
千林霜白松彌茂、三逕秋深菊尙新、但得能持終始節、自然惟德及於人、

〔友山錄〕下

次韻答無夢座元

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月二十四日

三四九

一清ノ善
玖ニ寄ス
ル韻ヲ和
ス

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月二十四日

三五〇

音書三日隔東華、咫尺還同萬里涯、且莫頻々旋故里、是山何處不爲家、

次無夢韻

莫辭垂手入紅塵、祖道安危今在身、出則爲人正時節、何妨妙唱發陽春、

同

龍象元非驢所堪、王臣貴禮聽高談、釋迦元受燃燈記、四七相傳到二三、

次無夢贈治翁韻

〔在下同シ〕
〔大治水餅〕

治翁今夏住隣庵、一字未嘗容易談、想見人天推穀日、栗蓬千顆飽來參、

〔若木集〕

拾遺

和無夢謝煎茶清供之韻三首、

灰心浪志對寒爐、世事從教爲我疎、忽見煎茶奇妙語、短才急和檢殘書、

煮茗高譚擁暖爐、絕隣風味亦恢疎、青原鉗斧堪分付、遣使江西已達書、

大家相聚共開爐、滿室春回味不疎、打著老兄心下事、知音去後要來書、

〔空華集〕

十二

賀純監院充知殿頌軸序

略○上 純字無雜、故東福無夢清和尚其受經、與余有葷寺之雅、故感而序之、是歲佛誕前三

日也、

〔續扶桑禪林僧寶傳〕

一 寶福無夢清禪師傳○傳文

一純學ヲ
ク一清ニ受

一清ノ永
鉛ニ贈ル
偶ニ次ス
妙在ニ清
ノ煎茶ヲ
贈ル韻ヲ
和ス

性激ノ贊

著書

法系

贊曰、凡爲生死大事、參尋師友、得一言半句、亦不可不知恩、世俗嘗有一字師之說、僧胡不然、其稱知恩者、莫清公若矣、公始出世、祝香云、此香供養在大唐三十年、所參見諸大善知識、以報一言一句請益之恩、吁、其知本與、公措心如此、實可爲參學者千秋之龜鑑也歟、

〔慧日山撰述書目〕

放收集

無夢一清禪師

〔佛祖正傳宗派圖〕

普門玉溪慧瑋
東福無夢一清

〔佛祖宗派圖〕

楊岐方會

普門玉溪慧瑋

東福無夢一清

萬壽東林譽震

東福眞祖音〔羅之〕

〔本朝禪林宗派五山十刹〕

天得菴門派

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月二十四日

三五二

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月二十四日

佛中井開山、甲利也、

普門 玉慧瑋

天得、南遊、參觀無見、

東福 夢一清

萬壽 東林譽震

〔慧日山宗派圖〕

坤 天得派

備中寶福

門 玉溪慧瑋

天得祖

東 無夢一清

無雜一純

信菴和尚

門 三克一恕

天得

東 眞牧祖蘊

萬 壽 東林譽震

〔東福寺諸塔頭并十刹諸山略傳〕

天得庵 文和年中創建、

開基東福第三十世無夢一清禪師

塔所

花押

聖一三世嗣玉溪椿 在宋三十年、

應安元年戊申五月廿四日寂、

○一清、德見等ト共ニ元ヨリ歸ルコト觀應元年三月十五日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔花押彙纂〕

釋家 一清 之部



○寶福寺文書(備中)
應安元年三月十八日置文

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月二十四日

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月二十六日 二十八日 是月

三五四

〔印章彙纂〕釋家 一清

印章



○寶福寺文書備中
延文六年三月二十三日置文



○寶福寺文書備中
應安元年三月十八日天得庵置文

二十六日、乙未北朝雜訴沙汰、

〔愚管記〕十二 五月廿六日、乙未、晴、大外記師茂朝臣來、召前、今日雜訴御沙汰、

萬里少路大納言、勘解由少路前中納言、今日初候、別當等著記錄所之由、所相語也、師茂

退出之間、左大史量實相續來、又召前也、傳聞、葉室前中納言同被召加傳奏云々、

二十八日、丁酉北朝小除目及ビ僧事、

〔愚管記〕十二 五月廿八日、丁酉、陰、入夜雨降、於陣被行小除目云々、信秋奉授荒

序賞、讓子息音秋、被任左近將監、有尻付、○本月十三日ノ條參看、今夜又被行僧事云々、

是月、妙顯寺雜掌正立、故堀河具親ノ寄進シタル同寺二條堀河敷地ヲ

葉室長顯
ヲ傳奏ニ
召加ヘラ
ハ

安堵セシメラレンコトヲ北朝ニ請フ、

〔妙顯寺文書〕六 ○山城

〔雜掌書〕
二條堀河地目録地券等

目安

妙顯寺雜掌正立申二條堀河敷地事

右當所者、故堀河入道内大臣家御寄附之間、多年領掌無相違、而彼御子孫具書カ中將家雜掌、

自舊冬及違亂之間、爲明胤奉行就訴申、雖被封下訴狀、不及陳答、結句立點札於作昌、

致濫吹之條、無謂次第也、凡佛陀施入之地、不被悔返之儀、公法分明也、其上擬被破父

祖之行事、教令違犯之咎、匡道者乎、彼寄附狀等案文進覽之、早被止雜掌妨、欲被成下

安堵勅裁而已、

應安元年五月 日

〔妙顯寺文書〕二 ○山城

二條堀河敷地事、寄進之證文爲分明者、向後又不可有相違候也、敬白、

後十月廿日

妙顯寺長老

南朝正平二十三年 北朝應安元年五月是月

三五五

佛陀施入
ノ地ハ海
返サレズ

六月大盡
庚子朔

三日、壬寅是ヨリ先、美濃土岐頼雄、同國ニ大興寺ヲ剏ム、是日、周澤龍
請ゼラレテ同寺ニ入院ス、

入院法語

〔龍湫和尚語錄〕

東龍湫和尚住濃州雲龍山大興禪寺語錄

應安元年六月三日入院、

指山門云、雲龍山高峙、資福門新開、顧視左來來、

佛殿、世尊傳迦葉、迦葉傳阿難、傳箇什麼、門前刹竿、便禮拜、

據室、橫主作家爐鞴、內外圓成、大地一條鐵、卓丈鎚下百鍊精、

勅黃、佛運大輿、須憑此力、何也、擧勅太平天子勅、

鈞帖、我法外護、功勝賢子、片言隻字、趙璧隋珠、

拈香云、此一瓣香、爇向爐中、恭爲今上皇帝祝延聖壽萬歲萬歲萬々歲、恭願、皇帝陛下、

舜日騰輝、九天雲靜、堯風永扇、四海浪平、

此香、皮膚脫盡、唯有中心、遇賤賤於泥土、遇貴貴於黃金、爇向爐中、供養天龍初祖特

賜夢窓正覺心宗普濟國師、以酬法乳之恩、

上堂

上堂、作家相見、兩鏡當臺、才動唇吻、滿面塵埃、不動唇吻、措一問來、有麼、問答乃
云、人人赤肉團上、有一無位真人、二儀之外、淨裸々兮不受一塵、萬象之中、赤洒々兮

獨露全身、亘今亘古、絕比絕倫、爲祥爲瑞、如龍如麟、隨緣赴感則無偏無黨、猶如印衆

水之月輪、應物現形則或大或小、恰似入群卉之芳春、山僧恁麼提唱去、未免妄指陳、且

道、作麼生是無位真人、拈主丈云、八紘開壽域、卓一下云、一氣轉洪鈞、

〔龍湫和尚語錄〕 西龍湫和尚行狀

應安元年夏六月、就濃州揖斐庄、關雲龍山大興禪寺、當經始之日、有龍含珠而出、衆皆

愕然、師以拄杖打落而埋之、乃名其山曰龍珠峯、落成時有天花之瑞、檀越祐康捨莊田若

干畝以充僧糧、官陞寺位排諸山列、○上下略

〔前田家所藏文書〕 古蹟文徵三

寄進

美濃國揖斐庄大興寺領事

一所 同庄內大隴寺、

一所 同國衣斐大隴寺、

一所 同國吉田庄領家職、小野、吉田、中野、下田等、

一所 尾張國稻木庄內散在、

一所 同國野田御厨地頭職內一方、

南朝正平二十三年 北朝應安元年六月三日

經始ノ日
奇瑞アリ

諸山ニ列
セラル

頼雄寺領
ヲ寄進ス

右以彼所々、永代所令寄附于當寺也、子々孫々不可有敢違亂妨、仍寄進之狀如件、

貞治五年卯月廿七日

沙彌祐康(花押)

〔扶桑五山記〕

二日本禪院諸山座位次事
諸山 東山道 美濃州

雲龍山大興禪寺開山龍湫和尚、

〔參考〕

〔美濃明細記〕

四
寺院

一大興寺 雲龍山 右同、

(損卷)
大野郡イヒ山城アト東麓一丁程山上大興寺ト云、

大興寺者、土岐賴清二男イヒ出羽守賴雄ノ法號也、夢想國師(傳)副法龍淑(傳)和尚開基、當寺中絶、萬治年中再興、妙心寺末寺トナル、

〔美濃明細記〕

五
土岐系圖

賴清○事蹟

賴雄(朱書)イヒ出羽守

大野郡イヒ城築居之、改號イヒ、法號大興寺祐禪居士、イヒ大興寺無墓、年月
不知、

十一日、庚戌足利金丸滿氏、武藏平一揆ヲ伐ツ、尋デ上杉憲顯及ビ同朝房等ヲ率キテ、同國川越ニ之ヲ追撃ス、

〔花營三代記〕 六月廿八日夜、關東事、去十一日於武州平一揆打負合戰、引籠川越

館之由、使者到來云云、

〔市河文書〕

三
伊佐早謙氏所藏

(附卷)
「かまくら殿御かんの御きよりそかは越合戰」

去月十七日河越合戰之時、致忠節之條、尤以神妙也、向後彌可抽戰功之狀、依仰執達如件、

應安元年閏六月廿三日

(上杉憲顯)
沙彌(花押)

市河甲斐守殿

(損卷)
「市河甲斐守」

市河甲斐守賴房、同彌六入道代難波四郎左衛門尉基房軍忠事

右平一揆并宇都宮以下凶徒蜂起之間、爲退治御發向之處、屬御手馳參、六月十七日武州河越合戰之間、致散々太刀打、至于府中致宿直畢、○中略、全文ハ九
月六日ノ條ニ收ム、

應安元年九月 日

承了(上杉賴房)(花押)

〔諸國古文書抄〕

二

南朝正平二十三年 北朝應安元年六月十一日

金丸市河賴房ノ
戰功ヲ褒

賴房武藏
府中ヲ警

上杉賴房
ノ證判

南朝正平二十三年 北朝應安元年六月十一日


三六〇

著到

善波十郎左衛門尉胤久

右宇都宮并武藏平一揆等就存野心、去六月四日令土肥入道同道、馳參鎌倉之處、同六日夜高大和入道并三浦下野入道以下野心之輩沒落訖、然間令警固御所、同廿七日屬于當大將御手、罷向江戶牛嶋、○中略、全文ハ九月六日ノ條ニ收ム、

應安元年十月 日

承了 


〔諸家文書纂〕

九 萬澤家文書

南部右馬助入道法言申軍忠事

右爲凶徒退治、去六月十五日自甲州御發向之間、屬御手、同十九日馳參武藏府中畢、同廿九日令發向當國牛嶋之處、御敵等令退參之間、歸參府中御在所畢、○中略、全文ハ九月六日ノ條ニ收ム、

應安元年十月 日

承了 

〔喜連川判鑑〕

從三位左兵衛督氏滿童名金王丸于時九歲

應安元閏六月十七日、平一揆退治ト

シテ、憲顯若公ヲ供奉シテ河越合戰、御敵悉ク退失ス、宇都宮ニ一揆有ケルヲモ退治有

善波胤久
土肥入道
鎌倉ニ馳
參ス

江戶牛嶋
ニ抵ル

南部法言
甲斐ヨリ
武藏府中
ニ馳參ス

金王丸鎌
倉ニ歸ル

一揆與同
者ノ恩賞
地ヲ沒收
ス

朝房鎌倉
ニ歸リ禪
問フ周信
ニ

テ、鎌倉へ御歸陣、其外今度平一揆ニ與セシ輩、罪ノ輕重ニ依テ御成敗アリ、

〔鎌倉大日記〕 二月五日、武州河越館平一揆閉籠、爲退治若君御發向、閏六月十七

日御敵悉退、仍野州被攻宇都宮城、則降參畢、御敵平一揆與同罪科輩、以薩埵恩賞觀應年中拜領地仁者、本領三分一被收公、

〔建長寺年代記〕 坤 應安戊申六月、武州河越合戰、

〔神明鏡〕 下 六月十七日、武州河越合戰、

〔妙法寺記〕 應安元 河越合戰、

〔空華日用工夫略集〕 閏六月二日、上杉霜臺北征賊、々退後歸自武城、今日特入山

中、故府君影前炷香、與余對談、遂問、近因謀叛者、爲國殺太多、罪當歸何人、答、當

歸用兵者、又問、一念不生、還有受罪者耶、余勵聲曰、且莫大話、又問、某近臨戰場、

乃悔悟、坐禪工夫、莫是怕生死底小乘心麼、余曰、莫作此念、是乃一念不生之基根也、

問、必竟作麼生用心、余良久云、會麼、公曰、不會、余云、且去別時來、○下

廿一日、霜臺、須賀二居士來扣、賀乃龐居士之類也、問曰、大慧大悟十八度、小悟無

數、有是、答曰、無、曰、一念不生、無佛衆生、是什麼經文、曰、經有經師、又問、

南朝正平二十三年 北朝應安元年六月十一日

三六一

南朝正平二十三年 北朝應安元年六月十一日

三六二

作麼生用心工夫去也、答曰、只如此用心、如此工夫去也、霜臺進問、造寺供僧功德多
少、答曰、甚多、曰、謂無功德、響、答曰、在祖師則可矣、臺無語、

○平一揆蜂起スルニ依リ、憲顯、京都ヨリ鎌倉ニ歸ルコト三月二十八日ノ條ニ、朝
房、憲春等、宇都宮ヲ攻ムルコト九月六日ノ條ニ見ユ、

前大僧正實相院增仁寂ス、

〔愚管記〕 十二 六月七日、丙午、晴、實相院門跡事、增仁僧正所勞危急之間、讓與常

住院良瑜僧正、申安堵勅裁云々、此事僧正增仁談合之間、依有存旨無左右許諾了、以家
門若公可令相續之旨、增仁良瑜兩僧正出狀畢、

十二日、辛亥、晴、實相院增仁僧正去夜入滅云々、

廿日、己未、晴、巨倉庄事、增仁僧正先年契約之間、一圓可令讓附家門之由、去延文四
年契約之、其時已被下被聞食由勅裁了、

〔寺門傳記補錄〕 十四 僧傳部戊 法務前大僧正增仁 實相院、南瀧院、如意寺、八十一世

增仁 圓光院前關白之子、前大僧正增基入室弟子也、一身阿闍梨護持僧、至法務前大僧
正、號後寶昭院、元亨四年二月十九日拜親師大僧正、入壇灌頂于解脱寺、年二十三、臘
十一、康永四年補長吏、貞和四年還補、應安元年六月十一日化、年六十有七、

實相院門跡ヲ良瑜ニ讓ル

近衛家ノ子息ヲ以テ相續セシムベシ

巨倉莊ヲ近衛道嗣ニ讓ル

傳記

後寶昭院ト號ス長吏ニ補ス

護持僧

平等院執印

准后ヲ所望ス

世系

傳法灌頂ヲ增基ヨリ受ク

〔諸門跡傳〕

四 國城寺 ○華頂要略百四十三所收

實相院 增仁大僧正、大納言冬經卿男、圓光院關白基忠公猶子、增基僧正受法灌頂資、護

持僧、康永四年月日補園城寺長吏、貞和四年月日還補長吏、應安元年六月十一日寂、

〔未書〕 〔後傳〕 〔六十一歳イ〕號寶昭院、

〔僧官補任〕 平等院執印次第

寺 增仁 元德二任、後圓光院殿御代、

〔愚管記〕 五 延文四年八月廿九日、己丑、晴、○中 增仁僧正准后所望事書送給之、自

是付遣頭右中辨許之由、頻被懇望之間令執達畢、

〔尊卑分脈〕 藤原氏 北家 鷹司

冬經 ○事蹟 略ス、

基教 從二位、參議、左中將、實者冬經卿舍弟也、寺 母同兼冬、

增仁法務大僧正、三井長吏、南瀧院、實相院、增基僧正入室、又兼助僧正弟子、應安元六十一入滅、母、

〔園城寺傳法血脈〕

坤 增基前大僧正授廿九人、百二十

無量壽 南瀧院、圓光院前關白猶子、大納言冬經卿息、一身阿闍梨、入室受法等大阿、年廿三、戒十一、元亨四一二十一十九、解脱寺、十
二人、實勝鏡、經禪鏡、乘伊神一、行瑜、靜伊、宗澄、未入壇、良衍學頭、朝現頭、房仙、賴

南朝正平二十三年 北朝應安元年六月十一日

三六三

南朝正平二十三年 北朝應安元年六月十一日

傳法灌頂
ヲ六人ニ
授ク

房聰

良瑜

公覺

隆順

慈順

聰譽

千助、範順鉢、廣乘鉢、

增基
增仁前大僧正授六人、實相院、如意寺、號後寶昭院、法務、長吏、四十五、始行、師匠存日、受後百廿九

佛眼
房聰 中納言、開如院、
一切如來寶 中宮大進藤時經子、 貞和二一五一廿四、如意寺、十人、長聲、宗澄神、恒智、

廣乘、行辨、定修、賴辨、朝幸、元珍、康怡頭、快慶助、

降三世
良瑜殿、如意寺、光明院、
大吉祥 一身阿、元靜助、年十九、戒三、如意寺、十二人、長聲、宗澄神、房聰、兼

順、公覺、泉惠、行辨、定修、賴辨、康怡頭、隆順、快慶、兼覺、

戒波、
公覺 二位、年五十一、戒卅四、同一同一七、同所、四人、宗澄神、房聰、隆順、經

八葉文殊
現唱、

大日
隆順 按察、年卅四、戒十五、同一同一九、同所、四人、宗澄神、神、房聰、公覺、

彌勒
經現唱、

八葉觀音
慈順 年 戒 貞和六一二一、同所、四人、宗澄神、房聰、公覺、經現唱、

普賢

勝三世
聰譽 中納言、年廿七、戒八、貞治二一六一十二、法花山寺、六人、房任、泉尊、延信、

同
隆順 奉、隆一唱、清珍、入道一僧正隆順、清珍、止一、助阿、房聖法印、

金剛界付
法

〔實相院文書〕 九 山城 金剛界付法次第

大和尚阿闍梨、以此法傳付前大僧正大和尚阿闍梨增仁、大和尚阿闍梨、以此法傳付准三

宮大和尚阿闍梨良瑜、○上
下略

胎藏界付
法

胎藏界付法次第

大和尚阿闍梨、以此法傳付前大僧正大和尚阿闍梨增仁、大和尚阿闍梨、以此法傳付准三

宮大和尚阿闍梨良瑜、○上
下略

實相院門
跡次第

〔實相院文書〕 九 山城 實相院御門跡

增基 三井長吏、大僧正、
圓光院攝政關白基忠公御子、

增覺 三井長吏、大僧正、
兼教公御子、

增仁 三井長吏二ヶ度、大僧正、
圓光院禪閣基忠公爲子、實多經卿御子、

靜深 三井長吏、僧正、
後淨明寺左大臣經平公御子、

良瑜 三井長吏三ヶ度、大僧正、准三后、
本名靜助、光明照院攝政關白兼基公御子、

密教相承
血脈

密教相承血脈

南朝正平二十三年 北朝應安元年六月十一日

南朝正平二十三年 北朝應安元年六月十一日

三六六

增基 實相院前大僧正、

四十三、廿九人、

增仁

〔後醍醐〕 實昭院前大僧正、實相院、

良瑜 法輪院准后、又號常住院、本名靜助、

四十一、廿三人、

○增仁、園城寺長吏トナルコト貞和元年是歲ノ條ニ、月食御祈ヲ勤仕シテ、大僧正ニ轉ズルコト同四年六月八日ノ條ニ、園城寺長吏ニ還補セラル、コト同年是歲ノ條ニ、增基ヨリ南瀧院坊舍所領本尊聖教等ヲ讓與セラル、コト正平七年七月十七日ノ條ニ、法定院等ノ檢校トナルコト延文四年十月七日ノ條ニ、南瀧院門跡ヲ良瑜ニ讓與スルコト本年五月六日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔花押彙纂〕

釋家 增仁

柳

○實相院文書〔山抄〕
應安元年五月六日南瀧院門跡讓狀

花押

山名時氏冬

禁裏仙洞 御所寺 領關白 儀ハ半濟 領ハ半濟 諸國本所 領ハ半濟 沙汰付

十三日、壬石山寺座主僧正杲守、衆徒ト確執アリ、是日、衆徒、杲守ヲ幽閉シ、坊人ヲ殺害ス、

〔愚管記〕 十二 六月十八日、丁巳、晴、傳聞、石山座主杲守僧正與滿寺々僧確執、去

十三日夜僧正坊人數輩爲寺僧被殺害、大略無殘所、於僧正者被幽閉寺中云々、

〔石山寺年代記錄〕 上 〔貞徳〕 七年六月十三日、阿闍梨乘俊、僧宴盛、勝寬上座化、

十五日、甲幕府内談、

〔花營三代記〕 六月十五日、内談、山名左京大夫入道并子息〔時氏〕中務少輔始行之於御所、

十七日、丙幕府、辰北朝ニ奏シテ、寺社本所領ノ半濟法ヲ定ム、

〔建武式目〕 并當御代建武 ○前田 寺社本所領事、應安元六十七、布施禪

禁裏仙洞御料所、寺社一圓佛神領、殿下渡領等、異于他之間、曾不可有半濟之儀、固可

停止武士之妨、其外諸國本所領、暫相分半分、沙汰付下地於雜掌、可令全向後知行、此

上若半分之預人、或違亂雜掌方、或致過分掠領者、一圓被付本所、至濫妨人者、可處罪

科也、將又雖有本家寺社領之號、於領家人給之地者、宜准本所領歟、早守此旨、云一

圓之地、云半濟之地、〔密〕嚴密可打渡于雜掌矣、

南朝正平二十三年 北朝應安元年六月十三日 十五日 十七日

三六七

本所一圓
知行地半
改動稱スベ
カラズ

公卿知行
ノ地頭職
ハ半濟ヲ
停止ス

近江守護
佐々木氏
頼ヲシテ
遵行セシム

南朝正平二十三年 北朝應安元年六月十七日

三六八

次自先公御時本所一圓知行地事、今更稱半濟之法不可改動、若令違犯者、可有其咎焉、
次以本所領誤被成御下文地事、被宛行替之程、先本所與給人各半分可爲知行、不可有守護人之綺矣、

次月卿雲客知行地頭職事、爲武恩被補任之上者、難混本所領、可停止半濟之儀焉、

〔花營三代記〕 六月十七日、

寺社本所領事、依勅許所被定下也、早分國之所々守事書、嚴密令遵行、來月中可被申左右、更不可有緩怠之條、依仰執達如件、

應安元年六月十七日

〔細川頼之〕
武藏守判

佐々木大夫判官入道殿

○事書、建武式目追加
ニ同ジキヲ以テ略ス、

同日御前御沙汰始之、

衆山城中務少輔入道出仕之、

〔東寺百合文書〕 さ四十之五十上
○山城

東寺雜掌頼憲申

遠江國村櫛庄本家役事

義詮ノ遺
命ニ依ル
國々ノ守
護代ヲ召
ラシテ實
施ス

右當庄者、○中略、全文ハ開六
月是月ノ條ニ收ム、爰近年爲一國平均之法、被付給人之間、被致半濟沙汰畢、而

今於寺社領者、一圓可被返付之旨、寶篋院〔義經〕殿依爲御遺命、今年六月被定其法之上、去月

十七日被召出國々守護代、於寺社領者九月中悉可被返付之、若被違越日限者、可有殊沙

汰之旨、嚴密被仰含之畢、○中略

應安元年十月 日

〔京都將軍家譜〕 上 義滿 應安元年六月、禁裡仙洞殿下并神領寺領條々沙汰、停止

武士濫妨、

〔永源師檀紀年錄〕 乾 〔應安元〕 同年六月、樞府ヨリ諸山ノ寺領ヲ沙汰アリ、

○幕府、寺社ト人給トノ相論ニ關スル事書ヲ定ムルコト文和元年十月十五日ノ條

ニ、寺社本所領ニ關スル條規ヲ定ムルコト延文二年九月十日ノ條ニ、山城ノ寺社本

所ニ其ノ所領ヲ還付スルコト去年六月二十七日ノ條ニ見ユ、

十八日、〔丁〕豊後戶次頼時卒ス、

〔戶次系圖〕 ○筑後

五代○事蹟
貞直略ス、

南朝正平二十三年 北朝應安元年六月十八日

三六九

南朝正平二十三年 北朝應安元年六月十八日

三七〇

法名玄繼

長子直光
嗣

六代 戶次二郎、兵庫頭、
賴時 丹後守、從五位下、

鎮西評定衆、應安元六月十八日卒、法名大智院玄繼、母二階堂氏女、

七代 戶次太郎、右馬助、
直光 丹後守、從五位下、

尊氏將軍落胤之男也兵衛佐直冬朝臣爲元服、號右馬介直光、應安元年十月十七日、父丹後守所領諸職等安塔之御判令頂戴、明德三年六月十三日卒、法名玄保杉山、號大聖寺、

直時 二郎、豐前守、
號片賀瀬

幸弘 勘解由左衛門、

成松 式部少輔、

冬田

怒留湯

井上

〔大友系圖〕 向日

貞直 〇事蹟
略ス、

頼時 太郎、
兵庫頭、丹後守、

康永四年四月乙酉八月廿九日天龍寺供養之時、將軍家尊氏公渡御其地、于時頼時遂供

奉、前陳隨兵十二騎之内勤之、康安元年八月七日自公方義詮公所領諸職等被成下安塔之御判、應安元年戊申六月十八日午時卒、法名玄繼、時二頼時之所領一七千貫也、

直光 右馬頭、將軍尊氏公御息、
左兵衛佐直冬公ニ元服、

明德三年壬申六月十九日卒、法名玄保、

直時

豐前守

少輔殿

幸弘

成松

〔豊後諸士系圖〕 〇領田叢
史二所收 戸次氏系圖

貞直 〇事蹟
略ス、

高貞 戸次太郎、於北條相模守平高時爲元服、號
高貞、頼時、丹後守、兵庫頭、實貞直姪也、

直元 戸次太郎、右馬介、治部
太輔、從五位下、丹後守、

奴留湯六郎

井上七郎

〔大友系圖〕 〇豊
後

南朝正平二十三年 北朝應安元年六月十八日

三七一

前名高貞

南朝正平二十三年 北朝應安元年六月十八日

三七二

重秀 左衛門尉、戸次、
法名佛阿、

太郎 法名道惠、

時親

貞直

若宮靈祥
高貞

戸次左近將監、改松岡、
重頼

筑後守
直時

丹後守
頼時

康安四年八月廿九日天龍寺供養
時、將軍家先陣隨兵十騎之内、

右馬頭、法名玄保、

直光

津守

清田

冬田

白杵

奴留湯 井ノ上

〔系圖纂要〕

十八 藤原氏十二
大友

貞直 兵庫頭、
丹後守、

頼時 兵庫頭、丹後守、從
五下、鎮西評定衆、

頼秀 本直光、右馬助、下野守、從五下、右兵衛佐直冬加冠、予直字、後屬尊氏改今名、

○頼時、尊氏ノ天龍寺供養ニ隨從スルコト貞和元年八月二十九日ノ條ニ、戸次朝直等ト共ニ南朝左中將尹房ト契約スルコト正平二年六月一日ノ條ニ、頼時ノ子直光、直冬ヨリ周防深野郷半分ヲ預ケラル、コト正平九年三月二十四日ノ條ニ見ユ、

花押

〔参考〕

〔花押彙纂〕 部 戸次頼時

源頼時

○大友文書(豊後)
建武四年十一月二十六日施行狀

頼時

○阿蘇文書(豊後)
正平二年六月一日契約狀

十九日、^{戊午}石清水八幡宮神人、神輿ヲ奉ジテ入京ノ風聞アリ、幕府、之ヲ制止ス、

〔愚管記〕 十二 六月十九日、戊午、晴、^{○中}依神人訴訟、八幡神輿可有入洛之由風聞、武家加制止云々、

南朝正平二十三年 北朝應安元年六月十九日

三七三

南朝正平二十三年 北朝應安元年六月二十二日

三七四

二十二日、辛酉相模禪興寺住持啓初大寂ス、

〔東山塔頭略傳〕

建仁寺大龍庵ニ入ル

大龍菴

大同名啓初

寮舍附

從龍軒開基

從龍軒

開基大同西堂

師諱啓初、號大同、嗣法寶覺、歷住寶林、法雲、並播磨州、禪興、開同慈寺於筑前州、爲第

一祖、應安元年戊申六月廿二日示寂、塔于寶林、

〔空華集〕

二 七言絕句 送選書記歸赤松山并敘

戊申夏、前寶林大同禪師、遷主福源、未幾示寂、有上足金仙選記史、將奉骨石歸山而塔之、有感二偈贈行、其一則兼寄赤松公自天居士、通方外之好也、

阿師靈骨玉珊瑚、包裹歸藏何處山、潭北湘南休著眼、蒼龍不在窟中蟠、爲僧不羨居官寺、肯羨人封萬戶侯、但羨金仙方外去、袈裟穩伴赤松游、

〔石室玖禪師語錄〕

偈頌 送選書記實師翁大同和尚遺囑歸豐州、

同人遺囑ヲ實シテ豐後萬壽寺ニ歸ル

我別金陵三十歲、萬壽寺 蔣山何識在豐州、飛泉巖樹青猿境、明月蘆花白鷺洲、遺弟弊衣裁布

褐、阿師靈骨寄扁舟、孝情金石如君少、萬里歸程海國秋、

〔石室玖禪師語錄〕

拈香 大同和尚忌拈香

疇昔聚頭廬嶽北、今年告訃海門東、難將聚散論交道、兩地山川一夢中、恭惟、前往禪興大同禪師大和尚、玉雲二世芳業、友梅 雪村直下家風、隨順諸緣則直得和泥合水、寢削萬機則何妨人法俱空、參歷諸方、三十餘歲、上無攀仰、下絕己躬、石火電光、住山鋤斧、橫拈倒用、途中家舍、隨身宮殿、八達七通、道貌巍巍、偃千尺寒松於巨壑、圓音落落、激半夜霜鐘於豐峰、涅槃常住身有靈有驗、真性地藏無始無終、只如翠巘雲收、碧潭月皎、還有與大同和尚相見分也無、挿香 自他曾未隔毫髮、一炷兜樓主伴融、

〔空華集〕

十九 初大同住禪興諸山疏

大道岐分、可以南可以北、素絲色變、染於蒼染於黃、不有至人而出興、孰正邪師之過謬、當仁不讓、如說而行、某、自出關西、橫行海上、法雲寺 金華勝地、昔從赤松而游、福源名山、今中青銅之選、近取諸身遠取諸物、必也正名乎、飛者宗鳳走者宗麟、可以爲師矣、快駕大龍而行雨、式慰久旱以望雲、

〔佛祖宗派圖〕 楊岐方會

南朝正平二十三年 北朝應安元年六月二十二日

三七五

諸方參歷三十餘年

善玖ノ拈香法語

禪興寺入院周信諸山疏

法系